

第23回

# 三遠南信サミット2016 in 東三河

い  
県境連携の蓄積を活かした  
三遠南信地域の創生  
~ともに生きる未来を目指して~

## 事|業|報|告|書



## 2016.2.15月

・穂の国とよはし芸術劇場PLAT / • ホテル アークリッシュ豊橋 / • ホテル アソシア豊橋

## 目 次

1 第 23 回 三遠南信サミット 2016 in 東三河 プログラム	2
2 全体会　主催者等あいさつ・来賓祝辞	4
3 全体会　基調講演	13
4 全体会　SENA事業報告	31
5 「道」分科会　要旨	33
6 「技」分科会　要旨	57
7 「風土」分科会　要旨	81
8 「山・住」合同分科会　要旨	101
9 報告会　要旨	122
10 交流会	131
11 三遠南信地域住民セッション（同日開催）　要旨	132



# 1 第23回 三遠南信サミット2016 in 東三河 プログラム

*San-En-Nanshin Summit 2016 in Higashimikawa*

- 日 時 平成28年2月15日（月）
- 会 場 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT  
ホテル アークリッシュ豊橋  
ホテル アソシア豊橋
- 主 催 三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）
- 共 催 三遠南信地域経済開発協議会
- 後 援 農林水産省、経済産業省、国土交通省、長野県、静岡県、愛知県
- 参加者 約600名
- 日 程
  - 1 全体会（13:00～14:50）[場所：穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 主ホール]
    - あいさつ
      - ・主催者あいさつ  
三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長 浜松市長 鈴木 康友
      - ・開催地域代表あいさつ  
三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長 豊橋市長 佐原 光一  
三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長 豊橋商工会議所会頭 吉川 一弘
      - ・来賓祝辞  
経済産業省中部経済産業局局長 波多野 淳彦 氏  
国土交通省中部地方整備局局長 茅野 牧夫 氏  
農林水産省東海農政局次長 小平 均 氏  
愛知県副知事 中西 肇 氏

○基調講演

- 演題① : 「これから的地方創生について」  
: 内閣府地方創生推進室次長 諸戸 修二 氏
- 演題② : 「神山プロジェクト～創造的過疎から考える地方創生～」  
: NPO 法人グリーンバレー理事長 大南 信也氏
- 演題③ : 「三遠南信の芸能文化の力」  
: 静岡県立大学名誉教授 須田 悅生 氏

○報告

- 「三遠南信アンテナショップ事業について」  
「三遠南信自動車道開通時の経済効果について」  
三遠南信地域連携ビジョン推進会議事務局長 藤野 仁

2 分科会 (15:30~17:20)

○「道」分科会 [場所：穂の国とよはし芸術劇場 PLAT1階 アートスペース]

- テーマ：「新しい人の流れを支える広域幹線道路ネットワークづくり」  
コーディネーター：豊橋市長 佐原 光一

○「技」分科会 [場所：ホテルアソシア豊橋 5階 ザ・ボールルーム A]

- テーマ：「地域の産業集積を活かした新たな雇用の創出」  
コーディネーター：株式会社サイエンス・クリエイト 常務取締役 白坂 敬之介 氏

○「風土」分科会

- テーマ：「広域連携による歴史・文化・自然資源などの地域資源の新たな価値創造」  
コーディネーター：野外教育研究財団理事長 羽場 瞳美氏

○「山・住」合同分科会

- テーマ：「安心して住まうことのできる持続可能な地域づくり」  
コーディネーター：豊橋技術科学大学副学長 大貝 彰 氏

3 報告会 (18:00~18:30) [場所：ホテルアークリッシュ豊橋 ザ・テラスルーム]

- ・各分科会の報告 : 各分科会コーディネーター
- ・サミット宣言 : 豊橋市長 佐原 光一
- ・次回開催地域代表あいさつ : 飯田市長 牧野 光朗

4 交流会 (18:30~20:00) [場所：ホテルアークリッシュ豊橋 ザ・グレイス]

5 その他

- ・三遠南信地域住民セッション (10:00~12:00)
- ・三遠南信地域経済開発協議会役員会 (10:30~12:30)

## 2 全体会　主催者等あいさつ・来賓祝辞

*San·En·Nanshin Summit 2016 in Higashimikawa*

○主催者挨拶

■三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長

浜松市長 鈴木康友



皆様、こんにちは。本日は、第23回となります三遠南信サミット in 東三河ということで、この豊橋市の会場に関係省庁の皆様、地方公共団体の皆様、経済界の皆様、大学関係の皆様、そして市民活動団体の皆様など、本当に多くの関係者の皆様にご参加をいただいております。心から厚く感謝、御礼を申し上げたいと思います。

さて、今回23回目となりますサミットでございますけれども、今回のテーマは、県境連携の蓄積をもとに、これから三遠南信連携の新しい創生、新しい時代を切り開くということがテーマでございます。これまでさまざまな取り組みをしてまいりまして、全国にも珍しい県境を超えた地域連携を行ってきたわけでございますけれども、いよいよ地方創生という時代の流れの中にあって、新しい地域の未来を考えていくという、ある意味で新しいステップ、新しい時代に入ってきたのではないかと思います。

ご存じのとおり、昨年は地方創生元年と言われました。一昨年は元岩手県知事の増田寛也さんが、通称「増田レポート」という衝撃的なレポートを発表されて、今後25年以

内に基礎自治体の約半数近くが消滅可能性都市になるというレポートを発表したり、人口減少というものは、いかにこれから地方に大きな影響を及ぼすかということを赤裸々にレポートとして発表されました。それを受けて、これから地方を元気にし、地域を元気にし、そして日本を元気にしていくということで、国では「まち・ひと・しごと創生本部」をつくり、地方創生ということに大きく取り組みを始めたところでございます。

ご案内のとおり、それぞれの自治体で今将来の人口ビジョンを実現するための総合戦略策定が義務づけられておりまして、皆さんも大変な思いをして今つくられて、あるいはもうつくっていらっしゃる方もいると思いますけれども、そういうことを全ての自治体が取り組まなければいけない時代になったわけです。

地方創生という大きな方針を見ますと、それぞれの地域が地域の資源、あるいは地域の特徴を生かして、知恵も出し、汗もかき、それぞれが頑張って自分たちの地域をよくしなさいよ、そういうところには国も応援していきますよ、恐らくこういうスキームだと思います。

それと同時に、今國の指針の中で大変重要視されているのは都市間の連携とか広域連携ということでございます。こうした大きな枠組みの中で地域の再生を図っていくということも重要な視点となっているということで、この三遠南信、県境を超えた連携、今まで我々が地道に取り組んできた結果、これから時代、逆にこれを生かしていかなければいけない時代に入ってきたのではないかと思います。

今日は地方創生でありますとか、あるいは地域支援、あるいは地域文化を生かした地域振興、こうしたことについて、3人の方から基

調講演をいただきまして、さまざまな問題提起のヒントをいただき、その後の分科会の議論につなげていきたいと思います。

午前中の経済界の皆さんとの会議でも話題になっていましたけれども、一昨日はついに新東名高速道路が愛知県全線開通いたしまして、いなさジャンクションから豊田東ジャンクションまで愛知県、静岡県が大動脈でつながったことになります。そして、引佐で三遠南信自動車道と新東名高速道路が接続をされているわけでございますけれども、三遠南信自動車道はまだ部分供用で、新東名高速道路の開通とあわせ、今、大変大きな経済波及効果を生み出しているところでございます。我々が想定した以上に、それぞれの沿線地域にいい効果をもたらしているという報告も伺っております。

今日は、こうした三遠南信自動車道の経済波及効果については、後ほどご報告もあろうかと思いますけれども、これから地域を挙げて、この道路の1日も早い全線開通を目指して引き続き取り組んでいかなければならぬと思いますし、また、2027年にはリニア中央新幹線開通予定でございます。こちらも待望久しい事業でございますので、引き続き地域を挙げて推進をしていきたいと思っております。

こうしたハード整備に加えまして、今日問題提起もされると思いますけれども、この三遠南信地域のアンテナショップ、これはバーチャルアンテナショップでございますが、こうしたものを通じて地域のすばらしい資源や物産を大いに発信し、こうした発信力の強化ですか、地域の文化を活用した地域振興ですか、こうしたソフト事業にも今後、力を入れていかなければならぬと考えております。

いずれにいたしましても、今日は行政だけではなくて、経済界、大学関係者、市民団体の三遠南信に関わる、あらゆる関係者の皆さんにお集まりでございますので、ぜひ限られ

た時間ではありますけれども、前向きで有益な議論をしていただければと思います。

結びに当たりまして、地方創生という新しい時代の流れの中にあって、この三遠南信という広域連携が、まさに新しい時代を開くと、こうした連携になりますよう、バージョンアップされますように心から期待をいたしましてご挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

## ○開催地代表あいさつ

### ■三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長 豊橋市長 佐原 光一



改めまして、皆様、こんにちは。当地、豊橋市の市長の佐原でございます。まずもって、ようこそ豊橋市へおいでいただきました。心から歓迎を申し上げます。

この PLAT という施設でございますが、普段はこんなに男性ばかりではないです。1番ここに立ってみて違和感を覚えるのは、そこでございます。大体、催し物は演劇を中心とした催し物が多いですから、半分以上女性なのですが、今日は男性ばかりです。もう少し女の人が目立たないといけないと、いろいろな意味で感じながら、舞台の上から拝見をさせていただいております。

昨年、開催をされました浜松のときは、浜松のアクトシティの中のホールを使って全体会をやりました。あのホールは音楽を中心と

したホールです。ここは演劇を中心としたホールなので、さまざまな部分でホールのつくり込みが違っております。1番大きく違うのは、まず声の響き方を聞いていただいておわかりだと思いますが、演劇のホールは響かないようにつくってあります。なぜかというと、いろいろな音がまざり合うとセリフが聞き取りにくくなるからです。

それから、もう1つ、2階が急傾斜だなと思われるかもしれません、これは舞台からお客様の距離を短くするためです。これは演技者の方たちを見て、表情までよく飲み取れるように、場合によっては女優さんのしわの1つも、2つもわかるようにすることから、こういうつくり込みになっております。

そうした意味で、去年と全然趣の違う舞台構成にはなっておりますが、皆さんこの会に寄せる熱い気持ちは全く同じ、それぞれの地域の熱い思いが集まって、この地域に、このホールに集まっていたいたものと思っております。願わくは、もう少し女性が増えていただくようにと思いますが、本当にありがとうございました。

さて、先ほど、もうほとんどのことを会長がしゃべってしまいましたので、私がしゃべることはほとんどなくなりました。県境を超えて、長い23回という回数を刻む県境を超えての広域連携のサミットであります。古くは天竜川の流れ、そして豊川の流れ、水運が地域の産業を支える最も重要な機能であった時代には、この2つの川の流れに支えられて、この地域は一体となって発展をしてまいりました。そして産業革命、明治を迎えて、重いものを運ぶには当時は鉄道がありましたから、飯田線ができ、二俣線ができ、産業を支える鉄道路線ができて、さらなる飛躍を遂げました。そして先ほどありましたように、道路網が地域の産業を支える大変大きな柱になりました。現在において、今度は三遠南信自動車道ができ、そして豊橋市においては浜松

三ヶ日・豊橋道路がつながることによって、この地域がさらなる飛躍を目指したいと、こうやってみんなで力を合わせて頑張っているところかなと思います。

そんな中で、実は気になることが1つあります。ここに国の方がお三方いらっしゃるのですけれども、支えるエリアが違います。産業界の方は、先ほども議論の中で出てきましたから、お気づきだと思いますが、実は経済産業省においては、私ども豊橋市を中心とする東三河は中部経済産業局で、そして浜松市を中心とする遠州地域、そして飯田市を中心とする南信地域は関東の経済産業局の所轄になります。それでは国土交通省の方が盤石かといいますと、中部地方整備局におきましても、道路と川とポートアイランドといろいろなものを含めると、結構我々の地域は分担されてばらばらになっていますし、同じ国土交通省でも運輸局はテリトリーがまた違ってくるという、大変複雑な構造になっております。私たちは、そんな中で1つになって、多くのことをみんなで力を合わせて大きくなっていきたいという、その気持ちを国に伝えるときに、ぜひこうしたものも1つの局でまとめて面倒を見ていただけるようになったらいいなと思っています。こうした力になるのが、私たちの連携の大きなまとまりである、行政のまとまった力であると思っています。

今日のサミット、それぞれの分科会で、それぞれのお立場で皆さんの地域をよくしよう、みんなと一緒になってもっと元気になろう、その力をご披露いただき、そして議論をして1歩ずつ前へ進む、その過程を踏んでいくそのような会だと思っています。ぜひ皆様方の気持ちを1つにしていただいて、そして総合力として、この三遠南信地域が多く飛躍する貴重な1日にしていただけたらと強く願っております。

最後になりますが、お集まりの皆様、ぜひこの豊橋のまち、東三河をご堪能いただくと

とともに、この三遠南信地域の発展について、これからもますますのご指導、ご支援をよろしくお願いしたく申し上げます。

今日の1日が、皆様方にとって大変実りの多い1日となりますこと、そしてたくさんの仲間ができますことを心よりお祈り申し上げまして、またご訪問を歓迎申し上げまして、開催に当たっての当地のご挨拶とさせていただきます。本日は本当にありがとうございます。

■三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長  
豊橋商工会議所会頭 吉川 一弘



改めまして皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました豊橋商工会議所の吉川でございます。商工会議所商工会、開催地を代表いたしまして、一言ご挨拶をさせていただきます。

本日は、三遠南信地域の行政、議会、そして商工会議所、商工会の皆様方、そしてさらに、住民団体の皆様方には遠方より、また、大変お忙しい中、東三河豊橋市へ足をお運びいただきまして、誠にありがとうございます。

また、平素は三遠南信地域の振興発展に格段のご高配をいただきしておりますご来賓の皆様方におかれましても、ご多用中にもかかわらずご臨席を賜りまして誠にありがとうございます。

さて、我が国の経済でございますが、皆様方がご承知のとおり、日本銀行のマイナス金利導入の決定にもかかわらず、為替相場の円

高進行、そして原油燃料価格の下落等大きく変化をいたしておりますけれども、それまでは貿易収支も改善の方向に進んでおりました。

また、政府の地方創生に重点を置いた経済再生の取り組みと相まって、地方経済においても設備投資に根強い意欲が見られておりまし、インバウンドツーリズムにおいても、昨年は過去最高となる約2,000万人の外国人旅行者が来日いたしておりますし、地方の消費拡大に大きな影響を与えたところでございます。

当地域におきましては、長く待ち望んでおりました新東名高速道路の愛知県区間が昨日開通をいたしました。新しい東西国土軸の実現でございますが、観光や物流の側面はもとより、地域社会や産業活動の全体に大きなインパクトをもたらすものと、今後の地域に与える効果に期待をいたしているところでございます。

一方、我が国は人口減少、少子高齢化社会に入りまして、人口は首都圏への一極集中が進んでおりますけれども、地方経済におきましては深刻な人手不足が続いており、地方経済が再生に向かうに当たりまして大きな課題となっているところでございます。こうした課題を克服していくために、地域の行政や私ども産業界もそれぞれの新たな役割や地域の将来像を模索する必要に迫られているところであります。

そこで、ますます広域的な視点に立った地域の取り組みが不可欠であります。広域連携によりまして、地域の諸課題を解決していくかなければなりません。この三遠南信サミットも回を重ね、これまでさまざまなテーマで議論が進められてまいりましたが、三遠南信地域の連携は、我が国の県境連携、広域連携の先駆けでありますし、今新たな時代に向かって行動に移す時期に来ております。

私ども産業界といたしましても、足元の景気対策、中小企業・小規模事業者対策をはじ

め、三遠南信自動車道や浜松三ヶ日・豊橋道路などの整備促進、新産業創出や地域を支える人材の育成・確保など、広域的な視点に立ちまして、行政や他の経済団体、大学等とも連携・協力して、この三遠南信地域の活性化に取り組んでまいります。

最後になりましたが、今回はサミット会場として、この豊橋のまちなかにございます穂の国とよはし芸術劇場 PLAT をはじめ、ホテルアーフクリッショ豊橋、そしてホテルアソシア豊橋の3会場で開催をさせていただいております。豊橋・東三河の顔とも言うべき駅前に、まちなかの活力ある空気を感じ取っていただければ幸いに存じます。

また、本日のサミットでのご講演や分科会での議論が、ご参会の皆様方にとりまして実り多きものとなりますようにご祈念を申し上げまして、私からのご挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。

## ○来賓祝辞

### ■経済産業省中部経済産業局局長

波多野 淳彦 氏



ただいまご紹介いただきました中部経済産業局長の波多野でございます。一言ご祝辞を述べさせていただきます。

本日、第23回三遠南信サミットが盛大に開催されますこと、心からお喜び申し上げます。経済活動は市の境、県の境、国の境を超えて発展してまいります。そうした拡大する経済

活動をそれぞれの地域が積極的にサポートする仕組みとして、三遠南信という取り組みは大変に意義のあるものと思います。静岡県、長野県、愛知県にまたがる地域を道でつなぎ、産業を振興し雇用の場をつくり、また消防や医療で広域的な連携を図るなど、大きな成果を挙げてこられました。

政府では、一昨年12月に「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、地域における雇用の創出、若い人の住みやすい居住環境づくりを推進しておりますが、こちら三遠南信地域では、政府の全体的な取り組みに先駆けて行動されており、ここに深く敬意を表する次第でございます。

中部地域の経済の総合的な発展戦略を取りまとめた「TOKAI VISION」が2014年3月に策定されました。「TOKAI VISION」につきましては、経済界として愛知、岐阜、三重のほか、静岡、長野も含めて5県で策定がされています。中部経済産業局といいたしましては、東海ビジョンで重点分野として取り上げされました自動車、航空機、ヘルスケア、環境の戦略4分野の発展に向けて強力に支援しているところでございます。

昨年11月、53年ぶりの国産民間旅客機 MRJ の初飛行に成功いたしましたが、今後必要となります航空機部品の生産に向け、昨年12月、全国の22の航空機産業クラスターが参加する我が国初の国内航空機産業クラスターフォーラムを開催いたしました。フォーラムには、浜松航空機産業プロジェクト、飯田航空宇宙プロジェクトの方々にもご参加いただき、活発なご議論をいただきました。

また、地域的な防災の取り組みも重要であります。中部経済産業局におきましては、産業防災・減災を目的に一企業の枠を超えて、地域、業界などのグループ単位で事業継続力を強化することを目的とした地域連携 BCP の普及に努めております。災害に強いものづくり中部の構築を推進しております。こちら豊橋

市明海工業団地では、地域連携 BCP のモデル地域になっておりまして、去る 1 月には豊橋市及び明海地区の企業の方々のご協力のもと防災訓練あるいはセミナーなどを実施したところでございます。

最後になりますが、本サミットの開催に当たりまして、これまで多大なご尽力をされました鈴木康友会長を初め関係者の皆様に敬意を表しますとともに、三遠南信地域のますますの発展、本日ご出席の皆様の今後ますますのご活躍を祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。本日はおめでとうございます。

#### ■国土交通省中部地方整備局局長

茅野 牧夫 氏



ご紹介いただきました中部地方整備局長の茅野でございます。本日の三遠南信サミット2016 in 東三河がご盛会の運び、心からお祝い申し上げます。

日ごろから国土交通行政、とりわけこの地域の中部地方整備局が取り組んでおりますさまざまな施策への特段のご協力、ご支援、厚く御礼申し上げます。

この三遠南信サミットは、東三河、遠州、南信州、この3地域が県域を超えて連携して、住民、大学、経済界、行政が一体となって地域振興を図る画期的な取り組みであり、平成6年に第1回が開催されて以降、今回まで23回ということで、長期にわたり継続的に、か

つ活発に活動され大きな成果を上げてきたことに、深く敬意をあらわす所存でございます。

さて、一昨日2月13日に新東名高速道路が開通いたしました。55キロ、新東名高速道路の浜松いなさジャンクションから豊田東ジャンクションまでが開通したわけで、この新しい大動脈の位置づけによりまして高速道路の信頼性が向上し、安全性が確保されたところでございます。

この沿線各地では、既に工業団地の整備、企業の進出が顕著に増加しております、ものづくりの中核のさらなる発展とともに、すぐれた観光資源を有する当地域の観光振興にも日帰り観光圏が広がるなど、大きな効果が期待されているところでございます。

さらに浜松いなさジャンクションで新東名高速道路と直結いたします三遠南信自動車道につきましては、当地域の連携の骨格をなすものでございまして、全体100キロのうち、現道を活用する区間を含めれば約5割が開通しているところでございます。整備している区間のうち飯喬道路の約3.4キロにつきましては平成29年度に、佐久間道路の延長6.9キロについては平成30年度にそれぞれ供用を目指して今整備を進めているところです。特に三遠南信自動車道の1番の難所であります青崩峠のトンネル約5キロにつきまして、パイロットトンネルを今掘り進めているところでございます。この青崩、名前のとおり非常に難所でございまして、マイロナイトという手で触っても崩れるような石が出てきて、崩れやすく、非常に難しいところでございます。けれども、今我々の事務所を挙げて何としても無事完成させるように、掘り進んでいるところでございます。

この地域は三遠南信自動車道だけでなく、新東名高速道路も、リニア中央新幹線も整備が目前に迫っている地域でございまして、夢のような発展が期待されております。この地域がますます発展され、ご臨席の皆様方の

一層のご健康、ご活躍を祈念しまして、簡単ではございますけれども、私の挨拶とさせていただきます。本日はまことにおめでとうございます。

### ■農林水産省東海農政局次長

小平 均 氏



皆さん、こんにちは。東海農政局次長の小平と申します。よろしくお願ひいたします。

本日は、この三遠南信サミットにお招きをいただきまして、ありがとうございます。

まず、関係者の皆様方には、ここに、このサミットが盛大に開催されますことを心よりお祝いを申し上げる次第でございます。

このサミットは23回目ということでございますが、この3つの地域の皆様方が一堂に会しまして、文化、歴史、産業振興等々深く議論を続けてこられたこと、本当に改めて深く敬意を表したいと思っております。

私も信州の生まれでございまして、陰ながらこのような活動に対して、本当に大変心強く感じているところでございます。

さて、最近の食料、農業をめぐる情勢ですが、農業に就業されている方の高齢化、あるいは減少が進み、また他方では国際化が一層進展していく中で、消費者のニーズも日々多様化、高度化しております。一方で、輸出などを含めて、競争力を高める取り組み、あるいは農村の多様な資源を生かした地域の活性化など、力強い動きも見られているとこ

ろでございます。

このような状況を踏まえ、昨年の3月に食料・農業・農村基本計画が閣議決定されました。国民の皆様方に安定的に食料を供給するということで、強い農業と美しく活力ある農村、この実現に向けて農業分野の成長産業化を進める産業政策、そして農業・農村の多面的な機能といいますか、多面的な役割を發揮していく地域政策、この2つの施策を車の両輪として進めることにしております。

また、昨年10月には TPP の協定が大筋合意に至ったということで、我が国の農政も農政新時代というステージを迎えるつあると思っております。農林水産省といたしましても、関係者の皆様に合意の内容を正確に、そして丁寧に説明し、また、皆様方のご懸念やご不安を払拭して進んでいくことが重要と思っております。また、将来の経営の発展に向けて、幅広い支援をしていくこととしております。

さらに、2020年にはオリンピック・パラリンピック東京開催が決定されておりましすし、和食の無形文化遺産の登録もございました。日本という国を世界に知ってもらう機運が高まっているのではないかと思います。今年5月には、三重県で伊勢志摩サミットが開催されます。こうした機会も含め、我が国に訪れる訪日外国人を取り込むインバウンドといったことも注目をされております。

この三遠南信地域、主要な幹線を抱えておりますことから、地域の食や文化も含め、いろいろおもてなしの需要喚起というものがあるのではないかと考えており、地域で連携しながらインバウンドを進めるということも重要なではないかと感じているところでございます。

三河地域につきましても、農業面から見ますと、水田農業が展開されている西三河地域と、花や野菜が展開されています東三河地域とに分かれます。いずれの地域も全国に先駆けて近代農業用水である明治用水や豊川用水

が引かれ、長い年月をかけてこれを整備し、そして、こうした関係者のたゆまぬ努力が重なって産地が形成されてきたところあります。

また、三遠南信地域においても、野菜、果樹、花、お茶など、さまざまな産地として名をはせている農業が展開されており、まさにこれがすばらしい地域資源ではないかと感じているところでございます。

また、これに加えまして、地域の関係者の皆様方が先進的な技術の導入に取り組んでおられるということで、こうした三遠南信地域各地域の取り組みは、まさに攻めの農林水産業の展開方向に沿うものであると思っております。

東海農政局としましても、三遠南信地域の皆様方が連携して、地域の農業関連産業が発展するように、さらには地域の資源を生かして、元気が出るような地域になっていくように、全力で応援をさせていただきたいと思っております。

最後になりますが、本日のサミットのテーマ「県境連携の蓄積を活かした三遠南信地域の創生」と伺っております。まさに今までの蓄積を活かすことにより、この地域の更なる発展につながりますように祈念をいたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。本日はおめでとうございます。

#### ■愛知県副知事 中西 肇 氏



ただいま、ご紹介いただきました愛知県副知事の中西でございます。知事所用のため代理で出席をさせていただきました。知事から祝辞を預かってまいりましたので、代読をさせていただきます。

本日、第23回目を迎える三遠南信サミットが、ここ愛知県豊橋市において、このように盛大に開催されますことを、心からお喜び申し上げます。また、ご臨席の皆様には、日ごろから本県行政の各般にわたり、ご支援、ご協力を賜っておりますことを、この場をお借りいたしまして、厚く御礼申し上げます。

さて、三遠南信地域は日本の中央に位置し、古くから、「塩の道」と呼ばれる南北をつなぐ街道や天竜川の水運、東西交通の重要な幹線道路であった東海道などにより、人・モノ・文化などが盛んに行き交う、活力ある豊かな圏域を形成してまいりました。今日でも、東名高速道路や中央自動車道、東海道新幹線などの国土の大動脈が走っており、一昨日には、新東名高速道路の浜松いなさジャンクションー豊田東ジャンクション間が開通いたしました。新たな大動脈として、人やモノの交流が活性化し、産業や観光など、当地域の更なる発展につながるものと期待しております。

また、南北を結ぶ軸となる三遠南信自動車道の整備も進んでおります。さらには、2027年度に開業が予定されている東京ー名古屋間のリニア中央新幹線では、長野県飯田市に中

間駅が設置されることとなっており、この地域の社会経済の発展を支える基盤となる交通ネットワークは、今後、一層充実し、地域のポテンシャルはいよいよ高まってまいります。

そうした中、三遠南信地域では、県境を越えた広域での地域づくりの可能性にいち早く着目し、行政や経済団体が一体となって、平成20年に「三遠南信地域連携ビジョン」を策定し、連携・協力して地域づくりを推進してまいりました。その慧眼と取り組みの先駆性に対しまして、関係者の1人として、誇らしく感じているところでございます。

我が国が、本格的な人口減少・超高齢社会を迎える中、地域づくりの取り組みも、より効率的、効果的なものに進化していくことが求められております。そのためには、県や市町村の枠を超えて知恵を出し、様々に連携、協力して取り組みの可能性を広げるなど、「地域の総合力」を最大限に發揮していくことが必要であると思います。

愛知県では、平成24年度に「東三河県庁」をスタートさせ、地元関係者の皆様とともに、様々なプロジェクトを立ち上げ、地域が一体となって推進してまいりました。

また、昨年1月には、東三河8市町村で構成する「東三河広域連合」が設立され、地域づくりの推進体制は、さらに力強いものとなっております。

本日は、「県境連携の蓄積を活かした三遠南信地域の創生～ともに生きる未来を目指して～」をテーマに意見交換が行われると伺っております。皆様方がこれまで積み重ねてこられた取り組みの成果を踏まえ、より活発で充実した議論が交わされることを大いに期待しております。

最後になりますが、本日のサミットのご成功と三遠南信地域の連携の強化、さらなる発展を祈念いたしまして、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。

平成28年2月15日、愛知県知事 大村秀章。

代読。

本日はまことにおめでとうございます。

### 3 全体会 基調講演

*San-En-Nanshin Summit 2016 in Higashimikawa*

#### ○基調講演

演題①「これから的地方創生について」

内閣府地方創生推進室次長 諸戸 修二 氏

演題②「神山プロジェクト～創造的過疎から考える地方創生～」

NPO 法人グリーンバレー理事長 大南 信也氏

演題③「三遠南信の芸能文化の力」

静岡県立大学名誉教授 須田 悅生 氏

#### ■演題①「これから的地方創生について」

内閣府地方創生推進室次長 諸戸 修二 氏



内閣府地方創生推進室次長の諸戸と申します。本日はこのような機会を頂戴いたしまして誠にありがとうございます。

私事でございますが、若干自己紹介を申し上げますと、私は尾張でございますけれども、愛知県の今は清須市の生まれ、出身でございます。そして総務省、旧自治省に入省いたしまして現在に至っております。この近くでございますと静岡市で勤務をさせていただいた経験もあるというような状況でございます。

お時間もございませんので、早速でございますが、お配りをさせていただきました資料に沿いまして、「これから的地方創生について」ということでお話を順に進めてまいります。時間も極めて限られておりますので、資料の全てについてはお話しできません。できるだ

けポイントを絞った形でお話をさせていただきたいと思いますが、もし、ご興味・ご关心等をお持ちいただけるようございましたら、また後ほどにでも資料をご覧いただければ、一通りお分かりいただけるように用意をさせていただいているつもりでございます。

資料は2つ用意させていただいておりますが、今、画面に写っております「これから的地方創生について」というものと、もう1つ、「特徴的な取組事例」という、2種類用意しておりますが、お持ち帰りをいただければと思います。

それでは早速でございますけれども、1ページからご覧ください。

地方創生のまち・ひと・しごと創生ということで取り組みを進めている次第でございますが、もともとの問題意識といたしましては、人口が減少してきているという話と、それから東京一極集中の是正をしていく必要があるということでございます。残念ながらと申しますか、各地方から東京に特に若い方々を中心にして集まってしまっておられます。出生率をご覧いただきますと、やはり東京都が全都道府県でも1番低いということで、子供の数といいますか、まさに少子化ということで申し上げますと、悪循環になってしまっているという状況があるわけでございます。そうしたことから平成26年12月にこの総合戦略を作

りまして、これはその先々月、年末に1年たったところで改訂をしたものの全体像でございますけれども、施策の柱としては、左下のところにございます安定した雇用を地方でつくる。それから地方への新しい人の流れをつくる。若い世代の結婚、出産、子育ての希望をかなえる。それから、地域をつくるという4本柱でございます。

人と仕事というのは鶏と卵というところがあろうかと思います。人が地方に行くためには仕事が必要です。逆に人がたくさん来れば仕事が生ましていくという相乗効果といいますか、循環が出来るのだと思いますけれども、そういったことをやっていく必要があります。それを支える土台としてのまちづくりもあわせてやっていく必要があります。これが全体の見取り図でございます。各論をまた後ほど申し上げますけれども、1ページの下にございますとおり、国といたしましても情報の支援、人的な支援、財政の支援等々のメニューを用意させていただいて、取り組みを進めているというところでございます。

3ページをご覧ください。この1年間で国としても総合戦略を改訂したわけでございますが、政策メニューの拡充ということでございます。仕事をつくるということでは、21ページに細かい資料がございますが、ローカルアベノミクスの実現ということに向けて取り組んでおります。

それから、新しい人の流れというところでは、この3月までに基本的な方針を策定すべく、今検討を進めているところでございますが、政府関係機関の移転の話、あるいは税制等の措置も行っておりますけれども、企業の地方拠点の強化の話です。それから18ページにございます、後ほど触れますのが、生涯活躍のまち、日本版CCRCと言っておりましたが、生涯活躍のまちという構想なども進めていこうとしているところでございます。

それから若い世代の結婚、出産、子育ての

話では、日本全国でもそうですが、個別具体的に見ていきますと、やはり地域ごとに状況が大分違っています。例えば、出生率も高いところから低いところまでかなりの差がございますし、あるいは長時間労働の人の割合等も、東京ですと6割ぐらいですけれども、少ないところですと10%台というように、状況がいろいろと異なるものですから、地域ごとに状況を見ながら対応していく必要があるというようなことを考えていくものでございます。

それから、SENAにつきましても広域的な連携をもう6年以上にわたってお取り組みをいただいているところでございますけれども、地域づくりの中でも地域と地域の連携というのがキーワードの一つになっていくといった状況でございます。

次に4ページでございます。先ほどご覧いただきましたが国で総合戦略を作り、全国の都道府県、市町村にも、これから取り組みのいわゆる作戦であります地方版総合戦略の作成をお願いいたしてございました。これは前年の10月末現在の調査の結果でございますけれども、左にありますとおり、都道府県につきましては、この3月末までに47全ての都道府県でお作りをいただける予定であると把握をしております。市町村は右側でございますが、3つだけ残念ながらお作りいただかないということでございますが、ただ、ほぼ100%、3つを除いた残りの市町村におきましては策定をいただける見込みであるということになっております。

5ページをご覧ください。都道府県ごとの状況でございます。今申し上げましたが、1番右のところで、市町村の平成28年4月以降に策定する団体が茨城県内に1つ、東京都内に2つ、合わせて3つでございます。茨城県内の市町村につきましては、昨年9月に大洪水の被害に遭われて、その対応を優先したいということで、少し遅くなられます。それから東京都内の2つというのは、23区内のうちの2つでご

ざいまして、2020年でございますが、東京オリンピック・パラリンピックに備えての基本計画とあわせて作っていくということで、このような状況でございます。残りの自治体におかれては、今年度末までにお作りいただけ見る見込みということでございまして、この地方創生の取り組みも、戦略の策定の段階から、いよいよ実行の段階に移っていくことになるわけでございます。そうしたことから、これから申し上げます財政支援措置等々も国として今予算案を国会に提出している状況でございます。

続きまして6ページでございますが、先ほどの情報と人とお金と申し上げましたが、そのうちの情報支援の部分が、この6ページでございます。RESAS（リーサス）という仕組みを今年度の4月に自治体のほうに使っていただけるようご提供を申し上げまして、それ以降順次、データを追加、バージョンアップしてきているというところで、9月、12月、それからこの3月に使えるデータを増やしていくことを取り組んでおります。

KKOという3つですが、これまでのややもすれば勘と経験と思い込みに基づいた施策への取り組みから、客観的なデータに基づいて地域の実情を把握していただいた上で、どのような手を打てばいいのか、その基礎的な部分を支えるものとして、情報を提供するシステムを用意しているところでございます。

時間の限りますので、細かく触れられませんが、本当にいろいろなデータが入っておりまして、中には、いわゆる秘密に該当するようなものもございます。自治体の職員様には守秘義務がかかっておりますのでご活用いただけるのですが、一部を除けば、住民の方々にもお使いをいただけるということになっております。

例えば、このRESAS（リーサス）を使った政策コンテストというような取り組みなどをして、中高生の部ですとか、大学生以上、社

会人の部というようなことで、12月に表彰をしたりとか、大学の授業にもRESAS（リーサス）を取り込んで、大学の授業をやっていただけるというような事例も出てきつつあるところでございます。

続きまして、人的な支援でございます。7ページから9ページのうち、今日は8ページだけ触れさせていただきたいと思います。地方創生コンシェルジュと申しまして、これは簡単に言うと、自治体向けの国における相談窓口でございます。相談窓口をことさら設けなくとも当然、元々の業務としてあるわけでございますが、改めて地方創生の取り組みを進めていくに際しまして、資料の2行目ほどにございますが、地域に愛着のある職員、例えば、出身であり、生まれであるとか、あるいは、先ほど申し上げた赴任した経験があるとか、そういう当該地域と何らかの関わりがある者を中心に選任をいたしまして、各自治体からの相談への対応をさせていただく窓口といった仕組みを1年前に講じました。現在、17府省庁で1,000人弱の者が選任をされているという状況でございます。

名簿につきましては、当室のホームページでも公表しております、自治体向けにはコンシェルジュ1人1人の思いとか、ゆかりのコメントを書いた名簿をご提供申し上げまして、ご覧いただきながら、少しでも顔が見えるように考えたものでございますけれども、電話、メール、ファックス、何でも結構でございますので、もし困り事、相談がございましたら、ぜひご活用いただければと思っております。

施策ごとで担当があるわけでございますが、聞きたいところが分っていると思われれば、そちらにお聞きいただければ結構です。もし、どこに聞いていいか分からないという場合には、私のおります内閣府の地方創生推進室にお問い合わせをいただければ、コンシェルジュということで当然ですけれども、出来る、出来ないことはございますが、きち

んと答えをお返しするように取り組んでいるところでございます。ご承知おきをいただければと思っています。

それから次に、お金の関係でございます。財政面でございますけれども、12、13ページを用意しておりますが、いわゆる自治体の取り組みを支援するための今年度の補正予算案については1月22日に既に可決されました。

それから現在、次の13ページですが、来年度の当初予算に盛り込んでおります、交付金という仕組みを用意してございます。

12ページからご覧いただきますと、少し分かりにくいけれども、地方創生加速化交付金という名称の交付金でございます。資料の右側にございますとおり、地域のしごと創生に重点を置いた取り組みを支援していくものでございます。左下のところにもございますが、先ほどの総合戦略や、交付金、あるいはこの後お話しする企業版のふるさと納税なども数値目標とPDCAサイクルというのが要件的になっております。これは先ほど1ページのところで触れませんでしたが、従来の政策の検証の結果、今回の地方創生の取り組みに際しましては、いわゆるやりっ放しで終わらせないことが必要であるということから、できるだけ数値目標を立てた上で試行錯誤してやっていただくものです。もし反省すべき点、見直すべき点があれば、その点を改良した上でまた取り組んでいくというものですから、数値目標とPDCAサイクル、プラン・ドゥ・チェック・アクションといったものを盛り込むような形にしてございます。

補正予算につきましては、補助率が10分の10ということで、地方負担なしで施策をやっていただけるものでございます。

次の13ページでございますが、こちらは地方創生の進化版になっております。従来、新型交付金と言われておりましたが、地方創生推進交付金という名称としております。予算額が1,000億円、こちらは当初予算ということ

もございまして、左下にありますとおり交付率が2分の1と、残りの2分の1が自治体にご負担をいただいてやっていただく必要があるわけでございますが、その2分の1の地方負担分につきましても、交付税措置、あるいは地方債の措置が手当をされるということになっておりますので、ぜひご活用いただきたいと思っている次第でございます。

補正予算というのは、必要に応じて時々に編成されるものですから、あるか、ないかが分からぬものでございます。当初予算は当然、毎年度、毎年度作られるのですが、この新型交付金につきましては単なる予算上の措置ということに終わらせるのではなくて、裏づけとなる法律に位置づけをするということで、その法律の改正案を現在国会に提出をしているところでございます。この後、資料で若干また説明をさせていただきたいと思っております。

それで13ページ、資料の右側でございますけれども、対象事業のイメージとしては3つございまして、大きく分けて、先駆性のある取り組み、隘路を発見し打開する取り組み、先駆的優良事例の横展開、の3つのタイプの事業を対象とするということにさせていただいているところでございます。

特に先駆性のある取り組みという中に、もう1つの資料の方でも、また申し上げますが、官民協働、それからSENAの取り組みもそうでございますが、地域間連携、それから政策間連携というような縦割りの排除ということでの政策間連携であるわけでございますが、そういうものを対象とした事業に対する交付金ということで考えております。

手続きにござりますとおり、先ほど申しました安定的な仕組みにするということで法律に位置づけているところでございまして、そのために、この交付金を使うには、自治体で地域再生計画を作っていただいて、国の認定を受けていただくことが必要になりますが、

逆に法律に位置づけるということで、継続的な安定的な仕組みとなるようにさせていただいているところでございます。

今申し上げました先駆的な事業例というのが14ページにございます。先ほどのローカルアベノミクスということを細分化するような取り組みも当然対象になっておりまして、ローカルイノベーション、地域の稼ぐ力を引き出すということで、新しい事業や産業の創出というようなものです。それから資料の右側でございますが、ブランド化、ローカルブランディングとございます。例えば、観光産業等々の活性化ということ、あるいは地場産品の販路開拓拡大というような取り組みでございます。

それから3番目、仕事の高度化というのは、サービス産業を中心とした生産性向上に向けた取り組みということでございます。それから、どの分野でも同様でございますが、何をするに際しても人材というのが大変大事でございますので、人材の育成確保に向けた取り組み、それから人の流れということで移住の促進ですとか、この後も触れますがCCRC・生涯活躍のまちということ、それから先ほどの少子化対応としての働き方の改革ということ、それから、まちづくりの部分での小さな拠点でございますとか、都市のコンパクト化とか周辺公共交通ネットワークの形成等というものを事業例として掲げさせていただいているところでございます。

15ページの方は、左側が平成26年度の補正予算で手当をしている基礎交付・上乗せ交付金でございまして、真ん中が今年度の補正予算で行います加速化交付金1,000億円、そして来年度の当初予算の新型交付金ということで、要はホップ・ステップ・ジャンプということで地方創生の取り組みを加速化させていくということで取り組んでいるところでございます。

続きまして16、17ページでございますが、

いわゆる企業版のふるさと納税です。個人のふるさと納税ということで、これもほぼ10年ぐらいになりますでしょうか、制度化がなされまして、一方で過度な見返り品と言うといけませんが、そういった状況がございます。今度、法律が通れば、来年度の4月1日施行での法律案になっておりますが、企業版のふるさと納税という仕組みを講じようとしているところでございます。

簡単に申し上げますと、企業が自治体の地方創生のプロジェクトに対して寄附をしていただいた場合には、法人関係税で税額控除をするという仕組みでございます。これまででは、法人税を計算するときに損金算入といいまして、既に約3割は税負担が安くなっていたわけでございますが、今回の措置でトータル6割、つまり税負担の軽減効果としては2倍になるという仕組みを講じようとしているものでございまして、17ページになりますけれども、法人住民税、それから法人事業税、法人税という、この3つの税から今申し上げました新しい3割部分を控除するという仕組みを設けようとしているものであります。

効果はここにございますが、例えば、創業者のご出身の自治体への寄附をいただく場合でございますとか、あるいは企業の創業地にご寄附をいただくとか、企業にとって地方貢献ということに位置づけられるということになっております。

地域間競争というような要素もあるわけでございますけれども、自治体側といたしますと、貴重な財源の一部として企業からの寄附を活用した上でプロジェクトに取り組んでいくことが出来るというものでございます。

これも17ページの下のところの制度のイメージでございますが、後ほども資料をつけております地域再生法という法律に位置づけをして、先ほどの新型交付金と同じように自治体で計画を作っていただき、国の認定を受けていただくものです。こうしたプロジェ

エクトに企業から寄附があった場合には、その企業の税金が安くなるという仕組みでございます。同じく、総合戦略に基づいた事業で、数値目標とか PDCA という要素が必要になってまいりますが、これらについては先ほど申し上げたとおりの背景があるところでございます。

それから、生涯活躍のまちということが18ページにございます。これは資料右側のところで、従来の高齢者施設と生涯活躍のまちの違いを簡単にまとめております。従来、高齢者施設は、えてして要介護状態ということになつてからお入りいただくということだったので、この生涯活躍のまちというのは、健康なうちから希望に基づいて移っていただくものです。従来の場合にはサービスを受けるだけの受け身の存在だったわけでございますが、新しい構想のほうは積極的な主体として、いろいろな活動にも参加をいただくということで、地域との関係でも交流が少なかつた従来パターンに比べまして、地域に溶け込みまして他世代のさまざまな地域の方々、団体等とも交流をいただくというような構想でございます。

12月に最終報告を取りまとめまして、この後19、20ページにございますが、地域再生法に位置づけた上で、これから事業を進めていくこうということにしているところでございます。

下のところにございますが、11月ぐらいに調べたところでは、全国263自治体が、このCCRC構想、生涯活躍のまちの構想を何らか進めていることをお考えいただいているところでございます。

重複するところもございますが、19、20ページが今の新型交付金、企業版ふるさと納税、それから今の生涯活躍のまち制度についての法律改正案でございまして、2月5日に閣議決定をし、これから国会でご審議いただくという状況になっているところでございます。

19ページは、申し訳ありませんが、割愛をさせていただきます。20ページでございます。この生涯活躍のまちに取り組む際に、地域再生法の計画を作成していただき、国の認定を受けていただきますと、資料の右下にございますとおり職業安定法の特例ですとか、老人福祉法の特例ですとか、あるいは旅館業法の特例等、従来ですと1つ1つ個別の法律に基づきました大臣の同意とか知事の同意が必要だったものが、手続きを省略できるということになっているという点でございます。

そういうことで、これから国会審議があるわけでございますが、法律が可決すれば、こういう仕組みが出来るということになっているところでございます。

申し訳ございませんが時間が極めて限られておりますので、この後の話は余りお話しできませんけれども、ご興味がございましたら、ぜひ資料をご覧いただければと思います。

それから、もう1つの資料でございますけれども、地域活性化・地域住民生活等緊急支援交付金の特徴的な取組事例という、これは12月にまとめた資料の抜粋でございます。ホームページでも公表させていただいているものでございますけれども、先ほど申し上げましたような新型交付金をご活用いただく際に、先駆性というような要件を満たしていただく必要がございます。先駆性の評価基準として政策間連携、地域間連携、官民協働というようなものが2ページにございます。3ページには全部で50の事例ございます。そのうちの地域間連携というところが要素として入っております20の事例を後ろのほうにつけております。こういうものを参考にしていただきまして、隣の自治体や、離れている自治体との連携をご検討いただければと思います。まさにSENAというのは、古くから広域的な連携の取り組みをしていただいているわけでございますけれども、この地域間連携というのが、これから施策のキーワードの1つにもなって

おりますので、これまでの地域での知見、経験を踏まえまして、地方創生の取り組みにさらに促進をしていただければと思っている次第でございます。

大変難ばくでございましたが、ぜひ資料をご覧いただければと思っておりますので、よろしくお願ひ申し上げます。

以上で説明を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

## ■演題②

### 「神山プロジェクト～創造的過疎から考える地方創生～」 NPO法人グリーンバレー理事長 大南 信也 氏



皆さん、こんにちは。徳島県の神山町から参りました、グレーンバレーの理事長をやつております大南信也と申します。私は本業が建設業で、公共工事でずっと生計を立ててきた人間です。今から25年ぐらい前から仲間と一緒に、せっかく自分の生まれた町だから、もうちょっとおもしろい町、わくわくするような町をつくろうということで、最初から例えば、過疎から神山町を救うみたいな感じの御旗を立ててやった活動ではなくて、小さな活動からスタートをしました。そうすると、少しずつ自分たちの手の届く範囲というのが広がっていって、今は多少町の政策に影響を与えたる、あるいは県の政策に影響を与えたるというようなところです。今日は神山プロジェクトということで、創造的過疎から考える地方創生というお話をさせていただきたい

と思います。

まずは「創造的過疎」という言葉ですが、2007年に、つくりました。この創造的過疎とは何かというお話です。2008年を境に日本の総人口が減少し始める時に、今までずっと人口を失ってきたような神山町でこれを止めるのは不可能であるから、人口減少、過疎化を受け入れてしまうという考え方です。受け入れた中で、普通、過疎化というのは数の物差しで考えますが、内容を改善していくうのが、この考え方です。だから若者とかクリエイティブな人材を誘致することによって、人口構成の健全化を図ったり、あるいは今ICTのインフラが、地方でも非常に整っていますので、そういうものを活用しながら、多様な働き方が可能なビジネスの場としての価値を高めたり、農林業だけに頼らない均衡のとれた持続可能な地域というのを目指せないかというものです。

日本の地方や過疎地には大きな課題があります。雇用や仕事が無いことです。その結果、いろいろな問題を引き起こしていきます。それらを解決するために考えたのは、まずはサテライトオフィス、場所を選ばない企業を誘致していくことです。もう1つは、当然地域には移住者が必要ですが、雇用が無い、仕事が無いから呼び込めないという状況です。そこで、仕事を持った移住者、あるいは仕事をつくってくれる起業者を誘致していくうのワークインビジネス、さらに神山塾ということで、職業訓練なんかを積極的にやっています。

徳島県神山町は1955年に生まれ、当時の人口は実に2万1,000人、60年後の2015年には6,000人を切っています。3割以下に激減しています。多分、愛知県とか静岡県とか長野県の山間部のどの町よりも過疎化が進んだ町ではないかなと思います。

そういう暗いことばかりかというと、そうでもありません。これは社会動態人口です。

ずっと転出数が転入数を上回ってきたわけですが、神山町移住交流支援センターが2007年に置かれました。それから移住支援に力を注ぎ始めまして、と数値がこのように改善をしていき、2011年には社会増を記録しました。数値も改善してきたのですが、創造的過疎の考え方で1番重要なのは、数ではなく内容を見ていこうということです。過去4年間に神山町に入っていた人たちの平均年齢は30歳前後です。だから非常に若い層の人達が入ってきているから、多少の社会減を起こしていても、町の活力、力は失われていないのではないかという捉え方です。だから真水で捉えていこうという考え方だと思います。

それとともに、東京に置くITベンチャー企業などが12社、神山町にサテライトオフィスを置いております。東京からやってくる人達は、羽田から徳島空港まで飛行機で1時間、そこから車で1時間で神山町に到着します。

徳島大学も昨年5月30日に徳島大学サテライトオフィス神山学舎をオープンして、大学生とか大学院生の講義も神山町で時々行われているという状況です。

こういった動きがアメリカを代表するワシントンポストにも取り上げられました。こういった大きなメディアに取り上げられると、すぐに反応が返ってきます。7月の半ばにカリフォルニアから4人家族が神山町に家探しにやってきて、移住しました。また、その人の友達もやはりICTの関係ですが、神山町での家探しにやってきていたといった、おもしろい動きが生まれてきています。

さらに今、中央省庁の地方移転、文化庁は京都に、消費者庁は徳島に、といった動きがあります。こうした中で長官が、この3月に試験的に神山町に何日か滞在してみようという動きも出てきています。さらに来年度の中学校の社会、再来年度には高校の公民の教科書にも神山町の動きを取り上げられることになっています。

ここで、今までの歩みを振り返ってみます。アーティスト・イン・レジデンスとかICTインフラの整備によって、結果的にいろいろなことが起こっていきます。次にワークインレジデンスによって起業家が集まり始めて新しいライフスタイルやワークスタイル等を生み出しています。さらにサテライトオフィスやコワーキングスペースができ上がったことによって、知見を持ったいろいろなクリエイティブな人たちが変化を生み出したということなのではないかと思います。

スタートはアートのプログラム、1999年に始めた神山アーティスト・イン・レジデンスです。毎年3名のアーティストを約3か月間、神山町に招待して、その人たちが作品を残していくというような活動です。1つだけ作品を解説したいと思います。

「隠された図書館」(Hidden Library)が出来上りました。山の中にです。1番近い集落は道の駅とか神山温泉の商店街、距離的に600メートルぐらい離れています。軽トラックがようやくすり抜けられるような道を上がってくると、この図書館に到着します。

ではなぜ、この神山町にこの図書館が出来たかという話です。神山町には図書館が無かったわけです。だからアーティストが作品で図書館をつくりました。借りるのではなく預ける図書館、神山町民であれば、人生で影響を受けた本を1人3冊までこの図書館に寄附できますという図書館です。掘っ建て小屋っぽいですが、図書館です。制作者は出月秀明さん、ベルリン在住のアーティストです。中にいると本が少しづつ並び始めています。神山町民や神山町内で働いている人であれば、例えば、卒業、結婚、退職した時などに読んでいた本、あるいは自分の人生に影響を与えた本を1人一生涯に3冊まで、ここに寄附できますという図書館です。1冊でも本を寄附すると、この1個の鍵がもらえます。普通図書館はパブリックだから誰でも入っていいけるのですが、

この図書館は本を納めた人だけが、この鍵をもらえ、鍵を持った人だけが利用可能な図書館ということになります。そうすれば、この空間が40年後、50年後、どのような空間になっているかということです。多分、神山の人の思いのいっぱい詰まった図書館が出来上がるはずです。

例えば、この図書館の本を皆さんのが40年後、50年後としましょう。私は今62歳、あと20年たつとほぼ平均寿命。だからこの図書館に本が満たされた姿というのは、多分見ることが出来ないと思います。多分というか、絶対見ることができません。でも、自分達がずっと本を納め続けない限り、40年後、50年後の姿も無いということです。

地域づくりというのは、こういうことだと思います。ほとんどの人たちは自分が起こした行動に対する結果を早く見たいと考えています。だからいろいろなことを拙速に進めて、荒いものをつくっていくのだと思います。自分が見たいというその思いを、自分じゃなくて、次の世代、その次の世代の人間が見られたらいいのではないかと、時間軸を長くとることによって、非常に奥行きのある広がりのあるものが出来上がっていいくのではないかと思います。これは地域づくりと全く同じ考え方の図書館です。

さて、このようにアートをやっていたら、光ファイバー網が2005年の9月に整いました。そこでアート事業のビジネス化を目指して情報発信のためのウェブサイトを作ろうということになりました。特にアート関係の記事に力を入れたわけですが、結果的にウェブサイトの中で一番よく読まれたのが、神山町で暮らすという空き家の情報のコーナーでした。「ここは2万円で借りられますよ」とか、「この家は傷みが激しいから、薪ストーブを入れても大家さんは許してくれますよ」といった情報が、ほかのコンテンツに比べて5倍から10倍、よく読まれるということが分かりました。

これまで神山町は、Iターン者がほとんどいなかった町です。インターネットに物件情報の小窓が開いたことによって、ここから神山町に対する移住需要の顕在化というのが起っています。この神山町で暮らすの中に、1つの仕組みを入れてありました。これがワーク・イン・レジデンスです。地域に雇用がない、仕事がないのであれば、仕事を持った人に移住してきてもらうという考え方ですが、どんな仕事でもよいということだと地域に変化は起こらないので、もう1つ絞り込みます。町の将来に必要と考えられるような働き手とか起業家を、空き家を1つの武器にして、ピンポイントで逆指名しようというものです。例えば、「この家についてはパン屋さんをオープンする人だけに貸し出しますよ」と、あるお家については、「デザイナーさんだけに貸し出しますよ」と、最初から入り口を特定、限定してしまうわけです。こうすることによって、結果的に町のデザインが可能になっていきます。ワーク・イン・レジデンスによって、例えば、もともと酒屋さんだった建物はフレンチビストロに変わっていきました。

このお店には最近、海外からのお客さんが増えています。フェイスブックの影響だと思います。フェイスブックは自分の信頼できる友達の発信です。だから、あの人のお勧めは外れたことがないといった信頼度の中で、友達がどんどん訪れて、オランダのアムステルダムからのお客さんが多い場所になっています。さらにピザ屋さんもオープンしました。

次は神山塾、これは厚生労働省所管の職業訓練で、2010年12月にスタートして、6期で77人が修了しています。そのうちの約半数が移住者として神山に残っています。さらに、うち約10名がサテライトオフィス、あるいはその関連事業で雇用されています。またグリーンバレーとしては職業訓練をやっているつもりなのですが、カップルが10組誕生し、赤ちゃんが6人誕生しています。婚活にもなってい

るというので、今、厚生労働省注目の事業になっています。

今は第7期の神山塾で、約30名が3月末まで5か月間の訓練中です。こういう子たちの中から、また移住者が生まれてくるのではないかと思います。

神山塾 OB の子たちも、いろいろな形で起業をしています。この人は名古屋出身のオーダーメイドの靴屋さんです。オーダーメイドなので木型から作ります。通常納期は2か月ぐらいですが、今は6か月以上の納期になっているというような状況で、繁盛しております。それから、この人も名古屋出身です。お惣菜屋さんをオープンして、地域のおばあちゃんとか、おじいちゃんたちが、ここにおかずやお弁当を買いにやってきます

こうした中で、空き家改修の事業を商店街の中でやり始めました。その改修を手伝ってもらった建築家の友達が、たまたま IT ベンチャーの社長で、2010年9月25日、26日で神山町に視察に訪れて、「ここに東京本社のサテライトオフィスを置く」と即断即決したこと、サテライトオフィスの展開が始まっていきます。これは Sansan という会社です。この建物はもともと牛小屋だった家がサテライトオフィスになっています。開口部は飼い葉桶を入れる場所です。こういう場所で仕事をしています。本社との間は、テレビ会議等で対応されています。さらに、ここはプラットイーズという会社で縁側付きのオフィスをつくりました。蔵もオフィスになっています。夜になると、このような状況になります。外観は古民家なのですが、内部は結構最先端です。ここでは20数名の若者の新規雇用が生まれております。

今神山町で起こっていること少しまとめてみます。移住者がフレンチビストロをオープンしました。ここでは建築家の移住者が焼いた有機小麦のパンが出されています。コーヒーはデザイナーさんの奥さんが、フェアト

レードの有機栽培のコーヒーをハンドピックしたものです。ヒューレットパッカードで働いていたエンジニアが脱サラをして始めた有機栽培の農家さんは、野菜をビストロや先ほどのオーガニックのピザ屋さんに、納めています。これらは移住者が起こしてきた動きです。移住者がこれぐらい動き始めると、もともと地域で住んでいた人たちも影響を受けます。50代半ばの男性はイチゴとかスモモ等を作っていますが、それをジェラートにして、ビストロやピザ屋さんに納めるという循環を生み出しています。つまりオーガニック食文化を共有するような人材の集積や循環が今、神山町で生まれているのです。

IT ベンチャーの人たちもオーガニックフードは大好きです。資料の10ページにある商店街図の灰色の部分は、5年前まで空き家、空き店舗だった場所です。ここにワーク・イン・レジデンスによってオフィスとかクリエーターとか、職人とかレストラン、あるいは商店を集めさせることで、だんだんと埋まってきています。すると、ここに新しい人の流れとか循環というのが生まれていきます。つまりワーク・イン・レジデンスを商店街で展開することによって、ここだけにしかないものが出来上がり、こういうような商店街は、多分、郊外型の量販店などにも対応出来る可能性があるのではないかという気がします。さらにいろいろな場所でクリエイティブなコミュニティーが出来て来ています。

縫製工場だった場所はコワーキングオフィスとなっています。ここには来年度から徳島県庁職員2名が常駐することになっています。現在、ここにはファブラボを作っています。3Dプリンターやレーザーカッターを設置し、ものづくりの一つの拠点にしていこうとしています。何故こうしたもののが中山間地ができるのでしょうか？それは最先端の器具類を使いこなせる人間がすでに集積しているからです。例えばこの寺田さんは3Dのカーモデ

ラーです。大手自動車会社の次世代モデルなどをモデリングしています。寺田さんは山の上に古民家を借りて、ここでカーモデラーを養成するという夢を持っています。また寺田さんはフリスビーの名人です。去年の12月8日に自分の持っているフリスビーを30、40個抱えて、神領小学校に行きました。1时限の45分間、とにかくフリスビーを飛ばす練習をさせました。今度12月17日には、コンプレックスにやってきた子供たちが自分自身で、寺田さんの指導でフリスビーをデザインします。それを1月に3Dプリンターで出力して1月29日に子供たちは自分でデザインしたフリスビーを、授業で飛ばせました。町に入ってきた人たちが教育にまで影響を与え始めているのです。

そして新しい宿も出来ました。WEEK（ウィーク）神山です。ここで面白いのは、この宿を運営するのは民間が新設した会社神山神領です。この会社の資本金の約50%は神山町役場及び町民50名が出資しています。ここでは何をやろうとしているのかということですが、農産物の地産地消という話はよく耳にしますが、ここでは資金の地産地消をやろうとしています。タンス預金を銀行に預金したら、町内から町外にお金が流れ出てしまいます。そうではなくて、町内の人、事、物に投資することによって、町内でお金を回していくこうということです。例えば、神山町で若い子達が小さな起業を始めていますが、その子たちが銀行から融資を受けようと思ったら、信用の問題で貸してくれないわけです。そこで町内の方で、あの若者の事業に出資してみようといった動きを作ろうとしているのです。こんな形で宿泊棟と食堂棟ができ上りました。

ここでは日替わりシェフの制度が運用されています。WEEK神山は一週間ぐらい神山町でサテライトワークをしてくださいというコンセプトの宿です。普通日本の宿で2、3泊すると同じ料理が並び始めますが、それを避け

るためにシェフ自体を変えているのです。またここでは有機栽培を基調とした地産地消のメニューが出されています。では次に、神山町でこれまでに起こったことをまとめてみます。

1999年にアートからスタートしました。そうすると2、3年後、アーティストの移住者が生まれ始めました。2008年からはワーク・イン・レジデンスで力を持った起業者を集めていたら、今度は移住者だけではなくてIT、デザイン、映像の会社がサテライトオフィスを置き始めました。この新しい人の流れ、塊は今までの神山町になかったものです。こうした新しい人の流れが生まれたことによって、これまで神山町に成立し得なかったものを成立させ始めたということです。つまり、新しい人の流れがサービス産業を起こしたということです。だからピストロが上手くいったり、ピザ屋さんやビジネス客用の宿泊施設が回り始めたりしています。では、このサービス産業で使われるものは何でしょうか。当然、農産物が使われます。だから今は、中山間地域の本丸である農業に影響を与え始めているところだと思います。

普通、自治体などでは本丸から攻めようとして、攻めあぐねているところが多いような気がしています。グリーンバレーとその仲間たちは、50年間、神山町の農業の衰退をずっと見てきました。だから神山町の農業は、もう少し良くなつたらいいと思いながらも、自分たちは農業の知識もテクニックもないから、そこに自分たちの手は届かないと思っていたわけです。だから違う入り口から入ったということです。しかし、そこに突破口があったのかも知れません。アートから入ったことによって、新たな人の流れが創出され、それがサービス産業を起こし、農業を育み始めたところだと思います。

ここまで来れば、もう少し戦略的に事を進めて行く必要があるかもしれません。ワー

ク・イン・レジデンスで、力を持った農業者を集めていく中で、今後1年に1か所ずつぐらい、オーガニックのレストランが神山町に生まれてくるようなことがあれば、地域内でサービス産業と農業がぐるぐる回るような、日本では珍しい町が出来上がるのではないかなと思います。

従来型では、地方でとれた農産物はどのような経路をたどったのでしょうか。当然農産物として出荷され、卸売市場を経て食材として東京都内のレストランに届けられる。だから地域に落ちてくるのは、農産物の代金の1,000円、1,500円が落ちてきます。ブランド化によって、2,000円、3,000円になるかも知れませんが、その材料を使った東京都内のレストランでは、1万円や1万5,000円の料理が生まれてくるということだと思います。つまりサービスが東京で起こっているので、そこで雇用なんかも全て生まれていくということだと思います。だから今までどおり農産物の出荷基地として地方が機能するのもいいのですが、これからは、もう少し違う側面を持つ必要があると思います。それは地域内にサービス産業を生んでいくということだと思います。そうすれば、今度は農業が元気になっていきます。農業が元気になると、景観を作ります。良い景観はインバウンドなんかの観光客を呼び込むことになります。そして観光客がまたこのサービスを受けるという構図の中で、地域内で経済循環を起こしていくということが、これからのポイントになるのではないかと思います。

当然、自給自足、地産地消だけに頼れば、経済はだんだん小さくなってしまいます。必要なサービスを外から買ってくるわけですから当然のことです。それを避けるためには、東京の皆さん、三遠南信地域の野菜を食べたいのだったら、ここにきてくださいというようにもっていくのが大切なのだと思います。そうすれば人が移動するので、非常に大きな経

済として回っていくのではないかと思います。

こういうようなフェーズで再生の歩みが進んできましたが、神山町におけるフェーズ4.0は今回の地方創生の総合戦略だと思います。12月25日策定を終えました。目的としては、住民と移住者の融合、公民連携、次世代リーダーの育成、最近、新聞で地方創生総合戦略のダイジェスト版が載せられています。この記事は12月に徳島県のとある町が総合戦略の素案をまとめたというものです。2回目の会議で素案を有識者会議で示したとあります。次回の3回目の会議で最終案をまとめるということになっています。この町ではおそらく2時間半から3時間の有識者会議を3回開いて、新しい総合戦略をまとめようとしているのだと思います。読んでみると、「会議では委員から住民の協力も得ながら観光客誘致に力を入れたり、若者に焦点を当てた後進育成に取り組んでほしい」といった意見が出されたとあります。しかし、そもそもこうした課題を解決するために議論するのが委員の役割のはずです。ところが、委員の皆さんには意見を述べているだけで、やるのは行政でしょうという形です。こうした形式的な会議を続けている限り、いつまでも実行されない計画が、また出来上がるのではないかなというような気がします。

神山の場合は大きく異なりました。充て職者は全部外れています。排除しているわけではありません。もともと3時間の会議を15回から20回行うと決めていたので、会議にずっと出席できる人でコアチームを構成しています。その下に28名のワーキンググループがあります。役場の若手職員14名と民間の14名で構成されました。このワーキンググループで議論を重ねる中で、そのまま公民が連携した実行組織が自然発的にでき上がっていきました。これからコアチームの主メンバーが中心となって一般社団法人が設立され、総合戦略全体を見ていくことになっています。現在、7つの

施策ができて、これに対応するプロジェクトが決められ、これらを実行していくのが、民間と役場との連合チームです。昨年11月に町民に向けた中間発表会を開いた時に面白いことが起きました。役場の若手職員が、「自分は今、フードハブの事業に役場職員として関わっているが、今後役場職員であることが足かせになるようだったら、僕は役場を辞めてでも民間でこれを続けます」と言い始めた職員が3人ぐらい現れました。したがって、神山町の総合戦略策定では政策立案のプロセスで、ほぼその実はとったと思います。これからはプラスアルファがいろいろな形で出てくるのではないかと思います。

社団法人「神山つなぐ公社」と町役場内に組織される課長級庁内戦略会議「神山町つなぐ会議」の間で、2週間に1回、合同の会議が開かれ、連絡調整が図られます。このようにこれまでと全く異なるプロセスを経て計画が出来上がったので、私たち民間の立場の人間も期待をしているところです。

これが最後のスライドです。「ぼくのわたしの好きな場所」、皆さんにも好きな場所があると思います。三遠南信が大好きですよね。でも三遠南信を好きなまま置いておいても何も変わりません。ではどうすればいいのでしょうか。好きな三遠南信をすてきな三遠南信に変えましょう。難しいですか、案外簡単です。すきに何を加えたらすてきになるでしょうか?「て(手)」を加えることです。手を加えるということは、皆さん方が行動を起こすということだと思います。いい方向に行動を起こしたら、必ず市町村も都道府県も、ひいては日本の国も、もっともっと素敵になるのではないかなどというところで、私の話を終わりたいと思います。どうもありがとうございます。

### ■演題③「三遠南信の芸能文化の力」

静岡県立大学名誉教授 須田 悅生 氏



皆さん、こんにちは。須田でございます。

私の元来の専門は中世の日本文学でございます。たまたま縁あって、静岡県の大学に赴任いたしました。それ以来、特に静岡県西部、天竜川流域、三河も信州も同様ですが、この辺り一帯が民俗芸能という大変大きな宝庫、あるいは大海原が広がっているということに、私は非常に衝撃を受けまして、赴任して以来、地域に足を運んでいたことでございました。

私はその際に得られたわずかな経験と、私なりの見通しなども交えながら、今日は少しお話をさせていただこうと思っております。

まず、私の資料ですが、14ページをご覧くださいませ。ここにお示ししたレジュメに沿って、今日はお話しさせていただきます。

まず、1番の「水系の文化-芸能と信仰と交流」と書いてございます。

作家の井上靖という方がおりました。もう亡くなりましたけれども、井上靖は「天竜川・讃」という短詩の中でこの川を「諏訪湖と遠州灘を結ぶ美しい水の帶」というふうに表現しております。三遠南信とは、まさに水の帶によって固く結ばれたエリアということができます。そして16ページの地図にもお示しましたように、多様で多彩な芸能がこの帶を飾っております。天竜川本流のみならず、その支流、流れ込む川などにも芸能の飾りはき

らめいております。川に沿って山ひだを縫うように細い道が通じております。人々は険しい道をたどり、ときには川船を操って行き来をしておりました。

民俗学者で歌人でもあった折口信夫をご存じだと思いますが、折口はたくさんの歌をこの地で詠んでおりまして、その中に「山の上にかそけく人は住みにけり」という表現がございます。その歌のように、古い時代から、山を切り開いたわずかな地にも人々は住んでまいりました。その住人によって神仏が守られ芸能が伝えられてきました。

川の道と山の道によって大きな共有の文化圏を形成してきたと言えます。しかし、この道は決して行きどまりの道ではございません。地域の交流の道でございました。言語や生活習慣、民俗伝承など、互いに三遠南信地域は似通ったものを持っております。言葉を聞いても、似ていると思われる方は多いと思うのですが、そういうところは皆、交流の証拠です。

交流の道は信仰の道でもございました。全国各地から秋葉山、諏訪大社にお参りをする巡礼の道としても知られています。それと、もちろん忘れてはいけないのは塩の道でございます。南北の道だけではなくて、東西から来る多くの旅人を迎えて、交流と情報交換をしていた道、そういう道でもあったということです。

さてそこで、レジュメの（2）をご覧ください。

ここではどのような民俗芸能が、どのように分布しているかお話をします。その前に、そもそも民俗芸能とは何かと言いますと、簡単に言いますと、人々が神様や仏様を喜ばせて、お慰めをして神仏とコミュニケーションをとることです。そしてコミュニケーションをして楽しんでいただくということを主眼として行う、一種のパフォーマンスということができます。その結果、人々は神仏から豊作と豊

漁とか、無病息災という幸せを得る事が出来ると言えるのです。そして人々の住んでいる土地は平和になるという、循環のようなものになっています。そのようにして人々は生きてきました。

日本には実にいろいろな民俗芸能がございますが、早稲田大学の著名な学者であった本田安次さんによる分類案を15ページにお示しいたしました。大きく分けて、本田さんは日本の民俗芸能には5種類あるとされています。分類の最後の渡来芸と舞台芸は及びでつながって1項目でございます。

この分類で見ますと、三遠南信にはこの5種類の民俗芸能全てがあると言えるのです。神楽には花祭りとか霜月祭りなどのたくさんの湯立て神楽がございます。これは後で申しあげます。田楽には田遊びとか田楽踊りがたくさんございます。

次は風流とあります。風流は当地方には中世の宗教芸能であります念佛踊り、それから盆踊りもそうですが、大念佛などがございます。語り物の祝福芸には歌舞伎の淨瑠璃語りがありまして、翁の語りも入れてよろしいかと思います。

渡来芸というのは、古代中国の芸能の流れを汲むものです。後でまた申し上げますが、西浦田樂には高足というものがございます。これも中国伝来です。獅子舞はこの地方では多く演じられています。特に南信濃では獅子舞フェスティバルというものがあるほど盛んでございまして、巨大な屋台獅子で有名です。

それから舞楽は古代宮廷芸能でございまして、地方で伝承されている例は余り多くございません。静岡の浅間神社の廿日会祭も舞楽ですが、ユネスコの無形文化遺産にもなっているのは秋田の大日堂舞楽というものがございます。静岡県の森町では3か所で行われています。

最後に舞台芸ですが、これは能や狂言は、西浦の田楽の中の演目としてございます。花

祭りなどの三番叟も翁猿樂という能楽の古い形式を残しております。人形劇、歌舞伎がこのエリアで盛んに行われているということは、改めて申し上げるまでもございません。

ということで、5分類された芸能のそれぞれの下位分類を見れば、当地方の芸能はどこかに必ず入っています。これは大変「すごいこと」です。

例えば、岐阜県の美濃地方には27か所程で歌舞伎が行われていますが、神楽や田楽は多くはございません。それから九州高千穂地方は神楽で有名なのですが、人形劇とか歌舞伎というのは、1、2か所だけです。大体、日本の各地域には地域を特色づける芸能がございます。しかし三遠南信というエリアは、極端なことを言えば、「民俗芸能ならば主なものは何でもある」というのが、その特色だということです。何でもあるというのは少しだげさかもしれませんが、そう言ってもいいぐらいの芸能が宝庫として連なっているということです。どういう芸能があるか、どんなものかというのは今画像でお示し出来ませんが、後ほどまた風土の分科会で、浜松の芸能の写真などが紹介されるかと思います。

それでは次に、14ページの「三遠南信・天竜川水系等の主な芸能とその上演地」について一覧表をご覧ください。

これは、あくまでも主な注目したい芸能ということで、全ては網羅してはおりません。抜けているところは多々あると思います。幾つか補足をしておきます。冬至祭系の芸能で設楽町の参候祭りが抜けておりました。申しわけございません。田楽系では長野県阿南町の新野の雪祭りがあります。それからこの会場の近くで行われている豊橋市の鬼祭りです。念佛踊りとしましては、これも抜かしてはいけなかったのですが、阿南町和合の念佛踊りという、すばらしい念佛踊りがございました。これを補足で加えたいと思います。

人形芝居としては、阿智村の丸山という所

が2か所ございましたが、これは消してください。阿智村の栗矢というところには舞台があるようです。

さて、花祭りや霜月祭りなどは、この地方の代表的な芸能で、恐らく一度はご覧になつた方がお見えになるかと思います。元来これは冬至のお祭りです。今の新暦では冬至は12月です。旧暦では11月の中旬ですが、冬至の日はもちろん日が短くて、1年で最も太陽が衰える時季でございますから、人間も動物も病気になってしまったり、元気がなくなったりすると考えられておりまして、その時に太陽を活性化して元気にして、そして人間を生まれ変わらせる、再生させる、といったことをしなければいけないということで、各地でお祭りが行われます。これが冬至祭です。特に山岳地帯ではお日様の力が弱まることは非常に身にしみて感じたことだと思います。

冬至祭というのはヨーロッパでも行われました。ヨーロッパのアルプス地方では現在でも行われおりまして、異様な仮面をかぶった男たちがパレードをします。そして冬至のあくる日は「春が来た」といって春の祭りをするということが知られています。ちなみにクリスマスは、もともとは冬至のお祭りでした。新しいよい年が来るようといつて、神に祈るお祭りです。冬至の翌日は一陽來復でございまして、新しくなった太陽が来て、新年が来ると考えられていました。冬至正月という言葉もございました。

その冬至祭ですが、冬祭り、それから花祭り、霜月祭り、お潔め祭りといったいろいろな名称で呼ばれていますが、かまどをつくつてお湯を沸かして、その周りを巡りながら舞を舞うというのが共通した特徴でございます。これを「湯立て」と言います。湯立てをしながら神楽をやりますから湯立て神楽と呼びます。これは伊勢流の神楽が多いのです。そこには修驗道のいろいろなしぐさが入ってきます。

湯立てではお湯を沸かした湯の中に神が宿っていると考えられまして、神聖なお湯をまき散らして、そのお湯がかかると無病息災になるとしています。人は再生するというのも共通認識です。世界の冬至祭というものと、こちらの冬至の祭りというものと比較して、世界的な視野で見るというのも面白いかと思っております。

田楽系の芸能も多いのですが、田楽は「さら」という楽器を使った芸能です。さらは細長くて薄い板を何枚もひもで通した楽器です。さらをカシャカシャと打ち鳴らしながら踊るというのが特徴です。これは鎌倉時代から室町時代に大流行をしました。北条高時という鎌倉幕府の執権は、余りに没頭しつづいたために、幕府が滅びてしまったという説もあるぐらいです。中世に恐らくは都から、この情報の道を通って持ち込まれたものと思われます。

ところで、さきに申しました浜松市水窪町の西浦田樂では、高足という芸能が行われます。演目については絵が無いので少し説明するのが難しいのですが、十字架をさかさまにして、両足を乗せてぴょんぴょんと飛び、というような芸能です。その芸能は、中国渡來の散樂という曲芸の一種です。正倉院御物にも類似したものの絵があるほどの古い芸能でございまして、日本では兵庫県加東市の社町にも伝承されている珍しいものです。

西浦には、その他に仏舞という、大きな仏様の仮面をかぶって、ずっと行列する行道の舞がございます。これは恐らくは伎樂の系統、中国とか中央アジアの芸能と非常に近いものがあります。それらシルクロードの芸能が、いわばこの三遠南信地方で定着しているということも注目しておきたい点です。

それから田楽や花祭りには、翁・三番叟が出る演目が多いのですが、使われている仮面とか、語りの言葉をよく分析してみると、中世の翁猿樂、というもののがいまだに残

している部分がございます。能狂言は都で大成してこれがユネスコの無形文化遺産の日本第1号に認定されていますけれども、そういう無形文化遺産の能が失ってしまった翁の芸能の一部が三遠南信の翁や三番叟には残っています。むしろこちらのほうが古いとさえ言えるのです。これは大変なことです。

さて、舞台芸能の話に移りたいと思います。先ほども触れましたが、人形芝居は17世紀の中ごろ以来、長野県の伊那谷に多く伝えられていました。現在、長野県の上演地は4か所ございますが、人形劇専用舞台が残っているのは10か所あります。言い伝えでは長野県の伊那地方には30か所以上もの人形芝居の場所があったと言われています。江戸時代後期には遠州横尾などでも行われていた記録がございます。ですから、この遠州・南信地方には、山梨県の甲斐の国にも多いのですが、甲斐の国と並んで日本有数の人形劇の上演地が濃密に分布した地域だと言えると思います。これは現在の文楽人形と同じような形態で人形の下のほうから手を入れて操るもので、糸で操るマリオネット形式ではございません。

江戸時代中期から後期にかけて三遠南信の交流の道、先ほど申しました交流の道を通って、上方からもたらされたものでしょう。例えば、淡路島からもたらされたという伝承がある、飯田市の黒田というところの人形劇がございますように、上方系が多いということですね。

さて、続いて皆様がよくご存じの歌舞伎についてです。歌舞伎芝居は三遠南信のどの地域でも盛んに行われていました。特に遠州地方では資料にありますように、歌舞伎舞台がかつて存在したところも含めますと、二十数か所にも及びます。もちろん三河にもございまして、例えば、三河の設楽の田峯歌舞伎というのは、7回も8回もアメリカ公演をしております。それから信州の大鹿歌舞伎、これは原田芳雄主演の大鹿村騒動記という映画にも

なりました。

この大鹿には、初代の市川団十郎という江戸時代初期の名優が17世紀の終わりごろに書き与えたと伝わる歌舞伎の台本が残っています。「六千両後日之文章」です。「六千両後日之文章」というのが日本中でここだけに残っている演目です。これは珍しいことです。先日1月31日に国立劇場でも上演されました。

歌舞伎は各地の伝承から考えても江戸の影響が強いようです。巡礼中の役者を泊めて習ったとか、台本を名古屋まで買いに行ったとか、舞台をみんなで作ったなどという伝承がございます。江戸幕府は歌舞伎上演に禁制を出しておりましたが、お百姓さんたちは負けてはいませんでした。幕府は、歌舞伎とか人形劇などというものは単なる娯楽だと、やれ化粧だとか、稽古だとか、衣装だとかいうことで、百姓たちの仕事がおろそかになると考えていました。でもお百姓たちは、神社の境内に舞台を作って、この歌舞伎なり人形劇は、神社の神様に奉納するためであるという形をとって取り締まりを逃れました。神様に奉納すると、神様が喜んで豊作にしてくれて、豊作になれば、ちゃんと年貢が納められるではありませんかということです。これには幕府も仕方がなく黙認しました。一種のガス抜きということもあったのかもしれません。

三遠南信地域から少し北に外れますが、信州松本藩には面白い文書が残っています。享保2年、1717年に芝居見物をしてはいけないというおふれを出しています。ところが同じ藩が70年ほど後に、これは寛政2年になりますが、芝居を演じてはいけない、芝居をやってはいけないというおふれを出しています。おふれを出すということは、それだけ芝居が盛んだったということです。つまり、この6、70年の間に、お百姓さんたちの間で歌舞伎熱が非常に広がっていったということです。見るほうから、やるほうになったからです。これは多分、三遠南信地域の歌舞伎も皆同じだろうと

思うのです。やはり歌舞伎は「待ってました」とか「いいぞ」ということを観客から言われるので、非常に気持ちがいいものです。拍手喝采してもらうと気持ちがいいものです。歌舞伎は見るよりも、やるほうが何百倍も面白いということに目覚めたのです。それが三遠南信の歌舞伎芝居が盛んになっていった1つの要素だろうと思います。

これらの芸能の分布をごく大雑把に地図上に落としたものが16ページの地図でございます。天竜川とか豊川、その支流という水系に沿っていろいろな芸能が伝わっているのがお分かりになるかと思いますが、冬至祭系は三河地域と信州地域に多く、田楽・田遊び系は遠州地域と三河地域に多いとか、人形劇は信州地域とか、歌舞伎は3地域ともにあるなどの特色が拾えます。

三遠南信地域の芸能は、縦軸で見ると古代から江戸時代までの芸能がずらりとそろっており、横軸で見ると、日本の民俗芸能の代表的なものが、さまざまに、ずらりとそろっているというところが特色です。SLではありますけれども、このような芸能が「動態保存」されているということは、実に驚くべきことでございます。こういうエリアは日本広いといえば三遠南信エリアだけです。このエリアにある多彩かつ多様な芸能の力、住む人々の芸能に差し向かう力、伝承する非常に大きな力を私はここに発見いたします。

民俗芸能は地域の人々のアイデンティティーの証明です。自分たちの暮らしの原点をその中に見つけることが出来るということが芸能を続ける原動力になっているわけです。別の言い方をすれば、民俗芸能は地域の文化力の全てを足したもの、「総和」ということが言えます。芸能の宝庫を丸ごと日本遺産へ、そして将来的にはユネスコの無形文化遺産へと、皆様とともに考えていきたいものと存じます。

以上で、つたない話を閉じさせていただき

ます。ご清聴どうもありがとうございました。

## 4 全体会 SENA 報告

*San·En·Nanshin Summit 2016 in Higashimikawa*

### ■ 報告

- 「三遠南信アンテナショップ事業について」
- 「三遠南信自動車道開通時の経済効果について」

#### 三遠南信地域連携ビジョン推進会議

事務局長 藤野 仁

それでは、皆様お疲れのところ恐縮でございます。短い時間の中で2つの事業をご報告させていただきたいと思います。

まず1つ目、アンテナショップ事業でございます。アンテナショップ事業とは、ウェブサイト上のショップでございますけれども、こちらは連携ビジョンの重点プロジェクトに位置づけられたもので、それがこのたびいよいよ開設の運びとなりましたので、ご報告させていただくものでございます。

このサイトは、本地域の特産品を広く紹介することで、地域の魅力もあわせて発信するということを目指したものでございます。このためサイトのコンセプトとしては、大手ショッピングサイトのように扱う品数とか価格を競うものではなく、ここにあります3点のことにつきましてサイトをつくりました。

1つ目は、地域の風土、気候、人々によって育まれた産品であるということです。

2つ目は、歴史や由来といった魅力的なストーリーが産品に備わっているかどうかということです。

そして3つ目は、隠れた産品へのこだわりでございます。とても魅力的な産品でありながら、例えば、地元以外に知られていないようなものを紹介することによりまして産品の販路拡大はもちろん、地域の新たな魅力発信に期待できるものかどうかということでございます。

次に、トップページのデザインでございま

す。それぞれ商品の写真がございますけれども、写真にカーソルを合わせますと、商品の名前が表示されます。トップページからクリックしてまいりますと、商品のページが展開されまして、画面にもございますとおり、その商品の購入方法なども表示されるようになっております。例えば、パソコンから産品の出展者がネット販売なんかをしているところですと、ここからそのまま外部リンクにつながって、そのまま注文もいただけるようになっております。それから、こだわりの3つのことも表示してございます。

产品的ページ以外にも、「三遠南信とは」という地域の紹介のページや、この地域は家康ゆかりの地域でございますので、そういう特産品にキーワードをあわせて紹介をした家康ゆかりの特産品という特集ページがあります。これが直虎ゆかりの特産品です。やはり平成29年 NHK 大河ドラマの主人公となります井伊直虎のゆかりのものを集めたものでございます。

そしてサイト公開は、3月1日を予定しておりますので、どうぞ多くの皆様の閲覧をお願いしたいと思います。恐らく、県境を超えた、こういった SENA のような官民連携組織による特産品紹介サイトということは、全く根拠はないのですけれども、恐らく日本で初めてではないかと思っておりますので、どうぞ閲覧ください。よろしくお願ひいたします。

続きまして、2つ目の事業報告をさせていただきます。

三遠南信自動車道開通時の経済効果でございます。経済効果といいましても、調査の前段として非常に条件を絞りまして、限られた条件の中でこういった効果が見込めるであろうということになります。経済開発協議会と共同で調査機関に外部委託をして行ったも

のでございます。

三遠南信自動車道は人的交流はもとより、いろいろな分野で期待されておりまして、そういった中、この調査はウェブアンケート調査、それから事業者ヒアリング、こういった結果を踏まえまして、整備効果と開通効果の2つの側面で経済波及効果を調査いたしました。

まず、ウェブアンケート調査については、全国342のサンプルをインターネットから集めまして、本地域への関心度とか観光ニーズなどについて調査いたしました。その結果、約6割の方が三遠南信地域のことを知つていて、地域内の観光地としては豊川稻荷、浜名湖、南アルプスなどの知名度が高いこととなりました。

また、三遠南信自動車道に向けた期待としては、魅力的な観光情報の発信が高かったことから、こうした情報発信により開通効果がより發揮されるものと思われます。

次に、地域内の事業者62社にヒアリングとアンケート調査を行いました。本地域の特性としては、豊かな自然環境とものづくりが挙げられるとともに、開通の主体として輸送コストの削減や時間短縮による取引拡大などが高いポイントを占めております。また、こうした効果を高めるために必要なこととして、開通のメリットをより多くの企業の皆様に発信すべきであるとか、開通を見据えた事業展開を検討していくべきといった回答が多く、既に開通を見据えた取り組みをしている企業があることもわかりました。

こうしたことから事業者にとって開通のメリットは大変大きいものですが、今の時期から効果的な取り組みによって、より効果が大きくなるものと思われます。

次に、経済波及効果の推計ですが、画面左が整備効果、右が開通効果となります。整備効果は建設への直接投資によってもたらされる生産誘発による効果となります。これは建

設、直接投資額を県ごとに案分しまして、各県の産業連関表を当てはめた結果として、6,021億円と推計されました。開通効果は3時間圏内的人口増加による経済効果、それから交通短縮縮減による効果を足して推計したものでございます。時間短縮による観光客の増加に加え、時間短縮を金銭的価値として換算して、宿泊消費額に相当させたもので、年間131億、という効果が推計されました。

以上、開通時の経済効果は整備効果が6,022億円、開通効果が131億円となり、限定した調査の結果としても、開通の効果が非常に大きいことが確認されました。

また、ウェブアンケートやヒアリングの結果から開通効果をさらに高めるためには、今 の時期から住民、事業者、行政が連携した取り組みがさらに必要になることということが確認されました。

なお、今スクリーンでご紹介したもの、それからより詳しい報告につきましては、SENAのホームページで間もなく公開されますので、よろしかったら、そちらもご覧ください。

以上、三遠南信自動車道開通時の経済波及効果調査の結果報告です。どうもありがとうございました。

## 5 「道」分科会 要旨

*San-En-Nanshin Summit 2016 in Higashimikawa*

テーマ「新しい人の流れを支える広域幹線道路ネットワークづくり」

コーディネーター	豊橋市	市長	佐原 光一
報告者	中日本高速道路株式会社 名古屋支社	建設事業部長	江口 喜信
議会	浜松市議会	議長	鈴木 育男
議会	豊橋市議会	議長	古関 充宏
議会	飯田市議会	議長	木下 克志
行政	豊川市	市長	山脇 実
行政	新城市	市長	穂積 亮次
行政	田原市	市長	山下 政良
行政	駒ヶ根市	市長	杉本 幸治
行政	下條村	村長	伊藤 喜平
経済	駒ヶ根商工会議所	会頭	山浦 速夫
経済	天竜商工会	会長	大村 邦男
経済	湖西市商工会	会長	佐原 正晃
住民	NPO 法人地域づくりサポートネット	代表理事	山内 秀彦
住民	鞍掛山麓千枚田保存会	会長	小山 舜二

(敬称略)

### ■はじめに

コーディネーター／豊橋市 佐原市長



今、ご紹介いただきましたように本日のこの「道」分科会のコーディネーターを務めさ

せていただきます豊橋市の佐原でございます。皆様方どうぞよろしくお願ひいたします。

この部屋は200人ぐらいから250人ぐらいの演劇と音楽用の部屋です。したがいましてさきほどの部屋よりはちょっと音が反響するようですが、よく見ますとわかりますように両側の煉瓦が互い違いで組んであって、音が均一に反射しないように乱反射するようになっております。それは実際に地元の煉瓦工が1個ずつ積み重ねてつくった本物の煉瓦造りでございます。何かの折にさわってみていただきたいと思います。今ここで皆様が集まっているここが舞台になりまして、背中を向いている人は本当に失礼な演技者という

格好なのですけれども、むこうを向くとちょっと威圧感があるお客様の席になっていますので、そちらはお客様のつもりでやるのではなくて参加者の1人としてぜひ客席側の方もご一緒に議論に参加していただけるうれしいなと思います。

今日のメンバーを見ていきますと、やっぱり浜松市は道路が恵まれているというのがよくわかります。参加者に浜松市は議長さんしかいらっしゃらないです。ほかにいらしても旧浜松市ではない方です。浜松は、実はインターチェンジが7つか8つぐらいあるのではないかでしょうか。豊田市と並んでインターチェンジが多いまちですね。東三河のメンバーは首長を含めて結構いらっしゃるのが、道に飢えているからだということがよくわかりますね。田原なんか何にもないと言っています。ちなみに豊橋市も、高速道路が一部横切っている区間を除きますと、時速60キロを超えて走れる法定速度の道路が1つもないというまちで、多分全国の30万以上のまちでは唯一無二のまちということになっていますので、飢えていることがよくわかると思います。

もうひとつは、多分昨年度のテーマを見ていきますと、大変大事な道路をまちの中で、活かしていくのではないかといろいろなことを考えている方たちのお集まりだと思います。

最初に前年度のサミット分科会の議論のまとめと本日の分科会のテーマ、どんなお話をしたいということについて事務局から説明をさせていただきます。そのあと、中日本高速道路株式会社、名古屋支社の江口喜信建設事業部長から「新東名高速道路の豊田東ジャンクション～浜松引佐ジャンクション間の開通とその整備効果について」と題してご報告をいただくことになっています。それが終わったらあとで意見交換を行っていただきまして、今後推進していく議論等についてご意見をちょうだいできたらと考えています。

それでは、事務局からまず前年度サミット

の分科会の議論のまとめ、そして本日のポイントについて説明をお願いいたします。

## 事務局

それでは、前年度の議論について確認させていただきたいと思います。

一昨年10月27日開催の第22回三遠南信サミット2014in遠州の「道」分科会では、「中部圏の中核となる地域基盤の形成」をテーマに、交通基盤整備による効果とその効果を高める取り組みについて意見交換をいただきました。

その内容をまとめますと、大きく3点になります。

1つに三遠南信自動車道などの整備が進み、救急体制の拡充や生活圏の拡大、観光・産業の活性化など、本地域の活性化が徐々に図られつつあること。

2つ目、一方、今なお整備が途上であったり、一部遅延するものがあったりなど、交通基盤の整備における課題は依然として存在すること。

3つ目、人口減少時代における三遠南信地域のさらなる活性化の基盤づくりとして、三遠南信自動車道を始めとした基幹道路の早期整備をめざし、地域全体が一丸となって国及び県に強く要望する必要があること。

以上が昨年度の分科会の概要でございます。

続いて本年度のポイントであります。今年度のテーマは「三遠南信地域の創生」でございます。昨年度のサミットから、私たちを取り巻く環境は大きく変化しています。主なものとしまして、国は地方創生戦略を策定し、地方自治体も戦略を策定するなど、全国的に地方創生の取り組みが進められていること。

2点目は、昨年8月に新たな国土形成計画が閣議決定され、その中において対流促進型国土の形成を基本構想としていること。

3点目としまして、のちほど江口様のほう

からご報告があろうかと思いますが、新東名高速道路の浜松いなさジャンクションから豊田東ジャンクションまでの区間が開通し、企業立地の促進、あるいは観光圏域の拡大など地域の活性化が期待されることなどでございます。

こうした時代の流れを三遠南信地域における地方創生に結びつけるため、三遠南信自動車道の着実な整備や浜松三ヶ日豊橋道路の計画など、ネットワークの早期実現に対する地域の期待や課題などについて改めて認識の共有を図りますとともに、圏域内外からの新たな人の流れをつくり、地域間で連携して取り組む課題や今後の方針性について議論を深めることが大切であると考えています。

そのため、本年度の「道」分科会のテーマとしまして、新しい人の流れを支える広域幹線道路ネットワークづくりを取り上げ、皆さんに意見交換をお願いしたいと考えるものでございます。

#### コーディネーター／豊橋市 佐原市長

どうもありがとうございました。

それでは、引き続きまして NEXCO 中日本名古屋支社の江口様から、新東名高速道路（豊田東ジャンクション～浜松いなさジャンクション間）の開通と整備効果についてご報告をいただきたく存じます。よろしくお願ひいたします。

#### ■ 報告

##### 中日本高速道路株式会社 名古屋支社 江口建設事業部長

みなさん、こんにちは。中日本高速道路株式会社名古屋支社建設事業部長の江口でございます。

まず、新東名高速道路豊田東ジャンクション～浜松いなさジャンクションにつきましては、この13日土曜日、15時に無事開通を迎えることができました。お約束していたよりも、

のり面崩落とか重金属、あと橋梁の沈下等がございましたが、1年おくれになりましたが、無事開通を迎えることができました。これもひとえに今日ご出席の皆様初め、関係者の皆様のご支援ご協力のたまものでございます。改めて感謝申し上げます。

それでは、説明に入らせていただきます。

今回の開通によりまして、新東名高速道路につきましては、静岡県の御殿場ジャンクションから豊田東ジャンクションまで、今回55キロ開通した区間も含めまして200キロのダブルネットワーク、東名高速道路と新東名高速道路というダブルネットワークが完成しました。

こちらは、土曜日午前中に行われました開通式典の様子でございます。皆さんにご出席いただきまして無事とり行うことができました。土曜日につきましては、午後から荒れた天候になりましたが、開通式典の間は、朝方雨が降りましたが、式典のあった9時ごろから昼ぐらいまでは雨も風もやんで無事とり行うことができました。

会場としては、岡崎会場と新城会場ということで2つに分けて行いまして、新城会場では、新城出身の太田前国交大臣にごあいさつをいただいてイベントを進めさせていただいたという状況が、こちらの右下の写真です。

こちらは、開通区間の状況です。お配りしていた資料の中よりは最新のものを入れさせていただいておりますが、こちらが開通区間の状況をあらわしています。

開通区間の特色としまして、こちら、走行性ですけれども、新東名高速道路では、既に開通している静岡県区間と同様、東名高速道路に比べ道路のカーブや勾配を緩やかにするとともに耐久性の高いコンクリート舗装採用するなど、より安全で快適な走行環境を提供しますということで、東名高速道路は勾配が最大5%ぐらいありますが、新東名高速道路については最大でも2%しかない。規制速度は

100キロになりますが、設計速度としましては120キロを確保した設計となっております。

トンネル内での視認性ということで、LEDライトによりまして前方を走行する車や落下物を照らすことでドライバーが視認しやすくした前方を照明するプロビーム照明というものを採用しております。

橋梁のスリム化・コスト縮減という点において、新東名高速道路では橋梁など構造物が非常に多いということから、ストラット付のPC箱桁橋形式や鋼少主桁形式などのスリム化した橋梁形式を採用することによりまして、工事に使用する材料を軽減し、コスト縮減の取り組みを行っております。

地域環境への配慮としまして、盛土斜面では、もともと地域に自生している植物の苗を種から育てて盛土に植樹しています。また、工事に伴い、付替えた水路では、ナガレホトケドジョウなどの貴重な生物の生活環境に配慮した護岸工事を行っております。

こちらは、休憩施設でございます。今回の開通区間には、岡崎サービスエリアと長篠設楽原パーキングエリアをオープンします。

岡崎サービスエリアは、東海道五十三次の38番目の宿場というものをイメージしております。それと岡崎サービスエリアは、上り下り集約型でございまして、今言ったのは上り線、上のほうは宿場をイメージしています。反対側の下り線ですけれども、そちらは森のエントランスというものをイメージして、この顔みたいなものがありますけれども、あれは愛知県の県鳥であるコノハズクというものをイメージしてつくってあります。

それから、右側の長篠設楽原パーキングエリアでございますが、こちらにつきましては、長篠設楽原の戦いをイメージしております。上り線は武田軍をイメージしてつくっております。下り線は、織田・徳川連合軍をイメージしてつくっております。こちらにつきましても、開通して昨日はどちらも、サービスエ

リア、パーキングエリアに入る車で走行車線一番左の車線が渋滞、岡崎サービスエリアは最大4キロほど、長篠設楽原もちょっと渋滞が見られるということで、開通してすぐたくさんの方にご利用いただいているという状況でございます。

こちらの施設の駐車場規模でございますが、岡崎サービスエリアは上下集約で7万1,000平方メートルほどございまして、上り線が大型99台、小型が137台、下り側が大型92台、小型が139台、それから地域の方々が高速に入らなくても外側から利用できるぷらっとパークという駐車場を整備しております、こちらに60台とめていただけるというかたちで整備しております。

こちらの長篠設楽原パーキングエリアでございますけれども、こちらは上りと下りが分離型でございまして、上りは2万9,000平方メートル、大型68台、小型31台、ぷらっとパーク30台の駐車場を整備しております。下りにつきましては、3万3,000平方メートル、大型61台、小型28台、ぷらっとパーク30台という整備をしております。

先ほど東名高速道路で3万台減ったということを、昨日の状況から見られるということでございましたけれども、東名高速道路の慢性的な渋滞は大幅に緩和ということで、東名高速道路の三ヶ日ジャンクションから豊田ジャンクションでは年間600回程度の渋滞が発生しております、新東名高速道路の開通によりまして交通の分散が図れることで東名高速道路の交通量が減り、約8割の渋滞が削減されるものと考えております。

ただし、東名高速道路の三ヶ日から豊田ジャンクション間は、この区間を発着する交通量が多く、これらの交通は新東名高速道路に転換されないため、交通が集中する通勤時間帯や交通混雑時において渋滞が一部残る見込みということでございます。今、豊川、音羽蒲郡、岡崎というのは、それぞれインターチ

エンジの出入りが3万台ほどありますて、通勤時間帯は若干渋滞が残るという見込みをしております。

次は、大規模災害時の早期復旧への貢献についてでございます。新東名高速道路は、東名高速道路より山側を通過するために、近年、発生が危惧されています南海トラフ巨大地震が発生した際にも被害を受けにくくなっています。新東名高速道路の開通によりましてダブルネットワークを形成し、リダンダンシーが確保され、災害時の救援救護活動や復旧活動支えていけるということになります。

次に、大規模災害時の拠点機能についてでございます。休憩施設におきましては、災害発生時における自衛隊などの進出部隊の拠点機能及び高速道路をご利用されるお客様や地域住民の皆様の一時避難場所としての機能を有しております。主な設備としましては、緊急輸送用のヘリポートや自家発電設備、飲料水確保のための給水用非常用水栓、炊き出し用のガスユニットなどがあります。防災倉庫には食料、保存水、救護用品に加え仮設トイレ、夜間照明などを備えております。

各休憩施設では、年2回の防災訓練に加えまして、警察、消防などの関係機関と連携した訓練を実施しております。

次に、大規模更新工事における交通への影響軽減でございます。大規模更新工事を実施するためには長期間にわたる工事車線規制が必要になりますが、大きな渋滞が予想されます。新東名高速道路の開通によりまして、東名高速道路の代替ルートとして機能することで東名高速道路の大規模更新時の交通への影響を軽減できるということも考えております。

こちらは、観光産業への貢献でございます。新東名高速道路の開通によりまして、奥三河地域を日帰り圏域としまして車で90分以内に訪れることができる人口が約540万人から940万人に400万人ほど増加する。沿線の観光資源へのアクセス向上によりまして、地域の活性

化が図れるものと考えております。

次に、工場立地の促進についてでございます。左のグラフでございますけれども、2008年に起きたリーマンショック後の経済指標から工場立地は横ばい傾向にあったものの、開通されて件数が急激に増加しております。新東名高速道路の開通による利便性の向上によりまして、企業立地の増加と日本のものづくりの中心である中部圏域の産業の活性化が図れるものと考えています。

右側の岡崎東部工業団地、新城有海工業団地の状況を写真で載せておりますけれども、これとあわせて岡崎市の緑園工業団地、それから新城市の大宮・竹広工業団地、こちらについてもすべて完売と聞いております。

次に、物流効率化に関する効果でございます。この絵は、青い星のところ、数か所ございますが、こちらについては、新東名高速道路静岡県区間が整備される前にあった物流拠点でございまして、赤い星、これが新東名高速道路静岡県区間の開通後に整備されたものです。24年4月以降、整備されたものでございまして、新東名高速道路愛知県区間が開通しました今後の整備予定として左の黄色い星が既に予定されているということでございます。長距離輸送は、昼間渋滞するので基本的には夜間で行われておりますが、今回のダブルネットワーク化によって定時制が確保されるということで、夜間以外の輸送の検討が今進められていると聞いております。

最後、資料はないのですが、雇用の点について話をさせていただきたいと思います。

まず、雇用の創出ということで休憩施設、先ほど岡崎と長篠設楽原という話をしましたが、こちらのテナントの営業関係の職員ということで、岡崎は290名ほど、それから長篠設楽原は上下線合わせて70名ほど、テナント関係で360名ほど今回新たに募集して配置しております。

それから、休憩施設の清掃関係、私どもの

メンテナンス会社がありますが、岡崎のサービスエリア、上下集約ですが、そちらで40名、長篠設楽原で28人ほど今回新たに雇用しているという状況でございます。

それとあわせて料金所やパトロールの人員も若干、新たに増員ということあります。それ以外にも先ほどの工業団地とかそういうこところで進めば、必ず雇用がさらに波及されると考えております。

説明は以上でございます。私どもの高速道路事業につきまして、引き続きご支援ご協力のほどをよろしくお願ひします。

ありがとうございました。



## ■意見交換

### コーディネーター／豊橋市 佐原市長

江口様、どうもありがとうございました。

それでは、意見交換に移らせていただきます。円滑な進行にご協力をお願いいたします。

先ほど中日本高速道路株式会社江口様に新東名高速道路の開通の効果について、開通により、交流人口の増加や企業誘致の促進などが見込まれるという大変うれしいご報告がございました。その反面、開通による効果を我がまちに取り込むためには、三遠南信自動車道の着実な整備や浜松三ヶ日・豊橋道路の計画など広範な交流ネットワークの早期形成や各市町の取り組みに反映させるなど、さまざまな課題もあるかと思います。

そこで、開通を契機といたしました各地域の課題、それから今後の取り組みについてお

考えをまずお聞かせいただけたらと思います。

それでは、まず新城インターチェンジと長篠設楽原パーキングエリアが供用開始された新城市的穂積市長からお願ひしたいと思います。よろしくお願ひします。

### 新城市 穂積市長

新城市長の穂積亮次です。

新東名高速道路愛知県区間が一昨日に開通しました。

ここ2日間ですけれども、目に見えた変化といたしましては、新城市内の一般道を走っている車で名古屋ナンバーが非常に多くなりました。特に土曜、日曜、天気は悪かったのですけれども、私どもが名古屋を豊橋ナンバーの車が走っていても何も話題にもならないけれど、新城で名古屋ナンバーを見ると話題になるという、そんな変化が如実に起こっています。ここ数年間ほどは、三遠南信自動車道や新東名高速道路の浜松、静岡県側の開通によって新城の行楽地に結構浜松ナンバーがたくさんみえていたのですけれども、ここ2日間で名古屋ナンバーが一挙に目につくようになったのが大きな変化でありますので、報告させていただきます。

私ども新城市は、今日の須田先生のお話の中といえば古来豊川、天竜川の水運の陸の往路の結節点として栄えてきたまちですけれども、戦後は内陸工業地帯として衣を変えてこれまでやってきました。今回の新東名高速道路の開通によって、その内陸工業地としての製造業、集積をさらに進めていくという課題は、これまでと同じですが、さらに加えて観光交流と名古屋圏の方々の通勤・通学あるいは居住環境としての整備に大きな力を入れていくという、まちづくりにもう1つ新しいファクターが加わってくるだろうと見込んでいます。

そのために今年の7月ぐらいから、新城市内と名古屋のまちの中を直通で結ぶ通勤通学

用の高速バスを、1日3往復ほど運行する予定にしております。これによって、新城から名古屋圏の大学等へ通う若い人たちの利便性を図るとともに、今度は逆に名古屋圏の皆さんに居住環境としての新城の魅力をアピールして、新しいまちづくりの可能性を開いていきたいと思っています。

先ほど、江口さんのお話にありましたように奥三河地域へ90分圏内となる人口が一挙に400万人増えてまいりますので、奥三河地域にとっての大きなチャンスができると思っています。

それから、この広域の幹線でのネットワークによりまして、物の流れとともに、救急搬送ですか、命の道としての効果、それから私ども内陸部にありますので、南海トラフ等の巨大地震におけるバックアップ機能などの役割を担っていかなければならぬかなと思っています。

既に三遠南信自動車道の効果で東栄町の温泉施設、豊根村の茶臼山の芝桜、あるいは私どもの湯谷温泉等も旅行客が2割方増えておりますけれども、新東名高速道路、さらに三遠南信自動車道が全線つながることによる効果、さらには浜松三ヶ日・豊橋道路によって海側と直接結びつけられること、こうした非常に希望をもった1歩が、一昨日の新東名高速道路の開通によってでき上がったと思っています。

それから道路のことから少しそれぞれかもしれませんが、私ども新城市内にはJR飯田線が通っておりますので、今後、飯田線の新城駅と道の駅、そして新東名高速道路、名古屋と道路をつないでいきたいと思います。この飯田線は長野県の飯田市まで続いていくJRの鉄道でありますけれども、それを観光やあるいは交流のためにもっと生かしていくような方策を合わせて考えていかなければいけないと思っています。三遠南信も三遠南信自動車道ともうひとつJRの飯田線、そして新東名

高速道路などのネットワーク、こういうものを生かした新しい交流を目指していきたいと、思っております。

#### **コーディネーター／豊橋市 佐原市長**

ありがとうございました。

実は、先ほど、経済団体の午前中の会議の中で、報告があったのですけれども、三遠南信自動車道の効果は、もちろん直接投資は長野県側が一番多いですから、絶対額として一番大きいのですけれども、波及効果のペーセンテージは実は愛知県側のほうが大きい額という数字が出ています。今お示しされた例えれば東栄温泉であったり湯谷の温泉であったりそういうところのお客さんが今出ている試算だけでもとても伸びているというのは、実は我々、真剣に受けとめる価値のある報告だということが示されております。

今日の新聞に載っていましたが、秘境急行を使った旅行会社のプログラムが大変人気だそうです。

それでは、新城市から始めたので、東三河を最初に攻めさせていただきまして、豊橋市議会議長の古関さん、お願いできたらと思います。

#### **豊橋市議会 古関議長**

豊橋の古関でございます。

新東名高速道路は、先日の2月13日に浜松インターチェンジから豊田東ジャンクション間が開通し、御殿場ジャンクションから豊田東ジャンクションの約200キロが新東名高速道路と東名高速道路のダブルネットワークになりました。この開通に伴い、新東名高速道路を経由した東京方面と三遠南信自動車道を経由した信州方面へのアクセスの向上が期待されます。

そして、高速道路のこのような背後に大きな産業集積をもつ本市にとっては、まさに工業製品の安定輸送とコストの縮減と、南海ト

ラフ巨大地震等の災害時における物流通の確保等、安全安心面が課題になっています。こうした課題を解消するためには、浜松三ヶ日・豊橋道路の整備が不可欠と考えます。浜松三ヶ日・豊橋道路の整備のために調査実施や三遠南信自動車道の整備を促進するために、行政、経済界、市民の代弁者である議会と一体となって国及び県への要望に取り組んでいくことが重要であると考えております。

#### コーディネーター／豊橋市 佐原市長

ありがとうございます。三遠南信自動車道の延長線部分といったほうがわかりやすいのかもしれません、浜松三ヶ日・豊橋道路、三ヶ日のいなさジャンクションから南の国道23号バイパスまでというお話をいただきました。

それでは引き続き豊川市長の山脇様、お願いします。

#### 豊川市 山脇市長

豊川市長の山脇でございます。

一昨日の新東名高速道路の開通を大変我々も待望していたところでございまして、ご存じのように東名高速道路の音羽蒲郡インターチェンジ付近がいつも渋滞しておりますが、新東名高速道路の開通によりこれが大分緩和されるということで期待をしているところでございます。

実は、音羽蒲郡インターチェンジと名豊道路を結ぶ旧オレンジロードでございますけれども、これは今、大分渋滞をしているということでございます。これはやはり国道23号バイパスがまだ全線開通していないということで、蒲郡と豊橋の間の9.1キロが開通しておりませんので、これも大変渋滞しているということ、さらにこの地域国道では1号の国府付近等もいつも大渋滞しているということで、新東名高速道路とともに名豊道路の開通を一刻も早くお願いしたいと思っております。

それと、今、ここで新東名高速道路の新城インターチェンジが完成されたということで、実は南北軸が大分不足をしておりまして、ご承知のように新城インターチェンジと豊川のインターチェンジを結ぶ国道151号が非常に弱いということでございます。その間の新城バイパスは完成しておりますが、川田のところから豊川インターチェンジまでがまだまだという状況でございます。今、鋭意進めていますが、一刻も早い開通をお願いしたいということで、しっかりと鋭意協力しながら進めてもらいたいと思っていますので、よろしくお願ひいたします。

そのために、御津庁舎に名豊道路の分室を設置いたしまして、市の職員も配置し、この地域の用地買収に必死になって頑張っている状況でございますので、ご理解をいただきたいと思っています。

それと小坂井バイパスは3月6日に無料化になります。東名高速道路の交通量の増加も大変期待するところです。これは一般道ですので、通行が多いということです。私は常々申し上げておりますけれども、名豊道路の前芝インターチェンジから東名高速道路の豊川インターチェンジまでを高架で結ぶと一層効果が出ると思っておりまして、これも進められるとよいと思っているところでございます。

そんなことでやはり道路も大変重要でございまして、道路によってこの地域の発展ができるかという本当に重要な課題と認識しておりますので、今後とも皆さんと一緒にになってこの解決に向けてがんばってまいりたいと思っています。

#### コーディネーター／豊橋市 佐原市長

ありがとうございました。

幹線道路、特に高規格幹線道路が大きな動脈だとすると、そこから末端のところまで大事な栄養素を血管で届ける、またそれにつな

がる道路として、需要地まで届くこのネットワークというか、網の目のような部分がどうしても必要になってくる。これは工業などの産業でもそうですが、観光地でもそうですね。それを上手にさばくことによってよい自然を守れれば、よい生産もできれば、みんなが活発にものを考えて行動を起こせるようになると思います。

それでは、引き続きまして今度は天竜商工会の会長の大村様にお願いしたいと思います。

#### 天竜商工会 大村会長

天竜商工会の大村邦男でございます。このたび会長になりましたものですから、この会は初参加ということで今後お世話になりますが、よろしくお願ひいたします。

本商工会管内においては、三遠南信自動車道佐久間インターチェンジの開設を平成30年に控えております。将来的にはインターチェンジ周辺に集客可能な施設を建設し、経済基盤の強化や地域コミュニティ機能の復活が図られるよう、現在、その施策を検討中であります。

残念ながら、今現在、リニューアルの原田橋が全国で公表されておりまして、平成27年1月に発生した土砂崩れのため落橋したわけですけれども、生活基盤の道路を失っております。そのためにこのインターチェンジの町を二分しております、非常に苦労しておりますが、リニューアルよりも速いスピードで工事を行うということで新橋を念頭においていただいております。またあわせまして先ほどからお話を出る新東名高速道路は、浜北インターチェンジからこの三遠南信自動車道につながる道路でございますが、津波対策ということで、浜松の南区のほうへ運びながら、インターチェンジが避難道路につながるということで今進めておりますが、この道路が整備されるとさらに三遠南信自動車道、また新東名高速道路の効果も一段と上がると思ってい

るところでございます。

お願いばかりでございますけれども、当面は原田橋の早い完成が待たれているということでございますので、またお世話になりますが、よろしくお願ひしたいと思います。

#### コーディネーター／豊橋市 佐原市長

ありがとうございました。私も実は昨年の秋、原田橋の落橋のところを通過させていただきました。河川敷の中に仮設道路が通っているという珍しい道路です。実は、50年ぶりぐらいに佐久間ダムの紅葉を見に行きたいと言って佐久間ダムまで上がっていきまして、佐久間ダムのダム堤を越えて、今度は豊根村の方まで抜けて行ったことがありました。佐久間のインターチェンジを通っていただいて、ぜひ天竜木材で新しい国立競技場をつくってもらつたらいいなと思っています。

では、引き続き湖西の商工会会長の佐原様、お願ひいたします。

#### 湖西市商工会 佐原会長

私のところでは、本当に良い話であります。

大枠は大賛成ではあるのですが、ただ湖西市にとってこの道路は、まだ身に迫った道路じゃないのも事実であります。今後も良い道路が出来て湖西市が良くなるように期待している訳でございます。また、今までの状況を述べさせて頂きますと、2016年2月の新東名高速道路の全線開通によりまして、これまでの湖西市から三遠南信地域への交通は、格段と便利になりました。

また、課題となっていた東名高速道路の渋滞も大きく緩和され、さらに事故などによる渋滞発生も大幅に改善されたことで、より利便性が高くなっています、それはそれで大いに恩恵を受けております。

今後は、この地域の念願でもあります「浜松三ヶ日・豊橋道路」では無くて、「浜松・湖西・豊橋道路」の早期実現という事を、湖西

市の名前を入れた中で、お願ひしたいと思っております。

23年前に、三遠南信期成同盟が出来た時に、こういう「浜松三ヶ日・豊橋道路」という道路名が出来て、その後、ずっと私どもは名前の中に「湖西」という名前を入れて欲しい、と提案させてもらって発言をさせていただいた訳であります。予算化がされておりません。予算が付くときには、キチンとした地域調整がありますよ、と聞いている訳です。そして、いよいよ予算化がされそうな時期になりつつあるのではないか、と感じている訳でございますので、何とかお願ひしたいと思っております。また、湖西市は、浜松の西部地区を含めますと、工場出荷高が2兆数千億円ある地域という事から、物流その他諸々に大きな利用度のある地域でありますので、よろしくお願ひします。

#### コーディネーター／豊橋市 佐原市長

ありがとうございました。実は湖西の工業生産額が2兆円突破で、豊橋をまたいで田原の工業生産額も2兆円近くありますが、豊橋は1兆円ちょっとしかありません。多分南信州の方は御存じないと思いますが、浜松との結びつきも強いし、スズキ自動車さんとか一部ものは三河地方との工業とのつながりも強いということで、今、物流が現存の東名高速道路しかないものだから非常に苦労されているということを湖西の市長がおっしゃっておりました。

それから、名前の中に湖西がないということをずっと前から言わせていました、県境を出ると湖西と書いてあるよと僕が嘘ばっかりついていたのですけれども、そろそろそういうことにもいかなくなってきたなと思っています。湖西自身は本當にある意味、これから車の産業を支える部分がたくさんありますので、何か影響をさせていただければと思っております。ありがとうございました。

それでは、前半の部分の最後となりますけれども、鞍掛山麓千枚田の保存会会長、小山さんにお願いしたいと思います。

#### 鞍掛山麓千枚田保存会 小山会長

四谷千枚田の小山です。

今、奥三河は非常に変わってきました。というのは、三遠南信自動車道ができる前は、四谷の千枚田に来るほとんどの人が浜松とそれから小牧の人々に限られていたのです。本当にどこからも来ないので、その人々は、「本当にあんたたち暇だのん」というような感じで来ていたわけです。

それが三遠南信自動車道で浜松いなさインターチェンジ、それと鳳来峡インターチェンジができたがためにうちだけで約1万人増えました。年間に2万5,000人増えているうち1万人が増えたわけです。湯谷温泉とか鳳来うめの湯、それから東栄温泉、芝桜、すべてが結んできたことです。

そこで、午前中、住民セッションを行いました。そのときに奥三河、それから南信州の活性化にどう取り組むかということで、ロードサイクリングを提案しました。皆さん、街中で働いてくれたら、奥三河、奥のほうへ来て癒しを求めたらどうかという提案です。例えば鳳来ふれあいパークとか、各道の駅、それから東名高速道路とか、そういうところを拠点にして奥三河、南信州の地域活性化ということで、そのリピーターづくりをしていくたい、ということを提案し、いろいろ議論しました。

そして、もう1つは、新東名高速道路、新城からうちのほうへものすごい数の人が来ることになります。それをどうさばくかが心配なぐらいになるのではないかと思います。だから、その逆に今までじつとしていた、蛙が冬眠から覚めたような時代が来るというようなことで大きな期待をもっています。

それともう1つ、売木村とか阿南町、国道

151号をどうもっていくかということです。それにはやっぱりブログサイトを見る、その拠点づくりということを提言します。

#### コーディネーター／豊橋市 佐原市長

ありがとうございました。今のお話であつたとおり最初のお話でもありましたけれども、三遠南信自動車道で実は一番効果が大きかったのは愛知県側だということでした。今までそうですし、これからもそうだと思います。それを生かすという意味でいろいろなご活躍をされていると理解しています。

サイクリングは、実はJR東海に「飯田線が土日は空いているから、自転車を乗せられるサイクルトレインにしよう」と言ったら断られたのです。実は意外と思われるかもしれませんけれど、今、豊橋鉄道の渥美線は土日はサイクルトレインになっています。当初のもくろみは、伊良湖にサイクリングに行く人に使っていただこうと思ったのですが、もくろみどおりいかずに田原のおばちゃんが豊橋に来て、自転車でまちなかで買い物をして帰るというパターンになっています。それでも、土日には何十台単位で使っていただいています。

それから、サイクリングで名を馳せる所というのは幾つかありますし、関東に近いところでは栃木の山すその方にあります。そこは何をやっているかというと、どこの喫茶店とかレストランでも、みんな自転車を気軽にかけられる、自転車をかける棚みたいな柵をつくって必ず置いています。

それから、尾道、今治のしまなみ海道もやっています。尾道などは特にしっかりとサイクリング専用のホテルがあって、そこは自転車のメンテナンスもできるし、いろいろなことがとにかくできます。それから、いろいろな大会のときに、脱落した選手たちが、自転車を後ろに積みながら帰って来られるバスまであって、まちづくりの中で結構気合を入れ

ているところがあります。

奥三河というのは実は、忌野清志郎さんが作曲や歌で行き詰ったときに湯谷に泊まって自転車で走り回っていたということで有名なところです。その道の人たちはとてもよく御存じで、亡くなられた後しばらく訪問客が多くなったという話です。大変大事ないい視点だなというふうに思って、私たちもいらっしゃいプロジェクトみたいないろいろなものと一緒にになっていけたらいいなと考えています。

今のところ6人の方からお話を伺いました。ありがとうございました。新東名高速道路の浜松いなさジャンクションから豊田東ジャンクションまで開通しまして、これによりまして大変大きな東西の道路ができたなと思っています。それだけではなく南北に通じる三遠南信自動車道との大変すばらしい効果がこれから期待される、生まれてくるのではないかと思います。そういう意味では実に大きなチャンスだと思いますが、それをどういうふうに生かしていくかが課題であることが冒頭にあることがわかりました。

それでは、続いて、今度は新東名高速道路に限らず、三遠南信自動車道、そして、浜松三ヶ日湖西豊橋道路(浜松三ヶ日・豊橋道路)を含む圏域内の同一幹線道路ネットワーク、このネットワークの形成を展望しまして、今後三遠南信地域が連携して取り組むべき重要な課題についてのお考えをお聞かせいただけたらと思います。

また、これまでの広域幹線道路ネットワークの形成がもたらしました地域振興などの具体例などもございましたら、それもありませてお話をいただけたらと思います。

今度は7名の方からご発言を賜りたいと思います。最初に浜松市議会の議長の鈴木様からお願ひいたします。よろしくお願ひします。

#### 浜松市議会 鈴木議長

浜松の鈴木でございます。

この三遠南信地域の広域幹線道路ネットワークというのは、東西につきまして、飯田のほうの中央自動車道、こちら東名高速道路、新東名高速道路、国道1号バイパス、国道23号バイパスとしっかりとありますし、おととい新東名高速道路の新区間が開通したということでございます。そこに現在着々と進んではおりますけれども、三遠南信自動車道と東三河のほうの浜松三ヶ日豊橋道路と言つてしますと怒られますので浜松三ヶ日湖西豊橋道路（浜松三ヶ日・豊橋道路）という形になっておりまして、浜松三ヶ日湖西豊橋道路（浜松三ヶ日・豊橋道路）は調査が始まったということです。おかげさまで予算も順調についておりますので、我々としましても三遠南信自動車道が早く完成するということを、大変期待をしているところでございます。こうした国でのネットワークが進んでいくということは、今日のお話にもございましたけれども、三遠南信圏域の県境を越えての広域的な密接な連携につながっていくということで、圏域の経済発展のネットワークの中心になる形成の向上、それから今、地方創生に資する広範な交流促進、それから医療機関への搬送時間の短縮にもつながると思っております。それから災害時における輸送網の確保等で地域の安全安心、国土強靭化の視点からも極めて重要な役割をはたしていくものだと思っているところでございます。

こうした観点から経済の好循環をもたらす道路として効果が早期に發揮されて、大規模災害時には命をつなぐ道としての大変な効果が發揮できるよう、ミッシングリンクとなっている三遠南信自動車道それから浜松三ヶ日湖西豊橋道路（浜松三ヶ日・豊橋道路）の整備促進については、我々が地域一丸となって連携して取り組んでいくことが最重要的課題だと認識をしております。

そして、改めましてこの三遠南信地域の連携を深めて、地域の連携議論というものもあ

るわけですから、これから先この強力な連携をいかに活かしていくのか大変大きな大切な課題だと思っております。

そんなところでございます。よろしくお願ひします。

#### **コーディネーター／豊橋市 佐原市長**

ありがとうございました。浜松は東西の線が2本あり、3本目の国道1号バイパスが、僕らからするととても使いにくいかと思っているのですけれども、あまり話題にならないですね。だから、津波対策の防潮堤を造るという話になったとき、道路をそのまま上げて堤防にして立体交差の高規格道路にしてくれたらいいなと思ってみていたのですけれども、全然話題にならないので不思議だなと思って聞いていました。実は湖西に行くとき、今切のところの浜名湖大橋を渡つてすぐのところで立体交差がなくなってしまうとその後困つてしまうので、結構使い勝手が悪い道路の典型だと思います。

#### **浜松市議会 鈴木議長**

今は、政策的に余り道はつくらないでしょう。

#### **コーディネーター／豊橋市 佐原市長**

そうなのですね。ありがとうございました。三遠南信自動車道は予算が順調なので、多分今、皆さんそういう意味では浜松も南北の格差是正など、いろいろな立場からしっかりと道路の整備に力を入れていただいているなどということを強く感じました。

それでは南信地域ということで、飯田市議会の議長の木下様からお願いしたいと思います。

#### **飯田市議会 木下議長**

飯田市議会の木下と申します。

まず地域間の連携という観点で申します

と、今後発展が予想されます航空機の製造産業におきまして、アジアナンバー1航空宇宙産業クラスター形成特区の指定を受けました飯田、浜松、豊橋の連携を新東名高速道路、三遠南信自動車道の整備により、強化し、航空機生産拠点であります中京圏からの受注拡大に期待が持てる、ということでこの三遠南信自動車道に期待をもっているところでございます。

もう1つは、安心安全という観点でまいりますと、プレート型巨大地震により大規模な被災が想定される太平洋岸都市を支援するために、内陸と太平洋側を結ぶ災害に強い道路による広域防災ネットワークの構築という期待を込めまして、安心・安全、それから経済交流ということで三遠南信自動車道に非常に期待をもっているところでございます。

今日も私、朝6時半に家を出まして、中央道から回って東海環状を通ってお邪魔しました。なかなか近くを通るのが三遠南信自動車道でございまして、この三河地区と遠州地区は非常にいい道路が通っているのでございますけれども、南アルプスの向こうにある南信へは、まともな道路が通っておりません。アルプスで寸断されてしまっているわけでございます。南信地区の皆さんのがいかにこの三遠南信自動車道に期待をもっているか、こういうことでございますので、どうかひとつ早期開通をお願いするところであります。

ただ中央道の山本インターから天竜峡、ここまで区間が7、8年ほど前に開通し、供用されました。これによりまして飯田下伊那の南部地区、下條村とか阿南町とかそちらの地区の皆さんのが非常に中心地へ出てくるのに便利になったとか、中央道を利用しやすくなったりとか、また飯田市を見ますと、天竜峡ファクトリーパークという工業団地というのがあるのですけれども、そこでもその敷地が大分売れたとか、観光面でもある程度観光客が増えたとか、いろいろいい整備効果が出てきて

おります。やはりそういうことを考えますと、今、天竜峡から矢筈トンネルまでの工事が完成し、青崩峠が完成しますと、三遠南信自動車道が開通します。南信州の皆さんのが本当に楽しみにしておりますので、ぜひともよろしくお願ひしたいと、こういうふうに感じところでございます。

よろしくお願ひいたします。

#### コーディネーター／豊橋市 佐原市長

ありがとうございました。航空機産業のクラスターということで、それぞれ技術をもった企業が入っていたのだと思います。飯田市は、精密の計測器などで飛行機に積めるものを作っている企業が結構あります。飛行機と言えば飛行機の座席シートですが、この間全日空が採用してくれたという座席シートは、豊橋の工場でつくっていて、クッションも豊橋の工場でウレタンをつくっているということです。多分ここにいる人はほとんど御存じないと思いますけれども、多少は貢献できているのかなと思っています。浜松も当然先端の技術をもってやっていますし、非常に似通った産業がもともとあります。昔は物を動かすには河川が一番よかったので、古くから天竜川、豊川を使って、河川が文化としてつながり、その後、飯田の方が一生懸命頑張っていただいた飯田線が明治の時代にできて、それで今度は鉄道でつながりができました。車となつた今は途切れてしまっている。ここが三遠南信自動車道でつながって、さらなる飛躍を3段階目のステップになるというのはとても大きな意義だと私も思っています。

何よりも大きいのは、一番期待のある油を実は中央道で運べないという状況ですね。長いトンネルがあるために危険物積載車は通れません。油は今、中央線、鉄道で長野県まで運んでいます。東も西も鉄道で上がっています。三遠南信自動車道ができれば、自由に車で運べるようになる。これは、もちろんコスト

トとかいろいろな問題がありますし、先ほどあった防災面でのいざというときの緊急避難道という意味でも大きいと思っています。ありがとうございました。頑張っていきましょう。

それでは引き続きまして、田原市長の山下さんからお願ひします。

#### 田原市 山下市長

はい、わかりました。道路ができたことを1番うらやましく思っている1人の山下でございます。

まず、広域幹線道路ネットワーク形成、地域間交流についてお話したいと思いますが、多様性に富んだ三遠南信地域の資源を生かして農商工連携、そして、6次産業化を行うことが求められています。例えば田原市では、地元産の紅あずまというイモを長野県飯田市の酒造会社に委託をいたしまして、中央アルプスの伏流水を使って芋焼酎、亀若というものを製造いたしております。現在、よく売れておりますので、ぜひお買い求めいただきたいと思いますが、広域幹線道路ネットワークが形成されれば、こういった産業界での地域間連携はより一層可能性が広がるのではないかと考えられます。

また、観光面において、渥美半島は温暖な気候を生かした菜の花、それからいちご狩り、サーフィンなどの多くの観光資源があるように、三遠南信のそれぞれの地域にも多くの観光資源がございます。幹線道路ネットワークの形成は、それらを結びつけ、市や県境を越えた魅力的なエリアとして、発信していくことがより一層現実的なものとなると考えます。三遠南信地域、ひいてはさらに広域的に伊勢地域から北陸までつながる昇竜道を見すえて、圏域内外からの集客が可能になるのではないかと考えます。

そして、次に地域振興における効果の具体的な事例をということでござりますので、も

う1つあげさせていただきたいと思います。田原市から農産物の物流形態としましては、重要な国道259号または国道42号から国道1号、これは浜名バイパスでございますが、そこを経由して東名高速道路へという流れで浜松インターチェンジまで約2時間かかっていたものが、潮見バイパス及び豊橋東バイパス開通後は、浜松インターチェンジまで約1時間半と時間が短縮されて、早く着くことが可能となりました。

農作物は、市場の競りにかけられ価格が決まるため、早く、安く、そして確実に市場に届くことが必要不可欠でございます。そのためにもこれらの広域幹線道路ネットワークの整備効果は大変大きなものになっております。浜松三ヶ日湖西豊橋道路（浜松三ヶ日・豊橋道路）が実現した場合、さらに時間短縮が可能になります。そのために農業分野にとっても非常に大きな効果が得られると期待しております。

また、浜松地区からも三河港の利用がしやすくなった点、田原から浜松地区への通勤が可能になった点なども具体事例としてあげられます。今後ともさらなる地域振興のため、広域幹線道路ネットワーク形成に取り組んでいきたいと思います。ぜひ皆さん方と一緒にになって、取り組んでいきたいと思っております。よろしくお願ひいたします。

#### コーディネーター／豊橋市 佐原市長

ありがとうございました。地震があると交通が止まって、地震の揺れとでこぼこの揺れと両方があり、二重苦、三重苦で大変だと思いますけれども、防災上良い道は揺れが少ないのが何よりも大事なことですから、ぜひいいものを一緒につくっていきましょう。

それから、ネットワークができていろいろなところでいろいろな良い作物が1年中とれるという環境があることは、実は1番大事なポイントでもあるのです。私も海外にセールス

に行って分かったのですが、「一年中この枠をあなたたちは埋めることができますか」と必ず問われるのです。そうすると、例えば「豊橋のトマトは夏には出せません」と言った瞬間に、「じゃあ無理ですね」という話になります。その時に、気温の高いところと低いところの差を利用したり、日本のいろいろな地域の特性を利用したりして、「代わりのものを出せますよ」とか、いろいろなことを言えるような大変大きなマーケットを大切にしたいと思っています。ぜひそういう意味で、1次産業、2次産業、3次産業、それぞれにおいてネットワークでお互いのいいところを上手に生かしながら活用していくことができるようになる、そんな関係をつくっていきたいと思っています。

それでは次、4番目になりますけれども、駒ヶ根市の市長の杉本様からお願いしたいと思います。

### 駒ヶ根市 杉本市長

駒ヶ根市長の杉本でございます。

駒ヶ根市は地図で見るとこの三遠南信のサミットの1番北のはずれになるでしょうか。それから、この会議に入らせていただいたのも私になってからですので、本当に新米中の新米であります。今日は経済界を代表する皆さんにお見えですけれども、三遠南信自動車道ができるこの経済効果の大きさというのは、経済界の皆さんからも大きく出ていました。

特に東日本大震災を契機に、この三遠南信自動車道は改めて見直されました。いざというときに中心部からの支援をする命の道になるということで、一気に予算がたくさんついてきて現実のものとなりました。と申しますのも、伊那谷とこの三河の縁は昔から非常に強いわけであります。特に今日はサミットの前段で紹介がございました磐田市のしつらい太郎伝説のもとになる早太郎伝説の光前寺

は駒ヶ根市にあります。もともと青崩の道を昔の人は通っていて、その他いろいろなルートがありました。また、私の小さい頃もそうなのですけれども、三河漫才が必ずお正月になるとうちのほうに回ってきました。それから、秋葉講はもちろん盛んで、これからまちづくりをしていく上で歴史とか伝統文化を大事にしたまちづくりをすることというのは、やはり1番重要なことと思っておりまして、今回、このサミットに加わらせていただいたところでございます。

上伊那郡は8市町村あるのですけれども、南のほうの4市町村だけが今回合併しております、実は北のほうはまだ理解をいただいているないというのが現実でございます。ですので、上伊那の8市町村のうちの南部につきましては、今回このサミットに加入させていただいております。

というのも、やはりまちづくりを進めていく上で、それに加入すると同時にこの南信地域をもうひとつの高速交通網、リニアの新幹線が14年後に開通する事になっていますので、リニアとこの三遠南信自動車道の整備効果をいかに地域経済の発展につなげるかということで、今県と一緒にになって考えております。実は先週の金曜日に知事を座長にする伊那谷自治体会議というのができておりました。上伊那と下伊那全部の首長が入った会議です。その中でリニア、また三遠南信自動車道を生かしたリニアバレー構想というものを固めさせていただきました。4つの柱があります。

1つが、リニアができますと国際空港へ1時間でアクセスするグローバル活動拠点として世界とつながる、ということがひとつのキーワードであります。それから、この三遠南信地域でいえば、13兆円から15兆円という経済圏の中に、また250万という人口圏の中に一緒になることの経済効果をしっかりと出していこう、というのが1番目の柱です。

2番目が日本を支えるということでありま

す。巨大災害時のバックアップと食料、エネルギーの新しい供給拠点になろうというのが、2番目の柱であります。これはまさに三遠南信自動車道が急ピッチで進んでいる所以かなというのと同時に、いざというときにリスク分散をするという意味で研究、また医療等の拠点の受け皿になればいいのかなというのが2番目の柱であります。

それから3番目の柱が、ここで豊かに暮らすという視点であります。普段は大都市圏に住んでいても、週末とか一定期間に限って豊かな自然の中で、また伝統文化に触れて暮らす、そんな新しいライフスタイルをここから提供する対流促進圏域を形成したいというのが3番目の柱でございます。

それから4番目の柱が、ここで触れ合い、世界から多くの人が来て感動のフィールドにするという、滞留型観光の拠点施設にしたいということあります。それから特に当市においては、青年海外協力隊の訓練所があります。全国2か所しかありません。お陰さまでここから多くの若者が世界の各国に旅立っています。そんな環境がありまして、多くの國の大天使の皆さんが駒ヶ根市に来ていただいて、いろいろ交流するのです。ちょうどその時に、東京から90分ぐらいで行けますし、リニアができた時に、例えばここに大使村というのをつくったらと私が話したら、何人の大使が協力しますよと言つていただいたので、今、新しい観光フィールドとして大使村構想というのをつくりさせていただいて、地方創生の中でもそうしたことを掲げさせていただきましたら、外務省のほうからも面白いなと言われています。青年海外協力隊の訓練所があるのも、実は外務省の青年海外協力隊の部門も駒ヶ根に持ってきてもらいたいという省庁移転も一緒に預けてお願いしているのですけれども、大分こっちのほうが厳しいのでしょうか。やはり東京オリンピックを考えた場合、東京一極集中の投資よりも地方にもと

いうことがあるので、我々としてはこの三遠南信自動車道を見越して、空いた時にいつだって人が来てくれるようなそんな拠点施設をしっかりと作っていくことが重要だし、そういう意味ではこのメンバーとお互いに連携していかないといけないのかなと思っています。三遠南信自動車道の早期の開通、それからリニアを見越した将来のまちづくりをしっかりとしていくたいという思いもありますので、また皆さん方と連携ができればいいかなと思っておりますので、よろしくお願ひすると同時に、一時も早い三遠南信自動車道の整備について皆さんのお力もいただければと思っていますので、よろしくお願ひします。

ちなみに今朝来るときですけれども、豊田東から新東名高速道路ができたというのでどこまで行けるかなとやってみました。インターチェンジがどこにあるのか全然わからなかつたので、新城で降りて、国道151号で来ました。最初、ナビでは豊田ジャンクションを8時10分に出てこっちに来るように11時5分に着くとあったのです。新城を回ったら11時3分になつたので、そっちを回ったほうが早いでしょうね。渋滞があったので実際に着いたのは11時10分ぐらいでしたが、本当に早く、快適ですよね。豊川でB-1グランプリがあつたときは国道151号を使ったので、昔からの道も通りながら来られました。

#### コーディネーター／豊橋市 佐原市長

ありがとうございました。新東名高速道路の感想を述べてくださいてありがとうございます。私も、光前寺をのぞいたことがあります。何かおもしろいなと思って話を、物語をいろいろと、読ませていただきました。「二人静」という旅館に泊まって山は登りませんでしたが、朝行ったら混んでしまって大変だったんだろうなと思います。

新東名高速道路は、早く便利なのですけれど、景色はどうですか。

### **駒ヶ根市 杉本市長**

山と谷ばかりです。それに関していろいろな話をしていると思います。

### **コーディネーター／豊橋市 佐原市長**

国道151号を僕も去年、通ったのですけど、下條村へ入る途中交わるところで、まだ、大変なところが何か所かありました。御苦労さまでございます。

### **駒ヶ根市 杉本市長**

キーワードは、飯田線だと思うのですが、これから連携する中で私は飯田線をサイクルトレインにしたいとお願したのですけど、すぐ断られてしまって全然ダメでしたけど、結構自転車に乗る人もいるので、飯田線の活性化というのもぜひ、あわせればいいなと思っています。

### **コーディネーター／豊橋市 佐原市長**

同じことを飯田の市長もされたそうですけれども、全員門前払いをされてしまったということですね。

### **駒ヶ根市 杉本市長**

電車に乗りたい人もいるけど、そんな車両をつくって、もし何か事故があった場合に誰が責任を取るのですかと言われました。

### **コーディネーター／豊橋市 佐原市長**

僕は違う理由でした。新城駅で、自転車を抱えてあそこを渡るのかと言わされました。それぞれ、言われている理由が違います。ありがとうございます。

それでは、今少し話題になった下條村の伊藤村長お願いします。

### **下條村 伊藤村長**

下條村です。ここへ来ると国道151号という言葉が出るのですけれども、よそに行って

国道151号などという言葉を聞いたことがありませんので、ありがたいなと思っております。その国道151号は当然、飯田市から豊橋市の間の道でございますけれども、その沿線飯田市があって、その次に下條村という非常に小さな村があるわけでございまして、そこから参ったわけでございます。

私がこの世に生を受けて長いほうでございますけれども、今日、毎回この三遠南信の会合というのが盛会になってきてありがとうございます。

最初に私、昭和50年に初めて市議会に出させていただいたわけでございますけれども、そのときに飯田の計画する皆さんがありましたて、当時は浜北市でしたけれども、浜北市の田んぼの中にプレハブをつくって、そこへ行って「三遠南信というのをこれからつくるから見て來い」と言われて、何もないところへ行かされました。

当時、浜北市の市長さんは、若い方でございましたけれども、途中で何か問題がありましてお辞めになられた方でございます。住宅団地を見せていただいて「いやあ、すごいものだなあ」ということを強く印象に残ったことがあります。

それからの歴史でございますけれども、隆盛になったりそれから衰退したりということで、相当波がありました。そして、今回23回目ということでございまして、会場いっぱいのみなさん、熱気あふれる雰囲気の中で、いよいよ活発な議論をされたというのは、ありがたいことだなと思っております。

今日のテーマというのは、地域連携ということでございますけれども、私どもの地域のことを恥さらしのようでございますが申し上げると、そんなことがあったのか、というぐらい大変なところでございます。飯田市を中心におき、南信州広域連合というのを組んでおります。そして、その上が伊那谷ということでございまして、駒ヶ根市の商工会議所会頭

さんがおられるわけでございますけれども、その皆さんと一緒にになったのが伊那谷ということでございまして、私たち南信州ということを考えてみると、飯田市を中心として13の町村がいまだにあるということでございます。

何故合併しないかということでございますけれども、もう面積が広くて、四国の香川県並の面積でございます。林野率、平坦地対林野をみてみると、86%が林野、ということは、14%の中に住宅があり、耕地がありということでございまして、いくら国が、合併、合併と言っても全然、効果が出ないということで、3つか4つ減って、今、1市13町村でやっているところでございます。

そのために今、サイクルトレイン、サイクルの電車ということでございますけれども、あれは、考えられないということで、大体自転車に乗って遠距離を走るなどということは、それだけ経費がかかるわけでございまして、その考えも及ばないということが現実行ってみればわかると思います。

その中で、歯をくいしばって三遠南信自動車道がもう少しだ、そして、リニアがもう少しだということで、皆力を合わせてやっているところでございます。

地域連携ということでございますけれども、我々どもは、地域というと道路でございます。そうすると、道路連携というように考えます。先ほど飯田の市長さんが言いましたように、10年ほど前に降って湧いたような、リニア中央新幹線がJR東海で発案されて、あれよあれよという間に今の状態になったわけでございます。コースも決まり、駅も決まりそしてまた、時間距離も決まりということでございまして、今現在は、飯田市から東京へは、急行バスという名前の乗り物で行くのと、4時間15分、名古屋へは、2時間10分くらい。そして、浜松には2時間半かかるので、まさに陸の孤島でございますけれども、その陸の孤

島が、丸10年いたしますと、東京、品川から飯田までが45分から43分という時間になり、三遠南信自動車道は100キロでございますので、これがまた新東名高速道路、そしてまた浜松のほうに、あっという間に行けるという、画期的な計画があるわけでございます。

そうすると、今まで三遠南信自動車道もものすごくかかっていたものでございますが、それにプラスリニアということになって、三遠南信の結節点ということになって相乗効果が上がって、1足す1が4くらいの効果が出るということで、私どもも期待しているところでございます。

まだまだ言いたいことがあるのですけれども、1つ、感得したことがございます。三遠南信自動車道は沿海地方の災害があった場合の支援道路、南北を結ぶ国家強靭の道ということで位置づけておるわけでございますけれども、そのトンネル、青崩トンネルということで、日本でも3大破碎地帯の地を通るということで、私も現地に行って1、2回見てきました。何でこんな山奥に、そしてまたこんなに条件の悪いところを開けるのかということで、疑問に思ったのですけれども、この道は5キロ以内に收めれば、危険物が通れるということでございます。物資援助のとき、東北地帯を見ても、油が送れないということで非常に問題になったわけでございますけれども、そのために山の奥の非常に条件の悪いところを、5キロ以内に收めて、強引に道を通すということでございまして、なかなか素晴らしい計画だなということを感じているわけでございます。

いずれにいたしましても、一日千秋の思いで私ども、待っているわけでございます。それなりに活動を、力を尽くしてやっているところでございます

この際、また1つさらにその流れを一層強めていただく会であっていただきたくお願い申し上げて、報告とさせていただきます。

## コーディネーター／豊橋市 佐原市長

ありがとうございます。

5キロを超えると危険物が通れないで、5キロ以下に収めるルートが必要だということで、今、御説明いただいたとおりでございます。ありがとうございます。

それでは続きまして、駒ヶ根商工会議所会頭の山浦さんよろしくお願ひします。

## 駒ヶ根商工会議所 山浦会頭

駒ヶ根商工会議所の山浦でございます。先ほど、杉本市長さんのほうからもお話がありましたが、この度の市長選に無投票で再任をされました。ですから市民全員の支持を得たという状況でございますので私も全く市長と共に認識、同一の危機感を持っております。内容には重複した部分も一部あるかと思いますけれどもお許しをいただきたいと思います。

駒ヶ根市は、南信州の1番北の、飯田から4、50キロ離れているところにございまして、多少認識の違いといいますか、意識の違いというものはこの三遠南信自動車道にございます。

駒ヶ根は「アルプスがふたつ映えるまち」をキャッチフレーズにして山岳観光都市として、観光産業にも力を入れております。登山客を初めといたしまして、全国から多くの観光客の皆さんのが来ていただいておりますし、インバウンドの海外からのお客様も大勢見えるようになっております。

また、歴史的にも製造業が盛んな地域でございまして、三河、遠州地域の企業との取引も従来から大変多く行っております。広域避難道路のネットワークの形成で南信地域の精密部品、また電子部品、自動車部品業界と三河、遠州、南信の三遠南信地域の大手企業との取引が飛躍的に伸びると期待をしております。三遠南信地域全体への大きな経済効果を期待しているところであります。もちろん、輸送コストの削減とか、時間の短縮も十分にあります。

また、中央アルプス駒ヶ岳には、東洋一のロープウェイがかかっておりまして、温暖な三遠地域からアルプス高原地域までの標高差1,000メートルを1時間ちょっとで行き来ができるという時間短縮ができます。一大広域観光圏が実現するのではないかという期待をしております。大都市から観光客の流入も大きいものと思っております。南信地域、または、駒ヶ根地域の観光産業の一層の活性化に結びつくと期待をしております。

駒ヶ根市の第4次構想を見ますと観光客は現在120万人が見えていただいているのですけれど、200万人にふやして、1人当たりの観光客のお客さんから、1万円くらいのお金を地元に出していただくと、200億円の消費が地元に落ちるというような第4次構想の中でそんなもくろみを立てております。

連携して取り組ませていただきたいことは、三遠南信自動車道と中央道の結節するところは、現在では山本インターチェンジであります。飯田の北部方面にあります上伊那地域から見ますと大変遠回りになりますので、なんとか三遠南信自動車道の氏乗インターチェンジあたりから、国道153号へ接続し、またリニア新幹線の新駅へつながって座光寺スマートインターチェンジへつながるような高規格道路を上げていただくようなことを連携していっていただければ、地域全体にとっても一層利便性が増すと思っております。

国道153号の整備が行われております、伊南バイパスができております。飯島地域まで今、あと2キロを残すだけで道路が整備されております。完成されました駒ヶ根地域では、素晴らしい景観に配慮したまちづくりが行われまして、素晴らしい街並み、そこへ若い方たちの住宅が建ってきておりまして、そのバイパス沿線には、大型店舗も進出しておりますし、有名専門店が、次々に出店をしております。また、枝線も整備されておりますのでこの10年間で、工場立地も2倍くらいに増えて

いるということを言われております。

産業の発展、雇用増加には、どうしても道路整備が地方にとっては生命線だというふうに感じております。駒ヶ岳スマートインターも、平成29年に開設が予定されておりで、一層駒ヶ根地域が、発展をすると思っておりますし、また伊南バイパス沿いには、道の駅が飯島地区で今、建設中であります。まもなく開駅がされると思いますが、これができると地域産業の活性化が一層進むと期待しているところであります。

#### **コーディネーター／豊橋市 佐原市長**

ありがとうございました。駒ヶ根からは、行政も経済圏も一体化という力強いお話を伺いました。

三遠南信自動車道で、考えてみると我々と三遠南信サミットをやっているこの地域のメンバーにとってDNAのような存在かなと思っています。ぜひ、発展していただきたいと思います。

それでは、発表される方として最後になりますけど、NPO 法人地域づくりサポートネットの代表理事の山内さんからお願ひいたします。

#### **NPO 法人地域づくりネット 山内代表理事**

御紹介いただきました、山内と申します。

私のNPOは、浜松を拠点にして活動しながら、三遠南信地域住民ネットワーク協議会の世話人を務めています。そんな関係で今日は、住民ネットワーク協議会の中で、昨年12月にワークショップを開きながら、このサミットの分科会でどういうことを言うかと今日も午前中、住民セッションの中で、それぞれの分科会でどんなことを言うか、あるいは、ほかの人たちはどういうことを言ってほしいかということを言ってもらいながらそれを代弁するというようなつもりで来させていただいております。

そんなことで、2点私からご紹介なり、提案をさせていただきます。

1つは、先ほどサイクリングの話がありましたけれども、やはり高速交通が整備されてきて、そうするとより速い時間で目的地の近くまで行ける。そうしたら、そこで地域のいろいろな道、脇道であたったり、旧道であったり生活の道をめぐるというようなことの中で、実は皆さんのお手元のところには、行き渡っていないのですけど、こういった浜松サイクリングロードの国土交通省の社会実験を今年度やりました。

中日本さんもお見えになっているのですけれど、浜名湖サービスエリアは、新東名高速道路が延伸されるとますます利用者が減るだろうと、そうすると駐車場に余裕がでてくるわけです。今は、ぷらっとパークから入ることができて、それと20分で遊覧船がやってくるのですけれども、そこを起点にどこかへ、2時間ぐらいちょっと行って来られるではないかということです。これは、自転車で出るとかあるいは、船に自転車を載せてそれで少し走ってもらって他のところへ行けるという、そんなような形の楽しみを1つしながら、さらには、もうちょっと滞在型でやっていくために地域の受け入れ態勢として地域のコンビニとかカフェとかそういったところを自転車の休憩所にしたり、情報拠点を自転車の駅にしたり、あるいは、サイクリストをトレッカーの宿みたいなところに登録したり、そういうサイクルツーリズムの取り組みを今、浜名湖でやろうとしています。

その中では、天浜線に乗せたりとかあるいは、船に乗せたりとかいろいろやってバスとかそういうモーダルミックスなんかもやりながら、地域をめぐるということで、ことしのテーマは、新東名高速道路の延伸効果であろうと、その影響で逆に在来の東名高速道路が減る、減ることを逆手にとってそこをうまく地域に開かれたパーキングエリア、サービス

エリアみたいな形の多機能化とか、多面的利用ということを社会実験としてやっていました。

それもサイクリストの人たち、道路と観光の行政の方々、企業の各団体のそのようなNPOが事務局を務めながら国土交通省とか県も入って、そういった広域の連携をやっていました。そういった中でサイクリストの人たちからは、やはり天竜の地域であるとか、さらには田原とか、新城、普段そっちのほうも走っているよ、というようなことがあると、利用者の人たちには、浜名湖ではなく、渥美半島へ行ってみたりとか、鳳来に行ってみたり、いろいろな方面に行きたがるということで、そうすると、まさにこの三遠南信自動車道が整備されていれば、近くまで行ってちょっと走れます。ロードで大体100kmとか200kmとか走る人はざらにいますので、浜名湖は60、70kmで短く、もっとロングがほしいというのが実は今のニーズなのです。だから、そういった実際の利用者のニーズもきちんと取り入れながらやっぱり三遠南信自動車道とかに入れ込んでいくというような連携を我々地域ネットワークも進めるべきだなと思います。

先ほど自転車のラックの話で、那須町にはありますが、浜名湖は、天竜材を使ったラック、湖西ではものづくりの中小企業がラックをつくって、そこに木のバーをつけて、サドルをひっかけるタイプのものをつくるなど、三遠南信のいろんな地域のものを使いながらラックとか休憩所みたいなものをそれぞれ共通で情報発信していくというようなことができたらいいなというふうに思っています。

もう1つは、全体会のときにあった民俗芸能の話です。三遠南信は民俗芸能の宝庫で、祭りのある地域、祭り街道と称して、阿南町とか東栄町とかいろいろやっています。それを三遠南信に広めようという動きがあつて、それでずっと国土交通省のほうにも我々の方から要望していました。今年度、三遠南信の

祭り街道の基礎調査からやりたいです。それは道の駅を拠点にそこをゲートウェイとして祭りのある地域の風土、歴史、文化、食、自然などを紹介しながらそうした地域の普段の暮らしぶりをめぐってもらうような情報発信などを、道の駅とか地域の拠点を生かしながら行います。それは、道の駅のネットワーク化みたいなことにつながっていって、この三遠南信へいろいろな方面から来る、あるいは海外からのインバウンドで来る方にも案内してめぐってもらいます。お祭りは365日の何日分しかないけれども、残りの日でも訪れてもらえるし、そういった仕組みを考えていく必要があります。それらを道の駅とも連携しながら地域のゲートウェイとして生かしていくたらということで、今、国土交通省が遠州をまずモデルにちょっとやってみます。

来年あたりは、東三河とかあるいは、南信州でもやれたらという、本当は全部でやればいいのですけれども、国道事務所が管轄なものですから自分たちのテリトリーを越えてしまうわけにはいかないということで、まず、試しに遠州でやってみます。だからそれを今度は、ほかの方面に広げていこうということで考えておりますので、また行政の方々、あるいは商工会議所の皆さんに、こういった動きにご協力いただきたいなと思います。

#### コーディネーター／豊橋市 佐原市長

ありがとうございました。サイクリングの話や祭り街道の話を紹介していただきました。

サイクリングロードは、渥美半島も県が途中まで作って手放してしまったものがあり、途中少し危険な国道を通ったりするためどうしたらいいかと思っているのですけれども、一応県のホームページには、サイクリングロードと載っているのです。だから、途中少し海岸になっているあたりは大変ですけれども、上手に使いたいと思っています。それから下條村の村長さんのお話で、定年になると動け

ないとありましたが、動いてしまいます。こうした人々は、どんな坂でも山でも登って行ってしまいます。国道151号でもたまに走っています。愛知県から長野県に抜けたりして、国道152号も走っていたりします。それくらい行ってしまうのでぜひだまされたと思って、まちで1番の若い人向けのおいしい店を出してみたり、ラックをつくってみたり、サイクリングにも取り組んでほしいと思います。

祭り街道の話で、別の意味で祭りは地域のDNAだなど私ども思っていて、ぜひつなげて行きたいと思います。ありがとうございました。

そんなふうに地域間で取り組んでいらっしゃるいろいろな産業であったり、観光であったり文化交流等々、県内外の広域幹線道路ネットワークの整備が大変まちづくりに生かされていることがわかりますし、また我々ひとりひとりが頑張っていきたいと思います。

以上、発表者からはこれだけです。本当は、時間が押しているのですが、私の信念として、何かこの際言っておきたい、話しておきたいということありましたら、お時間少しだけすけれども取らせていただきたいと思います。いかがでしょうか。

#### 新城市議会 柴田議員

本日の三遠南信のことを思いながら新城市で市議会議員をやっております柴田賢治郎と申しますが、新城に新東名高速道路が通りまして、東西の充実とともに、ぜひ南北のアドケーションとして、南北の動きを活性化していきたいと思っております。そんな中で、江口様にお聞きしたいと思ったのですけれど、兵庫県のほうでは、東名高速道路の中に流通センター、流通の拠点をつくったというようなことがあったらしいのですけど、新城のほうにそういったことができたのかそういうことも聞いてみたいなと思いました。また、規模の大きさは違えども、旧道のほうにバリ

アのところが開いているものですから、そういうところからETC等が使えたらしいなど、あわせて聞いてみたいなと思いました質問させていただきました。

#### 中日本高速道路株式会社 名古屋支社 江口建設事業部長

1つ目は、流通センターですか。

#### 新城市議会 柴田議員

はい、大和ハウスさんとかがやられているとか。

#### 中日本高速道路株式会社 名古屋支社 江口建設事業部長

アクセスできるようにということですね。

#### 新城市議会 柴田議員

そうです。東名高速道路内に物流センターを入れ込んでしまったという。

#### 中日本高速道路株式会社 名古屋支社 江口建設事業部長

中日本ですか。

#### 新城市議会 柴田議員

いや、兵庫県ですので西日本ですね。

#### 中日本高速道路株式会社 名古屋支社 江口建設事業部長

ちょっと私もそこらへん詳しくはないのですけども、スマートインター的な形で連絡、連結するという形の協議、それも自治体の発起という形でいろいろスマートインターとかつくりていただいているのでそこは、自治体の方でいろいろ調整されて、スマートインター的なもので連結するということは、できると思います。

そういう形で、東名高速道路の上郷あたり

はトヨタの工場が近くにありますが、スマートインターで連結をしていると聞いておりま  
すし、本線でもそういう勉強会等で、岡崎あたりにそういうスマートインターをつくるとい  
いかも知れません。

#### **コーディネーター／豊橋市 佐原市長**

豊橋も頼んでいます。

チェックバリアを使っての物流、長距離トラックの運転手の労働時間のこともありますので、乗り継ぎ地点にするとか、いろんな意味で使えないかと思います。

#### **中日本高速道路株式会社 名古屋支社**

##### **江口建設事業部長**

中心というより、国のほうとか自治体の勉強会をつくっていただいて、その中にも中日本は入りますけども、その中で進めていければいいのではないかなど。

#### **コーディネーター／豊橋市 佐原市長**

今お話をされたのは、インターチェンジで降りずに、というものですね。

ついでにスマートインターもということを言っているのですけど、うちの道路関係部局もあまりよく理解できていないかも知れないで、我々ちょうど担当部署も来ているのでよく勉強して、中日本さんとも話し合っていきたいと思っています。

豊橋市はインターチェンジが全然ありませんし、田原市に至っては、高規格道路すら1つもないという、大変厳しい状況です。その中で2兆円でつくっているのだからすごいですね。

それでは、一通り皆様方のお話を頂戴しました。それで、実は私の立場としては、「道」分科会の意見交換の取りまとめを報告会の場所で発表しなければいけないというのがありますので、3点ほどにまとめます。

まず、1点目として新東名高速道路の開通、

そして三遠南信自動車道の整備によりまして、中央自動車道、東名高速道路、それから浜松三ヶ日湖西豊橋道路(浜松三ヶ日・豊橋道路)、広域幹線ネットワークの充実が進んだということだと思います。これがさらに、将来はリニア新幹線、飯田駅等で連絡することで沿線地域の交流にとどまらない、広域な交流ネットワークの形成が期待されているという点です。

それから2点目は、三遠南信地域の南北軸の交通基盤であります飯田線の話です。飯田線を活用して、広域的な活動の活性化を図るとともにリニア開通の経済効果が三遠南信地域の流通を進めることが重要であり、これは、鉄道系の話を取り入れさせていただいたということです。

それから3点目は、三遠南信自動車道を中心と考えていますから、三遠南信自動車道は私たちのこの地域の全員が持つDNAをまさに結びつける道路であり、医療機関への搬送や、災害時における緊急道路確保との観点からも、三遠南信自動車道の整備促進が重要であって三遠南信地域の創生の観点からも三遠南信地域の圏域の内外をむすぶ広域幹線道のネットワークを活用して、この三遠南信自動車道を上手に使うことで地域への新たな人の流れに結びつけるのが重要であります。

そして、もう1つ付け加えるなら、皆さんからお話をありました高規格の広域幹線道路が大事だということです。ただ、それからいろいろな地域の需要に対応する、観光であれ、産業であれ、安全であれ、安心であれ、血を通わせるには、その幹線道路とその地域を結ぶそれぞれの周辺地域への、周辺の道路の整備、そして活用が大変大切だということを加えさせていただけたらなと思っております。

こんなふうに、もうちょっとと言葉を上手に続けた上で発表させていただきたいと思います。

皆様のご協力によりまして、内容の濃い、

そして皆様方、十分な発言をいただけたのではないかなどと思っております。参加されました皆様方に心からお礼を申し上げたく存じます。

以上をもちまして「道」分科会を閉会とさせていただきます。

## 6 「技」分科会 要旨

*San-En-Nanshin Summit 2016 in Higashimikawa*

テーマ「地域の産業集積を活かした新たな雇用の創出」

コーディネーター	株式会社サイエンス・クリエイト	常務取締役	白坂 敬之介
報告者	豊橋市	産業部長	加藤 修一
行政	湖西市	市長	三上 元
行政	豊丘村	村長	下平 喜隆
行政	中川村	村長	曾我 逸郎
経済	磐田商工会議所	会頭	高木 昭三
経済	豊橋商工会議所	会頭	吉川 一弘
経済	豊川商工会議所	会頭	日比 嘉男
経済	蒲郡商工会議所	会頭	小池 高弘
経済	田原市商工会	会長	河合 利則
経済	新城市商工会	会長	本多 克弘
住民	NPO 法人森づくりフォーラム	副代表理事	原田 敏之
住民	天龍村柚餅子生産者組合	組合長	関 京子

(敬称略)

### ■はじめに

コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト  
白坂常務取締役



ただいまご紹介いただきました、サイエンスクリエイトの白坂と申します。本日は微力ながら、本分科会の議事進行と取りまとめを担当させていただきます。湖西市の三上市長、

豊橋商工会議所の吉川会頭を始め、ご参加の皆様、どうぞひとつよろしくお願ひいたします。

本日の進行ですが、最初に、事務局から前回の議論のおさらいと今回のテーマについてご説明いたします。次に豊橋市産業部の加藤修一部長から豊橋における海外展開の取組みと題してご報告いただきます。その後、意見交換を行い、今後推進する事業等について議論を深めていきたいと思います。

それでは、最初に、事務局から説明をお願いいたします。

### 事務局

それでは、前回の三遠南信サミット「技」分科会での議論について、おさらいをさせていただきます。

昨年の「技」分科会では、SENAにおける第2期重点プロジェクトを総括し、第3期に向けての方向性を議論いたしました。特に、新規事業の創出や既存事業の拡充、人材の育成について議論をいたしました。

まとめますと、以下の3点になります。

1点目といたしまして、各構成員の取り組みとして、国内外から、「ヒト・モノ・カネ」が集まるような魅力ある新産業及び環境の創出、集積を図るということでした。

2点目といたしまして、これをさらに発展・拡大させるために必要な人材の育成について、県境連携あるいは大学・行政・企業・市民団体の連携という点から仕組みづくりを検討するということでした。

3点目といたしまして、環境を創出する取り組みの一環として、SENAの事業をどんどん実施していくということでした。

今、申し上げましたことを踏まえ、今回の議論のテーマにつきまして、ご説明いたします。

三遠南信地域には、地域資源を生かした特色ある産業が形成されております。産・学・官の地域の連携を生かし、これらの特徴ある産業のポテンシャルを最大限に引き出し、新たな産業を生み出すことで、安定した地域の雇用に結びつけ、さらに地域への新しい人の流れにつなげるにはどうしたらよいか議論するため、地域の産業集積を生かした新たな雇用の創出を今回のテーマとさせていただきました。

**コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト  
白坂常務取締役**

ありがとうございます。

それでは次に、豊橋市における海外展開の取組みについて、豊橋市産業部長の加藤修一様、ご報告いただきます。よろしくお願いいいたします。

## ■ 報告

**豊橋市 加藤産業部長**

今ご紹介いただきました豊橋市産業部の加藤と申します。今日はよろしくお願ひいたします。

「技」の分科会でいろいろなことがこれから話し合われるかと思いますが、事例の紹介ということで、豊橋市における海外展開の取組みを、少しお話させていただきます。

豊橋市における海外展開の取組みということで、1つ目に、海外販路開拓に取り組む背景・課題を説明いたします。その後に、農産物と加工品に分けて、それぞれの取り組みを紹介させていただき、最後に、農産物加工品の今後の展開について説明いたします。よろしくお願ひします。

まず、海外販路開拓に取り組む背景・課題ですが、これは三遠南信地域共通の課題かと思います。1つ目の課題として、中小企業の集積がございまして、その各企業のグローバル化対応の支援、2つ目の課題として、間近に迫っている少子高齢化社会の到来による、国内市場の縮小の懸念があります。

これにつきましては、グローバル化、経営規模の小さい、農業も含めた事業者が海外展開、新たな市場を開拓するには、やはり地域が連携して、あるいは産学官関係機関が協力して対応すべきではないかということでございます。

それともう1つ、地域の特徴ある産業である農業につきましては、担い手不足による将来の農業への危機感、それと、安価な輸入農産物、TPPで大筋合意がされまして、今後そういう展開が必ずやってくるだろうということでお、地域農業をどのように守っていくかということが課題ございます。

こうした差し迫った課題に対しまして、大きな考え方で、地域の強みを生かした新たな施策を展開しなければなりません。市場開拓による事業継続の確保を通じて将来への不安

を払拭する必要があるだろうということでございます。

海外販路開拓に取り組む目標でございますが、先ほど言いましたように、海外に打って出る場合に、やはり地域の英知を集めて強い商品で地域ブランドを確立すべきで、そのためには、地域連携による6次産業化、農工商連携を実現するということでございます。小さな形態、農業も含む各事業者全体の経営基盤の底上げ、そこに伴う雇用の確保によって、地元の万作業が継続的に発展していく下地をつくる必要があるということで、海外展開に取り組んでいるところでございます。

初めに、農産物の取り組みでございます。

この図にありますように、主なターゲットを香港、タイ、バンコク、シンガポールとして現在取り組んでおります。この経過につきましては、これから説明させていただきますが、やはり豊橋市の場合、地元の強い農産物をアジア諸国に持っていくというところから、海外輸出の取組みが始まっております。

最初に取り組んだのが、平成19年度でございます。アジア各国に対してサンプル輸出、あるいはタイに行って、見本市に出展しているというところでございます。この平成19年の取り組みに関しましては、先ほど豊橋市と申しましたが、豊橋田原の広域農業の連絡会議で、2市2JAが一緒になって取り組むという形でスタートいたしました。

このときには、どうしていいのかわからぬいということがございまして、最初のアジア各国サンプル輸出という取り組みですが、各のスーパーに手当たり次第に一度ものを置いてくださいというようなお願ひの仕方で、このときは、豊橋が日本一の生産誇る次郎柿を無作為に置いて、とりあえずPRをしたというところでございます。

こうした取り組みが、19年、20年と続くわけですが、21年ぐらいから、ある程度海外に持つていって強い農産物が何かというところ

が固まってまいりました。やはり、田原のメロン、豊橋の柿というところを主軸にして、21年、22年、23年、24年というように取り組んでまいりました。ちなみに、21年のメロンにつきましては、8キロ入りの一箱という単位での販売ですが、全部で4,920キログラム、約5,000キログラムの輸出実績がございます。

そういうことで、メロンにつきましては、高価であるということと、日本のメロンについては甘いという評価が既にされておりましたので、かなり有力な商品として輸出に取り組んでいたところでございます。

ただ、特に田原市の農家さんになるのですけれども、通常、国内用のメロンのとり方、逆に言うと、国内市場に出る少し前にとて流通に乗せるということで、これを海外に持つていったときに、香港に着くときにはもう過熟してしまうと、ツルが少し枯れてというような状況もございまして、出荷ロスがかなりありました。これが大きな課題になっておりまして、生鮮食料品につきましては、どうしてもそういったことを解決する必要があるという状況で取り組んでまいりました。

こうした課題を持ちながら、平成25年以降になりますと、ある程度、相手方のバイヤーさんともネットワークができまして、先ほど言いましたように、柿、メロンにつきましては、過熟であるとか、輸送ルートの課題ということがございまして、そのころ豊橋市では、ミニトマト、トマトがかなり主流の農産物になっているため、これを海外に展開できないかということで、平成25年以降につきましては、どちらかというと、トマト、ミニトマトを主に海外展開を図っていくというところで取り組んでおります。

ただし、メロンとか柿がなくなったわけではなくて、これまでに取り組んできたセールスによって、一応商流ができているということで、現在におきましても、香港等の市場におきましては、ここの地元の農産物、特にメ

ロン、柿については、出回っているという状況がございますが、行政側の取り組みとしては、ここで一旦ミニトマトにシフトしたということでございます。

26年、27年という取り組みでございますが、先ほど言いましたように、香港につきましては、一定の商流ができたというところで、通常の商売で地元の農産物が香港に行くという形が整いました。新たな展開をするということで、シンガポールあるいはタイ、バンコクへの海外展開を図っていくという形になっております。

特に、これまでのノウハウで培ったバイヤーさんとの信頼関係を結ぶということに、シンガポール、タイ、バンコクでは力を入れておりますし、バイヤーを招聘して、豊橋の生産地を具体的に見ていただくというような取組みも行っております。

香港、シンガポールのバイヤーさんですが、日本で考えるみたいに仲卸とかという形ではなくて、確実にその方が店舗を持って直接販売しています。かなり有力な、簡単に言うとお金持ちの方が輸入事業を展開しておられるということで、ここにルートをつくればかなり大きな、各国の全国展開できるような販路が開拓できるという状況にございます。量販店での試食だとか展示会も必要だとは思うのですが、やはり確実な商流をつかむ、ルートをつかむということに力を入れる必要があると、今考えております。

これは、試験販売でございます。やはり、ハウスミカンとか巨峰という、地元でもかなりおいしい農産物に関しては、圧倒的に強みがございます。そういうものを選別して輸出事業を展開していくことが大事かと思います。

もう1つ、これは去年から始めたのですけれども、シンガポールに対しまして、Qoo10という韓国のネット販売の会社を通じまして、シンガポールをターゲットにインターネット

での販売を始めました。

これは先ほど言いましたように、量販店での試食販売だとか、一定店舗での販売の次に、相手国消費者の方がほしいと思ったときに手に入るような仕組みをつくる必要があるということで、インターネットでの販売を開始いたしました。ただこれにつきましては、やはりコストの面で単価が上がるという課題がございます。数をこなすためにはどうしたらいいかというところを、今模索しているところでございます。

次に、シンガポールでのおいしいジャパンへの出展です。これもやはり、量販店での試験販売ということでございます。やはり説明しながら試食してもらってという取組みというのは、継続的にやっていく必要があると考えております。そういうことをした商品は、やはり強いです。

これは少し変わった反応があったところですが、タイは、柿に関して特別な感情というか、商品価値を持っております。ハウスの次郎柿、少し早めにできるのですが、9月の頭ぐらいだと思いますが、タイでハウス次郎柿を販売いたしましたところ、ちょうど向こうで言う中秋節の少し前で、贈答用というところで消費の意識がかなり拡大している状況もありました。ハウスの次郎柿1つが2,500円で売れ、行った担当者によると飛ぶように売れたというようなことがありますし、日本人は好き嫌いがあると思うのですけれども、タイの方は少し固めのシャキシャキ感がある柿が、国王もお好きで、非常に重宝されるということで、2,500円で売れたということです。

これが1番考えなければいけないところで、地元農家の方は、生産者という立ち位置にいて、一定の品質のものを出せばいいということですが、消費者から逆算して、もうけるだけもうけるという経営の意識を農家の方に持っていただくといろいろな展開ができ、商品以外のいろいろな付加価値をつけたら、自動

的にその経営にメリットがあるという考え方をしていただくと、大変強い農業が確立されるのではないかと思います。本当に偶然な事例ですが、このハウス次郎柿をタイで売ったことによって、そういったことがわかりました。

もう1つが、アプローチの仕方として、販売だけではなくて、いろいろな料理に、この地域の農産物を使っていただくことが効果的ではないかと考え、間接的に消費を高めるということで、現地の有名シェフへのPRという取り組みを始めました。この方は、香港の料理人の先生みたいな方で、ご自分でもお店を開いてみえるのですが、この方に食材のアピールをいたしました。

このときは、先ほど言いました、豊橋市産のミニトマト、もう1つ全国シェアの高い大葉を持って行きました。そのときちょうど日本食がブームになっているということで、いろいろな調理法などをその場で考えていただくという形で、かなりのインパクトがあったと思っております。

先ほど言いましたように、小売店での販売、それと、現地のバイヤーをこちらに招聘いたしまして、生産現場を直接見ていただくと、そこでつくり方、安全・安心であるというようなことを農家の方と直接話していただいて、商品の優良さというのを生で、肌で味わっていただくという取組みをしております。

プロ向けセミナーの開催ということですが、先ほどの有名シェフ、ワンさんの調理デモを聞くのはすべて料理人だということで、調理方法も含めて市場開拓をやっていくということです。そのときに、農協職員も同行いたしまして、品質の維持でありますとか、栽培方法で安心して食べられるおいしいものですよということをあわせてプレゼンしております。

続きまして、加工品の取り組みでございます。

これは香港でして、味の誘惑という店舗にルートができました。ここは主に日本の加工品、お菓子を売っているところです。この中に、豊橋のコーナーをつくりました。これにつきましては、たまたま本市に本社を置くJ&Cという商社のルートで香港の味の誘惑という店舗に出店することができました。

これ以降、加工品につきましては、J&Cの商流に乗せて海外展開をするという形をとっております。こちらは通常のビジネス取引のため、無料になっています。豊橋市としては、J&Cに相談窓口を請け負っていただいております。そこで、J&Cは新たな商売として品物を開拓して、味の誘惑の豊橋コーナーを充実していくという形で、取り組んでおります。

香港での味の誘惑は4店舗で、今豊橋コーナーを展開しております。香港は、この2番目のホンハム店であるとか、3番目のティウケンレン店、MRT、地下鉄みたいなネットワークがございまして、その駅の周辺でかなり往来する方も多いという1等地のところで、味の誘惑豊橋コーナーが設置されております。

このような形で、いろいろな商品が置かれています。1度我々も行きましたけれども、やはり高校生、中学生、若い子たちが日本のお菓子を食べるということで、かなりにぎわっております。

これが豊橋コーナーのディスプレイです。ビデオも流して、ええじゃないか豊橋ののぼりも立てております。かなり豊橋色を出した店舗をつくっていただいております。

先ほど言いましたように、商流に乗せていくということで、平成26年度実績といたしましては、商品数で75点、うち新規が43点、企業数にいたしましても18社、内新規が9社ということで、今のところは、年度ごとに倍々というような形で、事業が拡大しております。平成26年度の売上実績140万香港ドルということですので、1億4,000万から1億5,000万円の売り上げがあるということです。先ほど言

いましたように、J&Cの商流のため、細かい数字がなかなか行政側に入ってきませんが、これは確実に事業化されていると認識しております。

これまでの取組みから言えることですが、農産物、食料品両方にとっても、やはりジャパンブランドは圧倒的に強いです。どこに行っても、スタートから高い評価を受けているということで、その背景をもとに地域としてどのように取り組んでいくかということが大事だと思います。

それとあと市場の大きさですが、富裕層の購買力というのは爆買という言葉にあるように、圧倒的なものがあります。ここをターゲットにしない手はないということでござります。

1番農産物について大事なことは、通年の棚の確保です。農産物はどうしても季節物になりますので、それが終わると違う国、違う地域のものが並びます。そうなってくると、その回復が難しいということで、通年の供給という仕組みづくり、メニューづくりということもあるかと思いますが、質の高い農産物、製品を通年で供給する地域のシステムが必要になってくるということです。

今後の取組みにつきましては、いろいろな種類の高品質農産物を取り揃えて、今で言う豊橋、それが東三河、三遠南信という形になればいいかと思いますが、通年で供給するシステムをつくり出すということが大事だということです。

それと、コストの問題で、輸出量を拡大して、商品の単価を下げるのも大切です。日本ブランドは強いのですが、国内の多産地との価格競争というのが大きな課題になっておりますので、量をふやすということです。

広域の取組みを進める必要があるということですが、今年度、平成27年度に、浜松、飯田、豊橋の農業担当者で連絡会議を開催しまして、情報交換を始めたところでございま

す。来年度は、協力して、タイからバイヤーを招聘するということで、繰り返しになりますが、三遠南信広域で1級品の商品を集めて、年間を通して供給するということでないと、なかなか海外輸出事業というのが根づかないということですので、今回を機に、少しずつネットワークをつくって、本気で取り組む必要があると考えております。

1つの事例でございますが、これからも豊橋市はこういった取り組みをまだまだ続けていく予定でございます。これにつきまして、いろいろご理解、ご支援、ご協力をいただきたいと思います。ありがとうございました。



#### ■意見交換

コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト  
白坂常務取締役

加藤様、大変興味深いお話をありがとうございました。

ただいま豊橋市の海外販路開拓への取組みについてお話をいただきました。内容につきまして、ご質問がありましたら、挙手で教えてください。ご質問ありますか。

では、曾我様どうぞ。

#### 中川村 曽我村長

中川村の曾我と申します。

質問ではないのですけれども、たまたま1990年代に私、広告の仕事で香港におりまし

て、農林水産省から、日本の農作物のテストマーケティングを香港でやれということで、当時はヤオハンがあつたり、それから大丸さんもあつたり、そういうところで協力をいただいてやりました。特に、柿については、次郎柿ではなくて富有柿がヤップン・プウ・ヤウチイと言うのですけれども、富有な柿ということで、中国人にとっては名前がすごくいいということで、農協系の輸出入をやっていける方もいらっしゃいましたけれども、中国資本がコンテナを全部富有柿満載で入れてくるので、価格的にはとてもたちうちできないとおっしゃっていました。

ほかのものでは、海苔だとか、カニカマだとか、そういったものについてテストマーケティングをやれと言われて、富裕層ではなくて、中間層向けに、ビデオをつくって、店頭で手巻き寿司のつくり方でホームパーティーやりませんかみたいなことをして売ったというような経験があります。

多分、農林水産省かどこかの棚の中に眠っているのではないかと思いますけれども、また何かそのようなことでも、うちも提携できればありがたいなと思います。

#### 報告者／豊橋市 加藤産業部長

名前のことですが、先ほど、豊橋は次郎柿という名前で出したのですけれども、やはりおっしゃられるみたいに、ナンバー2みたいな受けとめ方をされて、名前何とかならないかという話が本当にありました。一時は、豊橋柿というようなポスターをつくってということで、印象だとか、ネーミングというのは、販路をつくっていく上で非常に大事なことだと思います。次郎柿を太郎柿と言うわけにはいかないものですから。

#### コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト 白坂常務取締役

ありがとうございました。

さて、それでは、意見交換に移りたいと思います。時間が限られていますので、1人当たりの発言の時間を5分程度でお願いいたします。議事進行にご協力をどうぞよろしくお願ひいたします。

さて、今回の技分科会のテーマですけれども、先ほど事務局から報告がありましたように、地域の産業集積を生かした新たな雇用の創出です。

新たな雇用を生み出す新しい価値創造、あるいは新産業を創出していくには、地域ブランドの育成や、先ほど加藤様からご報告いただきました、海外を含めた新しい販路の開拓が大変重要になってくる訳ですが、まず、地域の産業集積を生かした地域のブランドの育成や販路開拓が雇用や地域への新しい人の流れの創出につながった具体的な事例をご紹介いただきたいと思います。

また、こうした活動を通して、雇用の創出や地域への人の流れ、新しい人の流れづくりにつなげていくために、どういった課題があるかといったところを教えていただきたいと思います。

それでは、御指名させていただきます。よろしくお願ひいたします。

最初に、豊川商工会議所の会頭、日比嘉男様、よろしくお願ひいたします。

#### 豊川商工会議所 日比会頭

豊川商工会議所の日比と申します。トップバッターということで、どうぞよろしくお願ひいたします。

最初に、皆様方ご存じの方が多いわけでございますけれども、豊川市について、若干申し上げたいと思います。

私ども豊川市は、ご案内のとおり、戦時中海軍工廠という軍需工場がございまして、戦後、その敷地に多くの自動車関連とかカメラ関係等に携わる工場を誘致しまして、比較的早いうちに、今でいう工業団地というような

ことであったかと思います。そのようなことも含めまして、精密機械機器だとか、あるいは先ほど申し上げました輸送機器、あるいは工学機器等々のさまざまな企業が進出をいただいています。ただ、いずれもと言っていいほど、本社機能を持った企業がないということと、営業所など、雇用はある程度伴っているのですけれども、いわゆる資金的な流通から言うと、どうしても本社機能がないということが1つ問題になっているかと思います。

そしてまた、観光としましては、東三河といえばまずどういうところか、どこを知っているかと聞くと、豊川稲荷は知っているよという方が多いかと思います。つい先日も東京のほうで、豊川稲荷の赤坂別院で節分祭に首都圏プロモーションということで、いろいろとPRをしてもらいながら、お時間をいただいて、いろいろな人に声かけをしても、やはり豊川さんというのを知らない方はないというぐらいのまちでして、豊川さんを核として、いろいろな形が商業的には形成をされていると思います。

また、先ほど来お話がありました農業も、自慢できるものがいろいろあるわけですけれども、特に我が市も花が、その花の中でも日本一、二の生産量を誇る、バラの花が大変有名でございます。バラも一時は、四季を通じて限られた時期だけだったのですけれども、今は1年中通して、何十種類というバラがあるわけです。これを先ほど来ております地域ブランドとして、どのようにくっつけていくかなということです。

それからもう1つ、これも第1部からずっとお話が出ておりますように、道路の問題があります。豊川市は大変恵まれております。インターチェンジを2つ持っております。東名高速道路の豊川インターチェンジ、そして平成合併によりまして、蒲郡音羽インターチェンジが加わり、この2つのインターチェンジを持つている関係で、豊橋市と比べると、本当

に恵まれているなと思います。

そして、今回合併により豊橋港からずっと蒲郡に続く沿岸部の真ん中にある旧御津町の工業団地、それから内陸部の山間部の旧一宮というところの工業団地が加わりましたが、震災以来、湾岸部、臨海部の工業団地は本当に引き合いがなくて困っている一方で、逆に内陸部の旧一宮に大木町の工業団地は売り出してすぐに完売をしたということでございます。

そのような中で、これから2つのインターチェンジとの絡み合わせ、そして沿岸部の工業地帯と内陸部の工業地帯をこれからどのようにつくり出していくかということが課題になるかと思います。

ただ、豊川市の今や中心地になろうとしている豊川市民病院の周りに、スズキさんと日立さんの2社が出ていましたが、今現在日立さんは休業になり、スズキさんはまだ若干はやっているのですけれども、この2社が今年から再来年にかけて全面撤退ということで、大変頭の痛いところでございます。けれども、ここをどのようにしていくかというのが、これから豊川の大きく変わってくることではないのかなという中で、いずれにしましても、そういう環境に恵まれた中で、農商工連携をさらに強めながら、そういった特性を生かし、地域資源を生かし、その強みを生かす中で雇用を生み出していくことが何よりも必要だということで、会議所の会員、そして地域、それからもう1つは、JAさんとJAさんのネットワークを含んで協力を強めている状況でございます。

ざっと申し上げますと、そのようなことでございます。よろしくお願いします。

**コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト  
白坂常務取締役**

どうもありがとうございました。

それでは次に、蒲郡商工会議所の会頭、小

池高弘様、蒲郡の状況をお願いいたします。

### 蒲郡商工会議所 小池会頭

蒲郡は、ご承知のとおり観光地でございまして、「みかわdeオンパク」という事業、10月の頭から2か月、今年は86日間やりましたけれども、そこに来ていただく方に楽しんでいただこうという95の体験プログラムをやっております。なお、蒲郡市を除いた7市町村で16、西尾と岡崎で14のプログラムがあり、95のプログラムのうち30のプログラムを蒲郡以外でつくっていただいている。

なぜこの「みかわdeオンパク」かということは、もともと蒲郡はずっと観光地としてある程度栄えてきたのですが、観光協会も含めて旅館組合みたいな色彩が強くて、旅館を目的に来ていただいて泊まつていただくという観光だったのです。だから、いろいろなPRに、関西や東京に行っても、蒲郡は温泉郷というPRをするわけです。

ただ、今は我々もそうですけれども、宿泊だけで観光に行くというのは少ないし、また蒲郡市に行く、田原市に行くとか、豊橋市に行くと観光客は言わないので。蒲郡に行くと行ったら、蒲郡周辺に行くわけで、市のボーダーは関係ないと思うのです。

そういった意味で、こういう着地型の、その地域でどのような楽しみがあるのかと、そういうことをつくっていく、地域ブランディングをするというのが、この「みかわdeオンパク」の目的であります。

蒲郡も11年前に観光交流立市宣言をして、観光業者だけでなく、オール市民で観光という切り口で、住んでよいまち、訪ねてよいまち、帰りたくなるまちというまちづくりをしようとしています。そういう意味では、蒲郡市のおもてなしコンシェルジュ検定は、今年で合格者がちょうど1,000人になりますけれども、合格者の中で、おもてなしコンシェルジュクラブというのをつくって、いろい

ろ発信をしていただいている。この「みかわdeオンパク」も、もともとは蒲郡の、オンパクイン蒲郡だったのでけれども、先ほど言ったように、観光客は何も蒲郡市だけに来るわけではなく、この地域に来るだろうということで、いろいろ声かけして、今は「みかわdeオンパク」ということになっています。

そういうことを考えると、ここ三遠南信のブランディングをどうするかというのは非常に大きな問題でして、我々蒲郡は東三河の一員で、東三河のブランディングをどうするかということを一生懸命考えるわけで、ほの国というブランディングもありますけれども、では海外へ行ってほの国と言ったらどれぐらいの人が知っているだろうかと思うのです。三河というのはある程度、トヨタもあるし、三河武士もあるし、小学校のときから教科書にも出てくるし、意外と知っているわけです。

だから、三河の中に西三河と東三河があって、その中の東三河がほの国だというのは、すごくわかりやすいのだけれども、ではSENA、三遠南信というブランディングはどうするかという問題についてそろそろ真剣に考えなければなりません。名前だけではなくて、この地域を外から見たときに売りにして、大きな地域をブランディングするということを少し考えていかないと大変だろうなと思っています。これは「みかわdeオンパク」をやっていて、常々我々が東三河、または三河というブランディングを外に持っていくときに考えることなのです。

だからそれと同じように、せっかくこうやって、県境をまたいだ経済圏をつくろうという動きの中で、広域といったときに、どこのまちでも、愛知県というのはものづくりの県なので、外にマーケットを持って産業として育成していくというのは1つですけれども、観光というのは、外から人を呼んできてマーケットがつくれるので、どこのまちもやりたいのです。

やっている側はみんな日本一だと思っているのだけれども、観光客にとってみるとランクがあると思うのです。だから、そういうものをどこのあたりで、どこをターゲットに、今まで1泊2日といつたら競争が国内だったかも知れないけれども、2泊3日になつたら香港が競争相手になつたり、競争相手も変わってくるので、そのあたりも、我々せっかくSENAで集まっているので、真剣に細かく議論していくことが必要かなと、そのように思いながら、今日のSENAの会議に参加しました。

蒲郡の場合はとにかく観光で、観光というのは、そこにしかない風景、それと歴史、そして食、人、そういうものが資源になりますので、そういうものを1つ1つ磨いていくことが大切なだろうなと思います。

それと、蒲郡はそれにもう1つ、今ヘルスケアのことをやっていますから、観光というプラットホームにいかにヘルスケア、健康のことをのつけていくか、そういうことも含めて、これから頑張っていきたいと思っております。

#### コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト 白坂常務取締役

ありがとうございます。

三遠南信としてのブランド、非常に貴重なテーマだと思います。

では、次は、長野県の中川村から、村長の曾我逸郎様、お願いします。

#### 中川村 曽我村長

曾我と申します。よろしくお願いします。

実は、日本の中でも先進的な工業地帯である三遠南信の皆さん方のお話を聞く技分科会というのは、私どもが来るには違う世界かなと思ったのですけれども、今日のお話も、農業の話などもあったので、大変ホッとしたところです。

正直なところ、なかなか知らない部分がま

だまだ多いので、ぜひ勉強させていただきたいなと思って、この会に参加をさせていただきました。どうも大変ありがとうございます。

中川村は、東京にも中央道から行けますし、名古屋にもすぐ中央道で行けるというところで、それからリニアもできる、三遠南信自動車道もできるということで、大変都会への移動が楽で、それでしかも雪も降らないし、夏はドライで非常に過ごしやすいというところで、暮らしやすいところだと思います。

そういうことがあってかないのか、先ほど、グリーンバレーのお話がありましたけれども、うちの村にも、大変たくさんの方々が集まって、いろいろな活動を、それぞれ刺激をし合いながらやっていることがあります。

オンパクもあるのですけれども、オンパクのほかにも、アトリエ開放展と、その方が一緒に、ゴールデンウィークに自分たちのアトリエを開放するというようなこともやっております。

農業につきましては、リンゴ、ブドウ、桃等々の果樹を中心に、いろいろな品種をたくさんつくっています。ボリュームが出せないので、外に、海外や都会に打って出で、ブランドを構築するというほどの量を出せていないというところがありますので、私としては、来ていただいて、ディープなファンになっていただき、生産量もそんなに多くないので、このおじさんのつくったこれはおいしいとか、このおじさんの打ったそばはうまいとか、ここにおもしろいおじさんがいるとか、そのような形で、人とのつながりをつくって体験をしていただく必要があるのかなと思っています。そういう意味で、交通の便がいいということは有利なところだし、來てもすごく快適に過ごせるという場所なのでいいと思いますが、なかなかそこら辺の人の魅力をどのようにわかりやすく、発信するのかというところが難しいと思っています。ただ、たくさん来

てもらっても相手ができないので、ちょうどいいぐらいの人数の方々に細々と来ていただけるような体制づくりが必要かなと思ってています。

そういう意味で言うと、この三遠南信自動車道で非常に多くの方々が来ることができます、先ほどお話をありましたけれども、車で3時間ぐらいでちょうど来られる距離になりますので、こちらの皆さん方との交流、中川からこちらに来たり、三河の方々、それから遠州の皆様方が来ていただけるようなことがあればいいのかなというようなことを考えながら勉強させていただこうと思ってきました。

あとは、伊那食品工業の塚越さんという会長さんがいらっしゃって、豊田章男さんといろいろ対談などをされていますけれども、その方が、去年、中川村で100年少し続いた造り酒屋の後継者がいなくてやっていけないというところを資本傘下に入れて、経営を持っていただいたということがあります。その辺の新しい経営のところで、お酒づくりというようなことが発展して、そこからまた食だとか、農業だとか、そちらのほうに発展していくべきかと思います。

あと、鹿もたくさんいて、食害もあるものですから、ジビエの取り組みなどもしています。東京のフレンチレストランなどに出しているということをしておりますので、先ほど申し上げたように、みんなが知っていないでも、ディープのファンの方はしっかりと毎回、毎回、ごひいきにしていただけるような、そういうものをどれだけつくれるかということを目指していかなくてはいけないのかなと思っています。

#### コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト 白坂常務取締役

ありがとうございます。

各地域の特色ある産業、あるいは地域資源を生かした取組みをご紹介いただきました。

そういった取組みには、地域の雇用や地域への新しい人の流れの創出に結びつけていくためには、やはり幾つか課題があることもよくわかりました。

それでは次に、地域ブランドの育成、あるいは海外を含めた販路の開拓を進めていく場合に、圏域内で連携して取り組むべき課題について、お考えをお聞きしたいと思います。

それでは、これも順番にご指名させていただきます。

最初に、豊橋商工会議所の会頭、吉川一弘様、お願ひいたします。

#### 豊橋商工会議所 吉川会頭

豊橋商工会議所の吉川でございます。よろしくお願ひを申し上げます。

初めに、東三河地域におきます取組みについて、少しお話をさせていただきたいと思っております。

いつも申し上げているのですけれども、東三河全ての商工会議所、商工会を構成員として東三河広域経済連合会を組織しております、その中に、ものづくり振興に特化いたしました東三河産業創出協議会を設けて、サイエンスクリエイト、豊橋技術科学大学、また東三河のものづくり企業の皆さん方とともに連携をしながら、新産業や新製品の開発または販路の開拓等につながるような支援をやっているところでございます。

現在、その活動の1つといたしましては、ビジネスマッチングの事業というものがございまして、ここでは、地元企業の見本市などの見学とか視察会を開催しております。一方では、地域の絆情報交換商談会を実施しており、今回4回目となります本年度は、198の企業の皆様方がご参加いただきまして、274の商談が行われたところあります。追跡いたしましたアンケートによりますと、商談中とか成立予定という回答を取り引きが成立したと考えますと、約60%に上る方が回答いただい

ておりますて、この商談会が大きな成果を上げることができたものと考えております。

来年度には、2年に1度の開催ですが、ものづくり企業が一堂に会します東三河最大の展示博覧会であります「ものづくり博2016イン東三河」を、本年6月17日の金曜日と18日の土曜日の2日間にわたり、およそ100の企業、団体の皆様によるご出展をいただき豊橋市総合体育館で開催いたします。

東三河の企業を中心といたしました展示会ではありますけれども、前回の開催時のときも、遠州、南信州の皆様方も出展をいただいておりますので、皆様方で興味がございましたら、2月末まで出展者を募集いたしておりますので、よろしくお願ひいたしたいと思っております。今日はパンフレットの中にものづくり博のパンフレットが入っておりまして、まだ出展者を募集している最中でございますので、ぜひよろしくお願ひいたします。PRを兼ねまして、お話をさせていただきました。三遠南信地域の皆様方にも、いろいろな形で産業の交流とか、新たなビジネスのきっかけになっていただければありがたいと思っております。

異業種交流を通じまして、参加されます企業の皆様方が課題の解決や新たなビジネスのチャンス、発見する場を提供させていただいていると解釈しております。こうした事業を通じて感じるのは、すぐれた技術商品がありますけれども、それを活用する相手がなければなりませんので、こうした企業が持つ宝を引き出しまして、新しい価値をつくれるようなマッチングを促すことに力を入れているところであります。そういう役割を我々は担っていると感じておりますので、ぜひお願いしたいと思います。

それともう1点、今回のテーマに沿いました取組みを行っている事例をお話させていただきます。東三河の商工会議所、商工会も参加をさせていただいております、食農産業ク

ラスター推進協議会の活動でございます。こちらは、豊橋市の第三セクター、サイエンスクリエイトに事務局を置き、東三河を中心に、会員として100を超える農業団体、農業関係企業、金融機関などが加入しております。賛助会員として、大学、行政、そして公的機関が加わっているところでございます。製造や流通などの食と農にかかわります業種間で連携しながら、商品、事業、生産、加工方法におきまます新しい価値を生み出して次世代に継承できる地域産業を集積していく実行組織でございます。

先ほど、豊橋市の加藤産業部長さんからもご紹介がございましたけれども、地域資源の海外輸出事業、また生産農家と地元食品メーカーとの連携、そして地域農作物のブランド化、こういったことが先ほどの説明で見てとれたところだと思いますけれども、地元や地域が誇れる商品をこれからも創出していくために、こういったことに力を注ぎたいと思っております。こうした事業と並行いたしまして、農業関連技術の開発とか普及、そして人材育成も、行っているところでございます。

また近年は、農工商連携とか、6次産業化ということが言われております。ほかの業種との交流、また農工商の技術が集積しております東三河地域の魅力や利点を生かした新商品やサービスをつくり出してきておりますので、6次産業化におけるブランディングや商品開発、こちらのほうは専門のコーディネーターを介して、会員、企業間の連携を図っているところでございます。

このような活動によりまして、個々の事業者が抱える課題を解決して、不足をする技術等につきましては、会員同士のマッチングにより、新商品開発などサポートしておりますけれども、また豊橋市の皆さんからもいろいろとご指導をいただいているところでございます。

それから、東三河産業創出協議会とか、食

農産業クラスター推進協議会のこのような取り組みにつきましては、東三河地域は、愛知県によります東三河県庁の開設、私ども商工会議所、商工会によります東三河広域経済連合会の設立、そして各市町村によります東三河広域連合の設置と、いろいろな形で各地域で、また広域的に活動しております、東三河は1つという言葉は、もう10年も前からいろいろな形でやっておりまして、産学官連携をしながら、地域のあらゆる資源の総合化、融合化によります広域連携を進めまして、次の世代に、時代に対応しました東三河広域経済圏の構築を目指している途上でございますので、皆さん方もご協力をお願いいたしたいと思います。

また、三遠南信地域の経済発展と成長を獲得していくためには、地域内に広く目を向けまして、各地域が誇る製造業、そして地域の特色を生かしました産業の連携を行いまして、さらなる集積、高度化を進めていくとともに、それを担う地元に根ざしました地域の人材の育成が大事でございますし、また地域間競争に打ち勝っていくためには、新たな価値を創造できる力を強化していくことが必要ではないかと考えておりますので、ぜひよろしくお願ひいたします。

**コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト  
白坂常務取締役**

ありがとうございます。

では、引き続きまして、新城市商工会の会長、本多克弘様、お願ひいたします。

**新城市商工会 本多会長**

私は、技というテーマで、うちは製造業なものですから、技は技術の話ではないかなと思っていましたので、少し場違いかなと思います。

新城市、先週の13日土曜日、新東名高速道路が開通しました。新城インターチェンジと

いうのは、まさしく日本のど真ん中です。なおかつ、飯田まで三遠南信自動車道が開通すれば、まさしく日本のど真ん中、豊橋がセンターではなくて、新城がセンターになる時代がくるのではないかと期待しております、田原さんが非常にうらやましがるわけですがれども、一足早く、いい時代を迎えることができました。ほっといたらよくなる、何もしなくてもよくなるよと私はよく言うのです。新城の人が気づかないだけなのです。非常に注目されています。

今や、何キロありますかではなくて、何時間何分で行けますかという時代ですから、我が社でも今日、東京、大阪からぱっと集合するのが、1時間近くあるいはそれ以上に短縮できるということです。日帰りできると、今まで泊まらなければならないような状況と比べて大きなコストメリットがあります。空港までも1時間、我が社が使う名古屋港がまた1時間となります。

今日見たら製造業は私だけです。ものづくりの発想が違うものですから、少し申し上げますと、要は、何もない時代に私は新城の実家に戻らざるを得なかった。おもしろいことに、中小企業でナンバー1、あるいはオンリー1というのが結構あるのですが、なぜそうなったかと言うと恵まれてなかったからです。何もないからです。私の場合はプラスチック製造で、自分で考えて、自分でつくって、自分で売るという基本的な考えを持っている、皆さんそうだったのです。

金型をつくるにしても、金型屋さんがないのです。当時名古屋まで行かなければなりませんでしたが、名古屋ではいいものできないから東大阪とか東京の台東区とか、当時宅急便もないのですから自分の車で行くしかないという、そのようなことがありました。

そのようなことをやっている時代ではない、自分でつくってしまえと、金型も自分でつくる、もう成型機も今自分で改造してしま

いますけれども、デザインから始めて営業するというセールスをやってきました。

新城に瀧川オブラー、まさしくオンリー1です。製造機械を全部自分でつくってしまい、自分で売るのです。つくって売るという、こういう単純なビジネスが1番利益が出るわけです。

ただ、今、人の問題出ていましたけれども、新城は、本当に人手不足です。技術屋さんを採用するのが大変難しく、リクナビを使って、我が社は全国から募集していますけれども、今まで新城市なんて嫌だったけれども、高速道路ができたおかげで、優秀な人が割と募集に応じてくるようになりました。

ただ、オペレーターになるような一般の作業の方がなかなか大変でございます。これが1つの問題で、商工会が扱っています外国人研修生を受け入れてやらざるを得ません。一般労働者の人が足らないのです。ましてやこれからますますトヨタさんも目をつけていますし、新城市の企業団地がまだ空いています。さらにインターチェンジ周辺に造成も始めました。そうすると、いろいろ物流関係の仕事がどんどん来るであろうし、ますます人手不足になることは間違いないありません。商工会の研修生を使ってやっていますけれども、どうしても海外の労働者に頼らざるを得ない、こういう問題があります。

いずれにしましても、先ほど会議で、浜松の会頭さんが言っていましたが、コストダウン、大きなメリットを得ることは間違いないと思います。ましてや新城市の場合、アウトドアスポーツのメッカとして、新城市はアウトドアスポーツの何をやってもよろしいということで、最大のものは新城市ラリー全国大会、これをいすれば本宮山スカイラインを使ってやろう、トヨタの社長も大村知事も賛成しております。

ハンググライダー、川下り、岩登り、山岳マラソン、あらゆるアウトドアスポーツ、自

転車もあります。そのような、あらゆるアウトドアスポーツのメッカとして、新城市から奥三河を巻き込んで、自然を生かしたことをやっていこうとしています。これからいわゆる日帰りもできるコースになるであろうし、遠くの人から来て、なおかつ新城市奥三河に泊まってもらうというか、そういうことが可能なまちになってきたということで、大変期待をしているところでございます。

技の話になりませんけれども、紹介された軽トラ市では、2回目の全国大会を新城市でやりました。来年は磐田でやられるということで、いわゆる軽トラ市のメッカとして、新城市が有名になりましたけれども、さらにこれを広めて、軽トラ市より起業家を募集するのが1番いいのです。簡単に商売やりたいという人たちにとって、軽トラ1台ができるからです。僕は、最初にスズキの会長さんにスポンサーになってくれと話を行ったのです。軽トラって何だということを言っていましたけれども、ああこれはおもしろいといつていただきました。今ダイハツさんも会長、社長がみな来て、非常に夢中になりました。

これから、多分軽トラ市のノウハウが世界に広がるではないかと、そのような時代が来るのではないかと思っております。

どうもありがとうございました。

**コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト  
白坂常務取締役**

では、引き続きまして、天龍村柚餅子生産者組合の組合長の関京子様、お願ひいたします。

**天龍村柚餅子生産者組合　関組合長**

皆さんのすばらしいお話を聞いて何か私はまともな話ができず恥ずかしいなと思いながら聞いていただきます。

このサミットが始まるときからお世話になってまいりましたが、大きく変わったこと

は三遠南信自動車道が一部でもできたことで、ぐんと浜松が近くなりました。この三遠南信のエリアが南信州の私たちにとってどんなに大切な交流の場でありますか、過疎の進みは止まらず山間地に残っている人は65歳以上の人ばかりです。

観光の面ではこの南信州はおくれていますが、10年後にはリニア中央新幹線も通るようになり世界の窓口ともなれるわけですからしっかりとその受け皿づくりをしていく必要があると思います。

隠れ里に住んでいる私たちは神様に祈ることで生きてきましたので毎月のようにお祭りがあります。そのお祭りに食文化についてこのお祭りには神様にこれをお供えするというように旬の物をお供えし私たちもいただきます。それがおいしくて健康にも良いとされているものばかりです。

シカやイノシシは具合が悪くなったときには何を食べると治るかを知つて自然の中の薬草を食べているように、私たち人間にもそういう力を持っているのだと聞いています。医者にもかかりますが昔から人の知恵と技を利用するのも考えべきだと思います。

例として私たちが所属している南信州交流の輪の会員で88歳の片桐米雄さんというすごく元気な方が薬草の研究をされ、私たちにご指導もしてくださいます。近ごろ「命のしずく」と題して本を出されることになりました。資料集めのために日本を飛びまわりしてカラー写真も多く、1,000円で手にすることのできる本はありません。「私はお金のためではありません。この本が人様の役に立てることを願っているだけです」と言われました。私たちにとって宝物のような方であり宝物の本だと思います。

そこで私たちはこの三遠南信地域にも大きな宝物があることを誇りに思っている国的重要無形民俗文化財に指定された民俗芸能があること、この地域に集中してあり日本の中

心に何百年もの歴史とともに守ってきていること、今日の講演でも静岡県立大学の須田先生のお話しにもありましたように日本の重要な民俗芸能として守っていくべきではないかとのこと、本当にありがとうございました。

若者もいなくなり、消えそうになっている地域ですが、祭りをするエネルギーのあるところは大丈夫だと、祭りは地域の力だよといつてくださいました先生もいました。

現在、地域おこし協力隊の若いみなさん之力を頼りに、また県と広域連合の後継者づくり活動が始まり希望と勇気をいただき何とか失うことのないようにやっていきたいと思います。

南信州交流の輪でもお祭りと同時に食文化も継続していくことと健康上にもよい食生活を見直しながら祭りと食の融合したイベントを県の支援金を受けてやって参りました。

国道151号にある阿南町新野の祭り街道の会のご協力をいただき祭り街道弁道として祭りにちなんだ料理を作りました。去年11月14日には新野の道の駅にて飯田市美術博物館の桜井弘人先生にお願いして雪祭りの解説をしていただき幸いなことに地域の阿南高校に祭り同好会があり雪祭りの一部を実演してください映像と併せてみていただきました。

その後、長野市の横山タカ子先生のご指導をいただいて新しい年を祝う祭りと食のおもてなしとして祭り街道弁当「はるはる」御膳をお召し上がりいただきました。孟宗竹で器と箸、青竹で徳利と杯を、枝で箸置きを作り、竹の葉や木の葉を敷き柚子を湯釜に見立て、とても好評で材料も地域の産物、しっかりとした物語もあり本物の良さを味わっていただきました。お祭りの内容も学習でき、祭りの基本が太陽と月にあり自然の営みが人間と一体になって生かされていること、食にも1つ1つ深い意味があることなど納得できました。

まな板も包丁も使わない、ハサミがあれば

食べられるような日常生活では生きる力を身につけられないと思います。

時代とはいえた新しい物を求めるだけではなく昔の人の知恵と技も是非学習し体験してほしいと願っています。私たちの年齢の者には今、伝えるべき責任があると思います。

どうかこの三遠南信の地域にある民俗芸能と食文化を守る後継者づくりをして健康な文化の高い地域づくりを進めることができれば私たち、三遠南信住民ネットワーク協議会としてもお役に立てると思います。

来年度の三遠南信サミットは南信州でございますので祭り街道弁当をお出しできるように頑張りたいと思います。

どうぞ皆様よろしくお願ひいたします。ありがとうございました。

#### コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト 白坂常務取締役

ありがとうございます。

食文化を含めて、ものづくりをキーワードにした地域間の連携によって、新しい価値や産業、商品をつくりだしていくことが、個々の地域や抱える課題を解決することにつながって、さらには、三遠南信地域の雇用あるいは三遠南信地域への新しい人の流れをつくり出していくことにつながっていくことだと思います。

また、今後、これからさらに深刻になっていくと思われます人手不足、あるいは人口減少社会、こういったものを乗り切っていくためには、地域の産業はもちろんのこと、企業を支える人材の育成と確保を図っていかなければならぬということ、又、労働者の定住を促進するための地域の魅力づくりに、さらに力を注ぐ必要があり、大切であるというお話を伺いました。

それでは、最後になりますが、皆様の地域に存在する特色ある産業についてお聞かせください。さらに、ご紹介いただく産業、ある

いは取り組みを活用して、地域ブランドの育成、あるいは海外を含む販路の開拓をしていくに当たり、三遠南信地域全体として、何をなすべきかについて、お考えを聞かせてください。

それでは最初に、湖西市の市長、三上 元様、よろしくお願ひいたします。

#### 湖西市 三上市長

では、時間も迫っていると思いますので、手短に終わりたいと思います。

ふるさと創生というもののポイントは、やりたいことはいっぱいあるけれども、やはり何かに絞り込むことなのかなと思います。実は2年前に石破地方創生大臣とお会いして、一緒に討論したときから約2年間考え続けたのですが、我が湖西市にとって、まずは浜名湖なのです。東海道のど真ん中、浜名湖をしっかりと売り込むことなのではないのかなと思います。ふるさと納税の返礼品を出しているのですが、圧倒的に湖西市はウナギをほしいという声でございます。返礼品の8割がウナギです。去年4月から参入したのですが、いきなり6億円を超えるました。いかに浜名湖のウナギがすごいのか。一色の人に言いましたら、負けたと言っていました。1年前は一色がナンバー1だったのです。

2つ目は、江戸時代につくられた関所で、その建物がそのまま保存されているところは、浜名湖の関所、新居だけなのです。それでこれを、あと100年も200年も保存しようと決心し、なおかつつぶされたところは復元しようと、それに既に7,700万円を去年かけて、大御門をつくりました。301号という国道の上に元あったのです。そこで、ずらしてもいいかと文部省と相談したら、ずらしてもいいけれども、ずらしたら文部省は金出さないというのです。しょうがないからと、では国道をずらそうかと思ったら、国道をずらしてもいいけれども、全部湖西市で金出せというので

す。これは何億円もかかりまして、断念しました。そこで、国土交通省に話をして、歩道の上につくってもいいかという交渉をしたら、国土交通省は頭がやわらかいのですね、いいというのです。だから、今国道301号の歩道の上に大御門ができました。閉じると通れないから門は開けっ放しです。こういう名物のような場所ができましたので、ぜひごらんください。

3つ目は何かと、これはもう豊田佐吉以外にないと思いまして、豊田佐吉さんの考え方をきちんと伝承していくこうということで、ちょうど私が11年前に市長になった翌年、ハイブリッドバッテリーをつくっているE Vエナジーという会社がありますが、これが第2工場を大きくつくるということになりました。そうしたら、日本国中から、北海道から沖縄まで、うちへ来てくれというオファーが殺到したそうでございます。

最後、蒲郡と豊橋と浜松と争ったのです。そして我がまちになった理由は、迷ったら豊田佐吉の生まれたところと、このようになつたのだと聞きまして、豊田佐吉の威力はいまだに生きているのです。

ところが、あちこちで言いますと、豊田佐吉と豊田喜一郎、1代目と2代目が生まれた場所は、みんな名古屋か豊田市かと思っているのです。1代目と2代目、豊田佐吉と豊田喜一郎が生まれた場所は、湖西市だよということを、みんな知りません。3代目と4代目は名古屋で生まれているのです。3代目は章一郎さん、4代目は章男さん。これが名古屋で生まれているのですが、1代目と2代目は湖西市です。そして、そのすばらしい考え方を持ち、しかも不屈のエネルギーで発明に80以上特許を取りました。それは日英繊維摩擦で、英國から繊維が日本に移るということが第1次大戦の後に起きたわけでございます。第2次大戦の後は、日米繊維摩擦です。これは豊田佐吉と豊田喜一郎のおかげだと思っているわけで、これか

らは大いにこれを発信していきたいと思っております。

ありがとうございます。

#### コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト 白坂常務取締役

ありがとうございます。

では引き続きまして、磐田商工会議所の会頭であります、高木昭三様、お願ひいたします。

#### 磐田商工会議所 高木会頭

私からは、磐田市の産業振興フェアを中心にして、お話をさせていただきたいと思っております。

遠州は、いわゆるものづくりのまちであります。特に輸送関連が中心でありますけれども、ご存じのように、ものづくりの大手企業は、軸足は海外に行ってしまっているということでありまして、スズキさんも、3分の1は国内で生産していますけれども、との3分の2は海外ですし、ヤマハ発動機さんに至っては、オートバイ500万台以上つくっているわけですけれども、大半は海外であります、国内では11万台程度しか生産しておりません。そういう状況ですので我々の周辺の中小企業には受注量も少なく元気が有りません。有効求人倍率もやっと12月に1.03倍になりました。1倍を超したというのは、何年振りかの事です。

今はいかに中小企業の皆さんをより元気にしていくかということあります。私が会頭に就任して今年で3年になりますけれども、最初の年に大手企業の浜松ホトニクスさんのレーザー光線を使って、ベアリングの乗る部分だけにピンポイントで焼きを入れるということを共同で研究している話しを信用金庫の取引先から聞きまして、そこから大手企業と中小企業をいかに連携して新たなもの、いわゆる新分野新産業を磐田周辺から発信したいと考え、大手企業も出展した大規模な産業振

興フェアの開催を考えました。

スズキさん、ヤマハ発動機さん、浜松ホトニクスさんのトップの協力をいただきまして開催しております。

一昨年が103社でありましたけれども、昨年は150社になりました。そして、今年160社を計画しておりますけれども、大手企業は先ほど申し上げました、ヤマハ発動機さん、浜松ホトニクスさん、スズキさんを初めとして、NINさん、ブリヂストンさん、高砂香料工業さんあるいは天竜製鋸さんというような、大手企業の皆さんに出演していただいております。今年は更に河合楽器さん、ヤマハさん等の楽器関係企業も出展する予定です。

この様に、大手企業との連携をするための動きをとっております。更に今年はホトニクスを中心とした農業と光の連携を考えていきたいと考えております。

地元の磐田信用金庫のビジネスコンテストが開催されてから、今年で15年になりますけれども、今までに1,000件以上の応募があり、昨年は単年度で150件ありました。そういう中で、農業と光の問題、野菜へ光を当てることによって高栄養価の野菜をつくるビジネスモデルも出てまいりました。こういうことから、「農業と光」のテーマを進化させたいと考えております。

今進めているのが、産業振興フェアのその部分だけを別にしまして、大体50社ぐらいになるかと思いますけれども、ホトニクスを中心にして、農業関係の企業の皆さんに出演していただくということあります。これについては長野県の法人企業さんも出てきてくれておりますし、一般の企業の中には、駒ヶ根市の企業からも出てきていただいている。又、静岡県内、磐田、浜松だけではなくて、愛知県からも出ていただいて、そういう中で連携をしながら、進めていきたいと考えております。

特に今年力を入れているのは、農業の関係

でありますが、高齢者の農業従事者の為に農業ロボット、あるいは無人化、あるいは遠隔操作、こういう機械化を進めていきたいという動きをとっております。

先ほど、豊川商工会議所さんからスズキさんの話が出ましたけれども、私どもの磐田市でも、竜洋の工場が撤退します。竜洋工場は約36万坪の土地があります。ここに私どもが提案したのは、農業の多用化です。これは果実をつくることもありますし、オリーブだとか、野菜等をつくることまで含めて、同時に、スズキさんは、自動車関連企業でありますから、ロボットの問題、あるいは無人化をどうするかという問題、あるいは収穫している果実を置いたら、それが自動的に人が歩くたびに反応して、果実など採取したものがそのまま台車で動くというような事も計画しながら進めていきたいと考えて、現在進めております。

産業振興フェアは、今年も11月11日、12日の金曜日、土曜日と2日間開催します。昨年も同様に11月13日、14日と2日間開催しました。地域の各大学の学長さんからは、自分たちの行事とバッティングしないようにしたいので、早く開催日を教えてくれということがありました。それはなぜかというと、昨年は2日間で来客が5,300人ほどお見えになりましたけれども、土曜日には学生の皆さんのが800人ほどみえてくれました。そういう皆さんのが、ガイドブックの右の隅に、当日、学生と就職の面談ができるか、できないかということまで、載せてあるものですから、それを見て学生は、面談ができるところに、声をかけているのです。

1日で150社回れるということになると、大変大きな就職の活動になるわけあります、今年は静岡県からはインターンシップができるかどうかこれに載せてくれないかという話があり、そのような方向で今進めております。

各大学から、この産業振興フェアを見学したいとの要望があります。私どもとしても、地方創生の問題として、当然のことながら、その企業を知ってもらい、その企業に働いてもらい、そしてここに住んでもらうことが1番大事なことありますから、そういう動きをここでとらせてもらっているということあります。

同時にこれから進めていきたいものは、農業をいかに工業化していくかということです。農商工という言葉は使いますけれども、私は農工商という言葉を使っております。それは、農業はこれから、先ほど申し上げましたように、非常に高齢者が増えてくる、人口は減少してくる中で、農業は機械化をしていく必要があるだろうと思っておりまして、それができれば、ビニールハウスでも、人が入るほどの大きなものを作らなくても、機械が入るような小さくてもいいわけです。背が低いものでもいいわけでありますので、そういう動きを進めていきたいと考えて、現在進めております。

我々としては、ものづくりのまち、そしてそのものづくりを、中小企業の持っている技術力をより高めるために、農業問題、同時に新たな企業、新たな産業、新たなものへ進出するための動きをとっていきたいというのが、私どもの将来に向かっての考え方で、現在、磐田市と商工会議所、そして我々の周りも商工会もありますですから、商工会、この3者で、今進めているところであります。

#### コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト 白坂常務取締役

ありがとうございました。

それでは引き続きまして、田原市商工会の会長であります、河合利則様から、お願ひします。

#### 田原市商工会 河合会長

取り急ぎということで、ご存じの方も多いと思いますけれども、田原市は全国有数の農業生産高のまちということで、今日のテーマに1番近いという形でご配慮いただいたかと思います。農業出荷額で750億円、もちろんその中には、野菜、花、あと畜産というものもありますけれども、いずれにいたしましても、日本を代表する生産地ということで、知る人はよく知っておられるのですけれども、実際に私どもが調査を始めたところ、あまりにその生産の量も金額も多いということで、築地市場とかいろいろな市場の、市場に対しての価格競争力とかそういったものはあるのですけれども、実はそこから先の、実際の消費者の皆さん方が食べている野菜が、愛知産という感覚まではあるのですけれども、田原産という感覚が無く、なかなか田原産というブランド化が、昔は渥美産とあったような気がするのですけれども、だんだんその辺のところが薄くなってきたというところです。

この野菜王国、おいしい野菜がたくさんある田原のブランド化ということで、当時、6次産業化という流れがございまして、野菜を加工した全国展開できる商品というテーマで最初から全国展開を目指し、市場というよりも消費者に目を向けた商品開発ということで3年ほどかかりまして、ようやくベジフル田原という認定のできる商品が全国展開用には3点、地域で使える商品が7点ほどですけれども、先日、新聞等に出させていただきました。

私たちが思っていたよりも、消費者の評価が結構高くございまして、昨年と今年、2年続けて東京のビックサイトで行いました、グルメアンドダイニングショーのほうにも出展をさせていただきました。私たちが例えば幾らと思った値段と、実際の消費者の方の値段というのが、大体倍の評価をいただきました。

豊橋さんのように、まず全国展開の先の海外というところまではなかなか私どもには考

えられないのですけれども、このあと、市とも協力して、ブランドの認定をする組織ということで、商品化を高めていくという形に進んでいきます。

それともう1つは、花の都という、花も実は日本でも有数の産地ですけれども、その花の開発、ビジネスモデルのつくり方ということで、これは今並行して進めております。

まず第1段で野菜ができた、次には、花の都、渥美半島、田原、そうしたところを売り出していきたいということで、それが半島の田原市のブランド化と、それから、海に囲まれた観光の導入、人の流れというところにつながっていけば、花を生かした、野菜を生かした、そして6次産業の商品を生かした観光への導入ということで、背景が、おいしい野菜、きれいな花というそういうイメージで、観光につながればいいかなと思って事業を行っております。

**コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト  
白坂常務取締役**

ありがとうございます。

それでは引き続きまして、長野県の豊丘村の村長、下平喜隆様、お願ひいたします。

**豊丘村　下平村長**

長野県の豊丘村の下平と申します。

うちの村は、どちらかというと、伊那谷の中心の辺の飯田市のすぐ横くらいのところの平たいところにあるのですが、伊那谷と言いましても、特に、伊那市まで入れずに、飯田・下伊那というと、全部で16万人くらいの人が、香川県くらいの広さのところに住んでいるというそういう場所です。今日、ここへ来ましても、皆様大きなところで、いろいろ話すこともたくさんあっていいなということを感じるくらいであります。

しかしながら、伊那谷に何があるかというと、中央アルプスと南アルプス、それから河

岸段丘、その一面に広がる農地がおりなす日本の原風景です。そういうものは確かにあります。それ以外のものについては、全く今のところはほとんど微々たるものなのだろうなということをつくづく感じながら聞かせていただきました。

おかげさまで、リニア中央新幹線、それから三遠南信自動車道もいよいよ通るということで、飯田・下伊那地方というのは、東京から見ますと、公共交通機関で来ると4時間以上かかるということで、多分、日本中でも1番遠く、これ以上遠いところもあまりはないだろうなという地域であります。それが、11年後には、品川から45分、名古屋から27分という、ちょっと恐ろしいことになるわけです。三遠南信自動車道でも、もうすぐ浜松まで1時間ちょっとあれば行けるということになってしまいます。

そのような中で、僕たちはこれから何をやっていったらいいのかということで、先ほど、新城の会長さんも明るい話を聞いていたいでうれしかったのですけれども、僕らは元がほとんどないですから、落差がひどいので、非常にここのところを期待しながらやりたいということを広域連合としても考えておりまして、皆さんもご存じのとおり、航空宇宙産業クラスターだと、精密をまとめながら、今ちょうど国の補助金もあるので、クラウドの関係で、特化しながらやっていきたいという話もあります。

現実問題、今日も神山町のお話も聞いて、すばらしい話ですけれども、あそこで仕事のできる人は幾人もいません。世の中は普通の人ばかりなのです。ご存じのとおり特別偏差値の高い人でないとああいう仕事はできないであります。

そもそもの人口が必要だということで、実は一昨年の総務省の調査で、都市部の人口の中で、田舎へ行きたいかどうかという調査をしました。10代、20代の方々47%です、雇用

さえあって、便利さえあれば、東京から離れない、都市から離れたいという方はいっぱいいらっしゃいます。

実は、うちも関係があるのですけれども、世田谷区は、今、毎年6,000人から7,000人増えているそうです。隣の川崎市においては、1万人も増えている。この期に及んでまだどんどん若者が行っています。その若者たちは、やはり決して恵まれた生活をしているわけではなくて、東京だからそこそこの仕事もあり、ブラック企業もいろいろあるし、どのような仕事でも何とか努めながら、細々と暮らしているから、出生率が1.13ということですみたいに低いわけです。

そのようなことの中で、何としてもその人たちに田舎に来てもらわなければいけないという中で、今まではどうしても、例えば、都会の生活に適用できなくて、田舎で百姓すればいいやという人たちがたくさん田舎へ入れたのですけれども、そういう方々はやはりそれなりに問題があります。

中にはできのいい人もいるのですけれども、それで本当に農業を助けてもらって、遊休農地を助けてくれている方もいらっしゃいますけれども、あんな人がなんで来ちゃったのだろうなという、地元の山村から考えると、そういう地域に合わない方もいらっしゃったりして、その中で、そういう人はそういう人の気持ちでそれでいいのですけれども、普通に暮らして、普通に田舎で、何とか雇用があって、そこで家庭を持って、子どもをそこで育てて、うちが持てたら最高だよなという形を何とか三遠南信自動車道、それからリニアを生かしながら、飯田周辺につくり出していきたいということを非常に感じているわけです。

ですから、何がどうのということは、まだ具体的なものは出てこないですけれども、ぜひとも皆様、先進地で話をしながら、きちんと行政同士、それから商工会などでも話をし

ながら、今まででは都市部に、人に来てほしいときは、投網を打つみたいに、このような面談があるからみんな来たい人来てなんてやったのですけれども、やはり田舎で仕事をしたいという人たちのために、行政、企業、そういう人たちのきっちり組みながら、こちらにはこういう仕事があって、このくらいの給料だけれども、うちに幾らで住めて、何部屋くらいの家に住めるよということ、学校のサービスはどのようにということで、それをいかにこれからきちきちっとやっていくということが非常に大切ではないのかなと思っております。

それからもう1つだけすみません、TPPですけれども、今日はいい話ありがとうございました。豊丘村でも、今度TPPにマレーシアとベトナムが入っているということで、ベトナムは長野県を初め、我が豊丘村にも視察団を送り込んで、リンゴと干し柿がほしいということだそうで、もう避けては通れないです。うちのほうも、議員とか副村長なども、ベトナムへ行って、いろいろ話もしているのですけれども、ぜひ皆さんの経験の中でいろいろ教えていただきたいと思いますので、よろしくお願ひします。

また、飯田の農産物はここと違う時期にできるものがいっぱいありますので、先ほどの話の中でも、ぜひコラボできればありがたいなと思っておりますので、よろしくお願ひします。

**コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト  
白坂常務取締役**

ありがとうございます。

それでは最後になりますけれども、NPO法人森づくりフォーラム、副代表理事の原田敏之様、お願ひいたします。

## NPO法人森づくりフォーラム

### 原田副代表理事

三遠南信住民ネットワーク協議会という組織が4年前にできまして、その立場から発言をさせていただきます。

最後にさせていただいて、そのおかげで、大体ほかの皆さんのお話を全部一通り聞かせていただいわけですが、口が悪い言い方になってしましますけれども、ほとんどお国自慢を聞かせていただいたなと思っております。唯一、小池さんが三遠南信としてのブランドをどうつくるかというような問い合わせをしておられました。

実は、それはそれで1つの意味のあるところだろうと思うのですけれども、かねてから、我々住民団体としてどのようにこの分科会での、あるいはサミットでの提案をしていくのかということも、一部議論としてずっとあります。今年は、1つの試みとして、4つの分科会に対して、あらかじめ、住民ネットワーク協議会としてどのような提案をしていくのがいいのか、三遠南信というそのせっかくの枠組みに対して、どういう提案を出していくのかについて、実は議論を積んでまいりました。隣にいる関さんもそうとして、先ほどお話も出た、祭り街道弁当というのも、そういう議論を重ねてきてているわけであります。

私からは、議論の経過について若干もう少しご報告いたしますと、実は2回会合を持ちまして、12月12日に東栄へ、3つのエリアからみんな集まりまして、まずその4つの分科会についてのテーマをみんなで議論をいたしました。

ある程度の整理をつけた上で、実は今日の午前中の住民セッションでは、さらにみんなで議論するという形でもって、積み上げてきたという経緯がございます。その辺のところをぜひご了解いただきたいと思います。

私のほうに与えられた提案は、東日本大震災以来、いろいろなテーマが持ち上がってきているわけですけれども、そのうちの一一つと

して、地域エネルギー、さらにいうと、再生可能エネルギー、自然エネルギーという言い方もありますけれども、これを山間部でどう生かしていくかということが、全国的に大変熱がこもってきています。

その意味では、この三遠南信でも、中央部分を位置づけている中山間地域でもそれを扱っていくということに大変可能性があるのではないかと思います。特に、生産をし、そしてその場で消費することになるわけですから、そのことがまたこの地域の活性化につながっていくという事例が、今現在全国でいろいろなところに出てきております。そういうのを活用していく、生かしていくという可能性がきっとあるのではないかということから、いろいろと話し合いをしてまいったところであります。

2年ほど前に、里山資本主義という本が爆発的に売されました。藻谷浩介さんという人がまとめた本ですけれども、これは全国いろいろなところで、過疎地と言われて、人がどんどん出ていってしまうことに散々悩まされたところの人たちが、自分たちで少しずついろいろな知恵を働かせて始めてきているという事例で、ぼつぼついいものが、これは成功だといえるものが出てきはじめました。

それらをまとめた本だったわけですけれども、その意味では、この地域の中でも、その成功事例に似たような環境を持っているところも幾つかあるのではないかということが出てまいりました。

そのいろいろな地域、県でいろいろな取り組みをしているわけですけれども、特に、このごろ目立つところは、中国山地の小さな集落というようなところが大変脚光を浴びているということが出たりしておりますけれども、そこらで、大分進めてきた結果、成功していくためのポイントが幾つか出てきていることがあります。

そのポイントの1つは、活性化するために

は、お金を外に出さないということあります。したがって、再生可能エネルギーを例えれば太陽光だとか風力だとか、小水力だとか、あるいはバイオマスエネルギーだとか、そういうものを使って発電する。それをフィットの制度で、売電してそれで儲かればいいという発想ではなくて、作ったものは自分たちで使う、その地域で使うということにとことんこだわってきた人たちが、これはうまくいったと周りから言われるような事例が出てきているというところであります。したがって、再生可能エネルギーの地産地消ということが言われるようになってきました。

例えば、徳島県の佐那河内村というところがあります。ここは、村の規模で言うと、村の税収が1億2,000万円という所だそうであります、この村の人たちが、役場も含めて、支払っている電気料を全部計算してみたところ、実は電気代は税収より多くて8億円だったそうです。

この8億円を外に出さない、自分たちで作って、自分たちで処理します。使っていれば、それは出でていかないわけなので、入ってくるものもないかもしれないけれども、作るためには人がいる、要するに、雇用がそこで発生するというようなことからして、実は、その自分のところの中で回っているお金がいろいろなことに使えるようになってきて、それを地域のためにということに、いろいろな分野に使うという考え方で、その佐那河内村では、その8億円をどうして外に出さないようにするかという工夫がいろいろ組み合わされているそうです。そこでは、小水力と風力、太陽光の組み合わせを考えておられるそうであります。

もう1つのポイントがありますが、これはできるだけ小規模であると、大規模のものを考えるのではないということにポイントがあるのだそうです。これまで、規模は大きくすればコストは下がるというのが常識だつ

たわけでありますが、大きくしないというところに成功のポイントがあると聞いております。

規模としては、例えば、広くても合併前の旧町村単位程度ぐらいだと一般的には言われております。特に、バイオマスを使うとした場合は、これは電気エネルギーに変えるのにロスがありますので、熱エネルギーとして使うケースが成功に近いわけですが、そうすると、やはりさらに狭い範囲で考えていくことがポイントになりますので、あまり大規模なものは考えないというものをぜひいろいろと考えてみる必要があるのではないかでしょうか。その場合に、進め方としては、いろいろな形があります。事業としてやるわけで、組織が必要で、株式会社でも結構ですし、NPO 法人でやっている場合もあります。

それはいろいろな形態がありますけれども、その場合に、1つ進め方としてのポイントは、行政とその地元に住んでいる住民との連携プレイが、うまく行っていないと成功にはつながっていないようあります、行政がうまくサポートの側に回っているところが、やはりうまくいっている。

それともう1つは、その地域の狭い地域だけで動いていても、なかなかうまくいかない。これを、都市の企業、あるいは都市の住民がいろいろな協力する形の連携の形がよくできているところでないとよくないということにもなりますので、この三遠南信の地域の中で、そういう連携の態勢の事業ができるところを幾つかぜひ探していくことが、あるいはそのいろいろな地域の人たちが、自分たちがやる気になるぞというようなことにぜひなっていいただけるようなお手伝いすべきだと考えておりますので、そういうところを提案させていただきます。

その辺のところが、少しでも実行に移されていくということになれば、先ほど言いましたように、地元の雇用につながっていくとい

う話でございますので、よろしくお願ひします。

**コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト  
白坂常務取締役**

ありがとうございました。

お話を聞きしまして、三遠南信地域、各地域には、地域資源を生かした特色ある産業が存在しており、そうした地域産業の特徴を生かした地域ブランドの育成、あるいは販路開拓といった取り組みが行われていたり、あるいは予定されているということだと思います。

こうした活動を三遠南信地域全体で支援するための取り組み、特にそれを支える人材の育成、あるいは確保が求められているということも、よくわかりました。

それでは皆様から一通り御意見をいただきましたので、技分科会としての意見交換の取りまとめをさせていただきたいと思います。

まず、1番は、三遠南信地域創生を図るために、地域内に雇用を創出、地域へ新たな人の流れをつくることが求められるということです。

2番、雇用を創出し、新たな人の流れをつくるためには、個々の地域が有する特徴ある産業や歴史、文化、風土に根ざした魅力ある地域資源を活用して、三遠南信地域内での連携、例えばマッチング、あるいは産業集積などにより、新たな価値を加えた産業、商品、サービスに発展させていくことが有効であります。

3番、合わせて、これらの新産業、商品、サービスを創出するための人材の育成及びその確保が極めて重要であり、これは引き続き、三遠南信地域内の大学、行政、企業、市民団体が連携しながら、仕組みづくりを進めていくということです。

こういった方向で意見をまとめたいと思います。皆様のご協力により、円滑でかつ内

容の濃い意見交換を行うことができました。お礼を申し上げます。

以上をもちまして、技分科会を閉会いたしたいと思います。

## 7 「風土」分科会 要旨

*San-En-Nanshin Summit 2016 in Higashimikawa*

テーマ「広域連携による歴史・文化・自然資源などの地域資源の新たな価値創造」

コーディネーター	野外教育研究財団	理事長	羽場 瞳美
報告者	浜松市	文化振興担当部長	山下 文彦
コメントーター	静岡県立大学	名誉教授	須田 悅生
行政	浜松市	市長	鈴木 康友
行政	松川町	町長	深津 徹
行政	阿南町	町長	勝野 一成
行政	平谷村	村長	小池 正充
行政	壳木村	村長	清水 秀樹
経済	袋井商工会議所	会頭	豊田 富士雄
経済	飯田商工会議所	会頭	柴田 忠昭
住民	浜松市無形民俗保護団体連絡会事務局	次長	上嶋 裕志
住民	愛知大学総合郷土研究所	研究員	平川 雄一

(敬称略)

### ■はじめに

コーディネーター／野外教育研究財団

羽場理事長



皆様、こんにちは。すばらしい全体会のお三方の発表を受けまして、これから始めさせていただきます。

それでは、座って進行させていただきます。

本日は、浜松市の鈴木市長様をはじめ、ご

らんのパネリストの皆様をお迎えいたしまして、これから進めさせていただきます。

本日の進行でございますが、前年度のサミットにおける風土分科会の皆様の意見の取りまとめを受けまして、そこからスタートしてまいりたいと思います。

最初に、山下文彦浜松市文化振興担当部長様からご報告をいただきます。

その後に本日の分科会の各ご意見を伺いながら、取りまとめに向かって進めてまいりたいと思います。

この分科会が終わった後には報告会がございまして、皆様の意見集約をそこで発表させていただくということになります。

それでは、山下様、よろしくお願ひいたします。

## ■ 報告

### 浜松市 山下文化振興担当部長

改めまして、皆さん、こんにちは。浜松市市民部文化振興担当部長の山下と申します。

私は文化振興担当部長ということで、所管は文化政策、スポーツ、それから博物館、美術館、図書館を担当しております。もちろんこの文化財に関しても私の所管になりますけれども、まず私から民俗文化財の宝庫、三遠南信ということで、まずは浜松市の取り組みを中心に発表させていただきたいと思います。

三遠南信地域でございますけれども、無形民俗文化財の宝庫と呼ばれているところは皆さんご承知のとおりだと思います。

まず、日本の民俗学の黎明期から多くの研究者が注目し、この地域を訪れております。例えば、柳田国男でありますとか折口信夫、それから宮本常一らがこの地を訪れて取材し、全国に紹介しております。また近年では、また新たな注目が高まっているところでございます。

これは、浜松市地域をあらわしたものですけれども、浜松市は平成17年に大型合併をいたしましたが、それで指定文化財の件数が431件、点数でいいますと3,000点を超える全国でもトップクラスの文化財を抱える市となりました。

ここにありますように北区、浜名湖の北側ですけれども182件、それから天竜区、その右上ですけれども、132件、というように三遠南信地域の県境近くにその大半が集中しているところでございます。

浜松市では、この市全体の文化財の中心、旧引佐町の役場のところに来年度、地域遺産センターというものをオープンする予定でございます。

それでは、浜松市の主な民俗文化財をご紹介したいと思います。

遠江のひよんどりとおくない、西浦の田楽は国指定重要無形文化財でございます。三河

地域に多い、花の舞も浜松地域に継承されておりまして、静岡県の文化財に指定されているところでございます。写真は懐山のおくないと川合の花の舞でございます。

また、夏の盆行事も豊富に伝わっております。写真にあります水窪の念仏踊りは、静岡県指定無形民俗文化財でございます。

また、遠州大念仏は保存会が形成されておりまして、60組余を一括して浜松市の指定文化財としております。

また、江戸時代に起源を持つ農村歌舞伎も続いております。横尾歌舞伎でございますが、これは静岡県の指定となっております。

下段ですけれども、雄踏歌舞伎「万人講」と浦川歌舞伎につきましては、1度途絶えてしましましたけれども、その後、地域の皆さんの熱意で復興し、現在も継承されております。

こちらは東久留米木の万歳楽でございますけれども、これはひよんどりとおくないのうち一部の儀式が継承されているものでございます。

また、雄踏町にございます息神社の田歌祭は田遊びの神事を氏子が復興して引き継いでいるものでございます。

ここまで無形民俗文化財を紹介してきましたけれども、こうした祭礼に使用される道具のうち、仮面に着目してみたいと思います。

三遠南信の祭りでは、仮面が特徴的に用いられてきました。例えば翁の面は、現在の能につながる祖形に当たるのではないかという説が唱えられております。

三遠南信の仮面の集成には飯田市さんが多くの実績がございますけれども、浜松市内にも多くの仮面が伝わっております。

これは、浜松市出身の日本画家秋野不矩画伯でございますけれども、天竜の懐山にありますおくないの面に魅了されて、このようなスケッチを描かれたものでございます。

これは西浦田楽で使用されている面でございます。舞を継承する今のご当代は、この

面をつけると先祖と一緒に舞っているようだと感じられるそうですけれども、大変神聖なものでございます。

天竜区の神社に伝わっている面ですけれども、この面は残っているものの、祭礼そのものは現在に伝わっておりません。市内には、祭礼は伝わらずとも、これらの面や湯立の大釜などが残されている地区がございます。かつてはもっと多くの地域で祭礼が執り行われていたということがわかります。

本日ご臨席の皆さんも、この三遠南信地域に共通する祭りが広がっていることは既にご案内のとおりだと思います。

宮崎駿監督の「千と千尋の神隠し」の例にありますように、無形民俗文化財に対して世界の注目が今や集まっています。こうしたことから、県境を越えた連携に大きなチャンスが訪れていると言えるでしょう。

これから浜松市の取り組みをご紹介したいと思います。

浜松市内では、無形民俗文化財保存団体の皆さんがかつての市町村の境を超えて連携し、それぞれの事情や後継者育成などの展望を話し合う機会を設けております。これが指定の有無にかかわらず、市内の19団体が加盟し、自主的な活動を続けておられます。

三遠南信地域の無形民俗文化財に、関心が集まっております。これは昨年秋に行われたものでありますけれども、中世文学会というものの中では、国内で演じられたセリフの中に古い歌などが伝わっているということに注目しておりました。分野の違う研究者にも、重要な文化財という認識が広がっていると思います。

さて、浜松市では、来年度から新たな文化財保護認定制度を導入する予定でございます。

これは、従来の文化財保護制度とは別に、指定よりも制約の少ない制度として広く市の文化財を浜松地域遺産ということで認定し、周知を図っていきたいということで考えております。

これはイメージを書いたものですけれども、対象とする種別は有形・無形の民俗文化財も含めて、現在ある指定文化財の種別すべてとする予定です。

認定文化財につきましては、指定文化財の予備軍としての意味を持たせたいと考えております。

日本遺産の話をここでさせていただきたいと思います。

浜松市では、平成27年度から文化庁が新たに開始した日本遺産の認定に向けた取り組みを進めているところでございます。

日本遺産につきましては、単体の文化財ではなく、地域の中で共通するテーマの文化財をつないでストーリーをつくる、新たな見どころを模索、提案していくものでございます。これは、文化財の保護だけでなく、地域振興等の活用にも着目しようという制度でございます。

これは平成27年度に認定された日本遺産でありますけれども、文化庁は、平成32年の東京オリンピック、パラリンピックの年までに全国で100か所の認定を目指しております。

昨年4月には、18か所が認定を受けました。この中には静岡県、愛知県、長野県は入っておりません。

浜松市では、今月でありますけれども、次の認定に向けて岡崎市、静岡市と3市で連携いたしまして、家康公400年祭の枠組みを生かした日本遺産の申請を行ったところでございます。

この三遠南信地域でございますけれども、今まで無形民俗文化財の宝庫というお話しはしましたけれども、世界から注目される歴史遺産として日本遺産の認定の要件を十分に満たしていると言えます。来年度に向けては、三遠南信地域というさらに広域的な枠組みによる無形民俗文化財を日本遺産に申請すべく準備を進めていきたいと考えております。

SENAの分科会を中心にいたしまして、これまでも民俗文化財の活用を検討してきたとこ

ろではございますが、日本遺産に認定されれば、これをきっかけとしてこの地域のPRや活性化をさらに図ることができるものと思われます。このためにも、日本遺産の認定に向けてぜひ皆様方のご協力をよろしくお願いしたいと思います。

発表は以上です。ありがとうございました。



### ■意見交換

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

ありがとうございました。

それでは、議論に入ってまいりたいのですが、その前にちょっと前後いたしましたが、事務局より昨年度の議論の総括をしていただきまして、その上で議論に入ってまいりたいと思います。

それでは、鈴木様、よろしくお願ひいたします。

### 事務局

それでは、昨年度の議論のおさらい、取りまとめの結果と、本日意見交換いただきたいポイントについて事務局から説明いたします。

昨年度の分科会につきましては、特に地域の特産品や芸能文化などの地域資源の活用がいかにあるべきか、ということで活発なご議論をいただきました。

そのまとめとして3点の結論をいただいたところです。

1点目につきましては、意見交換で出されたアイデアや、それぞれが持つ地域資源を認識し合い、それを体系化し、持続的な観光客誘致に結びつけられるよう情報発信力を高めるというものでございます。

2点目の結論としまして、地域資源の活用に取り組む民間団体との連携を強化することでございます。

結論の3点目は、三遠南信地域の歴史や風土を整理し、それに結びつけたストーリーを持った広域観光の推進による交流人口をふやすというものでございます。

次に、本日のテーマですが、昨年度のサミットの後、地方創生の取り組み等が本格化しているところでございます。特にローカルアベノミクスの実現に向けて、地域経済の活性化と雇用の創出というものが重大テーマとなってございます。

こうした点を踏まえまして、今年度のサミット並びにこちら風土分科会につきましては、地域の多様な地域資源をどのように生かして、地域経済の活性化と雇用創出につなげていくかという点を中心にご議論いただければと思います。

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

ありがとうございました。

先ほどの山下様の浜松市の取り組み、大変うなづくというか、啓発されるところがございました。今日の須田先生のすばらしい発表と相まって、それから、今日の全体会の基調講演の中にはそれを具体的にプロセスとしてどのように住民運動等、それから公共がかかわっていくか、そのためにはどういった公的な措置がなされ、予算的な措置がなされていくかということでふんだんに散りばめられた全体会のお話し、そして今の山下様のお話しだったかと思います。

それでは、本年度のそうした前提を踏まえ

た上で、地域の雇用や活力につながっていくような形で議論を進めていって集約ができるようご協力をいただきながら、ご意見をちょうだいしたいと思います。

まず私からお三方にご意見を伺いたいと思います。

その後、オープンにしてさまざまご意見をちょうだいしながらテーマを移していくようにさせていただきたいと思います。

まず阿南町の勝野町長様にご意見をちょうだいしたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

#### 阿南町 勝野町長

阿南町の勝野でございます。

地域資源の可能性でございますが、私としては地域資源、新野の盆踊りに始まりまして雪祭り、そして和合の念仏踊り、そして早稲田の人形芝居といろいろな芸能が私どものまちには多くございまして、地域資源として非常に有効なものだということは感じているわけでありますが、やはり1番今の状態厳しいものは人口減少、過疎化、こういう中では伝統芸能の継承が非常に厳しい状況に陥っている。これをどう打開していくか。いろいろな手を尽くしては来ているわけですが、簡単な話ではありません。

そういう中では、高齢化も手伝い、後を引き継ぐものがなかなかいなくなってきた祭りもあって、非常に今、危惧しているのが現状でございます。

こうした厳しい状況の中、さらにこうした祭りを地域の観光だと、産業にどう結びつけていくのか、これもまた時期的にいろいろございまして、また日も短い中で、やはりどういう形に結びつけて広げていけるのか、これもまた頭の痛い話であります。

いずれにしましても、1番今危惧しているのは継承、この問題に直面しているのが実態でございます。

#### コーディネーター／野外教育研究財団

##### 羽場理事長

ありがとうございました。

平谷村の小池村長さん、お願ひいたします。

#### 平谷村 小池村長

ただいま紹介されました長野県平谷村の小池でございます。

平谷村は、今、先生の風土という講演のあったような伝統的な民俗芸能はほとんど皆無といっていいほどの村でございます。

そんな中で平谷村は、以前は林業、特に木炭・木材を主として生計を立てていたような村でございます。その中で生活様式の変更やらで、農業にも携わってきたわけでございますが、非常に標高が高い村でございます。農業だけでは1年生計を立てていけないということで、最近では観光事業を取り入れる中で、周りの遠州、三河、中京のほうからのお客さんを目当てに観光事業を多々始めたわけでございます。

そんな中で、地形を生かし、また高齢化で年寄りばかりの村の労働力を生かす中で高原野菜の栽培を普及しながら、生計を立てていく村として歩んで来たわけでございます。

その後には、国道の直轄化ということで、建設省で道の駅の計画の中に入れてくださいまして、今、道の駅を中心に高原野菜の販売、または料理等の体験をしてもらう中で、非常に人口の少ない村ではございますが、にぎわっているのが現状でございます。

現在の村の人口は480人ぐらいで、全国でも少ないほうから数えると5本の指に入るくらいの村でございますが、村自体は道の駅を中心、また観光事業中心ということで非常ににぎわっております。

スキー場もございますので、冬は今スキー場が非常ににぎわっていますが、今年は暖冬の影響で苦労はしていますけれども、スキーはできております。

そんなことで、平谷村は観光一辺倒で頑張っている村でございます。ありがとうございました。

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

ありがとうございました。

若干私事も含めて申し上げますと、実は私、温泉で有名な阿智村におりますが、平谷のモデルというのは本当にすばらしい成功を納められまして、私どもは逆に指を加えて呆然と眺めているというようなことでござります。

それでは、浜松市の無形民俗保護団体の連絡会の事務局次長上嶋様、民間の立場からご意見をちょうだいしたいと思います。

**無形民俗保護団体連絡会事務局 上嶋次長**

上嶋と申します。よろしくお願ひします。

無形民俗保護団体連絡会が市長の名のもとに立ち上りました。その以前には、先ほど皆様にもお配りした「ひよんどりとおくないの連絡協議会」立ち上げました。立ち上げたきっかけは活動が、いろいろな地域の無形民俗文化財でつながりを持ってポスターを含め浜松市全体にPRしていくと6団体で活動しています。

活動をもとに祀りに訪れた方がどのような舞をやっているのか分かるようにガイドブックも作っています。

皆さんも、いろいろな民俗芸能を見に行つたときに、この舞は何のためにやっているのだろうというのはほとんどわからなくて見ているのではないかと思います。実はそれを紐解いていくと、その舞にも意味深い物語があるということがわかってきますので、そういう見方も大切です。

そこで、浜松市では、私たちが初めにスタートした「ひよんどりとおくないの連絡協議会」から今度はワンステップ上がりまして、19団体の形でこの「無形民俗文化財の保護団

体連絡会」という形でスタートしまして、これも今、皆さんにお渡した年に2回広報紙を発行しております。

この広報紙は今、浜松市の中にこんなたくさんいろいろな芸能があるのだということを知ってもらうためにも、出しているのですが、これによってお互いの芸能を含め交流ができるようになりました。この芸能の保護団体連絡会はうまく機能しているのではないかと思います。

今回、提案なのですけれども、浜松市はこの19団体がどうにかまとまりました。南信州のほうも今、まとまっています。

前回も飯田市の美術博物館の桜井さんを中心に遠州に視察に来られ、さきほど阿南町の町長が言われたように継承の仕方を視察されました。私たちは、保護団体連絡会をつくって、こういうこともやっていますよと、お互いに継承も含めたことを見ていこうということでやっておりますので、それらを含めて、これからどんな形で継承をしていくか、いろいろな課題がありますが、時間が来ましたので、とりあえずここでマイクを置きます。

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

ありがとうございました。

だんだん方向性が見えてきたような気がいたします。阿南町では、すばらしい文化財を持っているのですが、継承が問題であるというお話と、それから今、上嶋様から、もう既に一手を打ちましたという話がありました。三遠南信も後継者難で本当に苦しんでおります。小中学生を巻き込んだ動きが今起きつつありますね。

もう少しこのことについて、地域資源の可能性についてご意見を伺いたいと思います。どちら様でも挙手の上お願いしたいと思います。市長、お願ひします。

## **浜松市 鈴木市長**

今、浜松では、無形民俗保護団体連絡会を作っていましたが、やはり12市町村が合併をして行政の境がなくなったというのが大きいと思います。

全体で後継者の育成などもやっていくべきだと思っています。自治体の文化財の保護は文化財課でいいですが、後継者の育成は教育委員会がやるということです。教育委員会を担当にして、学校との連携とか地域との連携を図るということです。

教育委員会が責任を持ってやるということになると、今度は自分のことになりますから、これはやらざるを得なくなります。小さな枠組みで後継者をどうしようかとなるとなかなか難しいので、できれば三遠南信として連絡協議会を広げていき、三遠南信の中で後継者の育成をどうしていくかということを考えていけば良いわけです。広い地域から継承者、子どもたちとか、そういう人たちを育成していくけばいいので、そういう意味で連携してやっていくということが大事だなと思っています。

## **コーディネーター／野外教育研究財団**

### **羽場理事長**

ありがとうございます。

鈴木市長さんから非常に力強いご意見を伺ったわけですが、ご存じのとおり社会教育部門も今ダイレクトに首長部局が大いに関与することができますので、これは可能性のあるところではないかと思うのですが、深津町長さん、いかがでしょうか。

## **松川町 深津町長**

松川町、私どものまちには全国的に知られるような文化を伝承する祭り等はないのですけれども、当然のことながら地域の中には多くの神社があって、春夏それぞれ保存会があって、お祭りが盛大に行われております。

それで1つの見方として、こうした文化伝統を守って伝承をしていくとともに、それが地域の活性化、地域の創生だという見方をしていきますと、私の近所にある神社がそうなのですけれども、私たちが子どものころはとても盛んで、それからずっと一時下火になりました。それで今の祭りは、今話題になっておりますように、子どもたちの育成会が協力し、子どもたちが春秋につくったサツマイモを焼き芋で神社の境内で売ったり、公民館、地域の公民館が一緒になって神社の祭りを盛り上げたり、神社のほうは、1月2日の初売りの日には、小獅子を出して商店街を練り歩いてお店を回るというような、いわゆる文化の伝承だけではなくて、地域を巻き込んだ中でやっていくことが、今度は私の立場からすると、地域の活力、地域の活性化につながっていって、そういういたぐらが違うことにも活躍をしだすことが大事かなと思います。ちょっと見方を変えると、そんな気がいたします。

## **コーディネーター／野外教育研究財団**

### **羽場理事長**

ありがとうございました。

須田先生のお話しの中に、政府が禁止令を出しても神様のためだということで、神様を抱き込み文化を守り、かつ、それによって地域が元気になっていくというお話がありました。まさにお2人の首長さんがおっしゃることは、そういうところを1つの縦割り行政で考えていくのではなくて横につながっていくことによって新たな局面を打ち出していけるのではないか。その中でSENAが果たす役割があるのではないかということを町長さんがおっしゃったのかなと思います。

柴田会頭様、今日は飯田市の行政の方がお出でになりませんが、飯田市ではどのような取り組みをなさっているのでしょうか。まさに民俗文化財の宝庫飯田市の後継者問題、お

練りも近いですし、それから花祭りも本当に後継者で悩んでおりますが、いかがでしょうか。

#### 飯田商工会議所 柴田会頭

飯田市の柴田です。よろしくお願ひします。

飯田市が人口減少、高齢化ということに対しているいろいろやっていることが、浜松市や豊橋市と特段違ったことをやっているとは思っていません。

ただ、大きな流れの中で、減ることについてはある程度受けとめて、飯田の地方には三遠南信自動車道、リニアという大きなプロジェクトがありますので、その大きなプロジェクトの完成をめがけて、その減少に歯止めを掛ける取り組みをしていかなくてはいけないと思っております。

先ほどの徳島の例が発表になりましたが、非常におもしろい取り組みだと感じました。飯田市にとってもヒントになるところがたくさんありましたので、市長にも提言ができるいいなと思って聞いておりました。

#### コーディネーター／野外教育研究財団

#### 羽場理事長

はい、ありがとうございました。まだまだこの問題について掘り下げたいところでございますが、先ほど浜松市長さんから、いわゆる連携について言及がございましたので、次はその連携に向けて入っていきたいと思います。

論点に地域間連携。これは浜松市長さんのサゼッションですと、地域にとどまらず、さまざまな横縦の連携も含んでいるのかなという感じがいたします。

それでは、まず売木村の清水村長さんからご意見をちょうだいしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

#### 売木村 清水村長

こんにちは。売木村の村長の清水と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

売木村に文化芸能という面でいいますと、やはり国道151号、また国道153号から少し、売木村はその街道沿いでないということがあって、伝統的な大きな祭りというのではないわけですが、その中で愛知県の隣であります豊根村のほうからお練り祭りをもとに売木村でも明治25年に太田稻荷神社の本殿の建立を契機に神主、笛方、神楽、五色旗、花とか太鼓とかそういうものを取り入れたお練り祭りというものを始めて今に至っております。

先ほども出ておりますように、非常に後継者が少なくなってきた中で、学校の授業としてそれを取り入れて、お練りの伝承をしているというようなことになってきております。

これも非常に小さな村で、そういう伝統文化を残していくということは非常に厳しいわけでありますけど、何とかそういう子どもたちにも連携というか、一緒に協力してもらって残していきたいなという思いであります。

売木村は山村留学という制度があって、ことして33年目になります。都会から子どもたちが来ているわけでありますが、その子どもたちにもお練りに参加していただくことをして、また、その中で都会から来た子どもたちにもそういう文化を伝承しておいて、いつかまた思い出してくださいて、売木へ来て踊っていただければありがたいなと思っております。

そんな中で、売木村は8月に盆踊りがありますけど、その盆踊りの8月15日に平成10年から交流している湖西市の手筒花火保存会の皆さんに来ていただいて、売木村で手筒花火をやってもらうことで、平成10年からありますので定着してきました、それを目当てに観光客の皆さんのが盆踊りに参加して、そして手筒花火を見て帰るというようなこともずっと

続いてきておりますので、それも大きな連携かなと思っております。

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

ありがとうございました。

それでは、続いでございますが、飯田商工会議所の柴田会頭さん、地域間連携に関連したお話しをお願いいたします。

**飯田商工会議所 柴田会頭**

まず、この分科会の始まるときに浜松市の山下文化振興担当部長さんからのお話しがありました。この画面を見ていると浜松市の北区で182という1番たくさん文化財がありました。その北の天竜区には132にあります。さらに地続き、で南信濃へと続いていくと、その文化財の宝庫が須田先生のお話で最後に地図の点がありましたけれども、これを見ると実は秋葉街道であるとか、いわゆる塩の道ですね。それから天竜川水系、これが実は伝統文化を育む素地になった地域一帯だと感じました。

そういうことの中で、我々が三遠南信、三遠南信と言い続けているわけですけれども、この地域が、行政区が違っても、250万経済圏域として同じ方向で頑張って進んでいこうと、今の流行り言葉で言うと地方創生なのですが、そういう言葉を含めていろいろなことを一体となって考えていこうというその考え方はある意味必然だったのかなという気がいたします。

そういうことの中で、午前中に行われました三遠南信の会議の中でお練りまつりの紹介をさせていただきました。これは来月の25日、26日、27日、3月に7年に1回行われます飯田地方の最大のお祭りです。このお祭りは諏訪大社から、上から下へおりてきた、お祭りでありまして、民俗芸能文化という是有る意味下から上がっていた文化のかなという思い

もしております。

そういうことの中で、この三遠南信の取り組みにつきましては、三遠南信「街道浪漫」クイズラリーというのを、3年ほど前にやりました。あれは、全国的にほかでもやっているところがあって、目新しいものではなかったというようなお話しも反省であったのですが、今日のいろいろなお話しを聞く中でこの伝統文化、伝統文化財を素材にもう1回、題名は同じでもいいから、全部内容を変えて地域の人たちだけじゃなくて、日本の人たちみんなにクイズを解く楽しい旅に出ていただいて、この地域の三遠南信の伝統文化、それから地域経済の発展につなげていっていただけたら非常におもしろいのではないかと思っております。

そういうことの中で、最近飯田線という電車の効用に対する再発見、再見直し、が言われるようになりました。

実はつい3日、4日前の中日新聞の下のほうに大きく「飯田線の秘境駅を8,000余円で1日旅しませんか」というような大きな広告が出ておりましたけれども、あれも三遠南信の道路とJRの鉄道とをつないで、さらにこの地域の発展につなげていただけたらいいのではないかと思いました。

**コーディネーター／野外教育研究財団**

**羽場理事長**

会場からも「そうだ」という声がかかっておりますが、おそらく皆さんもこのことはあれにつながる、こういうのがあるはずだということがきっとおありになろうかと思いますので、後ほど会場の皆さんにも後々少し聞かせていただきたいなと思っております。

愛知大学の平川先生、いかがでしょうか。

**愛知大学総合郷土研究所 平川研究員**

平川です。私は毎回ここに出させてもらうときに紹介させていただくのですが、住民団

体の1人として参加させていただいている。住民団体というのは、三遠南信住民ネットワーク協議会という協議会を2012年6月1日に立ち上げまして、現在4年目となります。そのメンバーの代表としてこの風土分科会では私と隣にいます上嶋さんが発言いたします。

実は、分科会に先立ちまして、午前中に住民セッションを開催しました。この中で4つの分科会に選ばれた8名がどんなことを発言するかについて、その内容を発表し、参加者のみなさんと討議してきました。その結果を踏まえて他の分科会でも発言しようということになっています。

昨年度から三遠南信住民ネットワーク協議会では、「祭り街道連携プロジェクト」を立ち上げまして、国道151号や153号、257号などの道沿いに点在する無形民俗文化財をはじめとする祭りに焦点をあて、それらを点で見るのではなくて、点と点をつないで面でとらえ、住民団体として情報発信やPRすることを積極的に行っていこうということになりました。

この取り組みは、数多くある後継者不足の問題で悩む保存団体ともかかわりを持って何とか伝統芸能の保存・伝承をお手伝いできなかといつたことも含まれています。

そういった中で2015年6月に、日本遺産の登録を三遠南信の伝統芸能で目指すという新聞記事が長野県、愛知県、それから静岡県の中日新聞に大きく取り上げられたのは記憶に新しいと思います。浜松市は10年前に広域市町村合併以降、伝統芸能が継承されている中山間地域の旧市町村と一体となって、市として伝承活動の支援等を行う音頭を取り始めたと考えています。

それから、先ほどの報告にも出ましたが、南信州では去年2015年7月1日に長野県下伊那地方事務所を中心とした「南信州民俗芸能継承推進協議会」が立ち上がりました。

あとは、東三河がどういう動きになるのか気になるところです。この辺については行政

だけではなくて経済界と住民団体が一体となって積極的に連携して取り組んでいくことができればと私は考えています。

### コーディネーター／野外教育研究財団 羽場理事長

はい、ありがとうございました。

最初に地域資源について、その可能性についてお話をいただきました。2つ目としては、地域間連携ということで、今お話をいただいているわけでございます。

そういう意味で、今日のメインの発表をいただいた浜松市ではそれを経済にどのように生かすかという視点も置いていただきながら、市長さんのお考え、それから実際の展開等についてお聞かせいただければと思いますが。

### 浜松市 鈴木市長

日本遺産の話になってしまいますが、三遠南信連携の中でこの無形民俗芸能がこれだけ集まったのはすごいと常々思っていました。4、5年前に、文化庁の文化審議会の委員を務めたことがあります、その時に地元の紹介ということでその話をしましたら、委員の先生が、せきを切ったように私の代わりに三遠南信の民俗芸能がいかにすばらしいかということを紹介していただき、三遠南信の連携の事業で活用しない手はないなとずっと思っていました。そこに日本遺産というまさにうってつけの制度ができたわけです。

これは、単体の地域ではダメで、地域間の連携があり、しかもそこにストーリーがなければいけないというのです。日本遺産の1つの要件になっていて、三遠南信の民俗芸能を世に売り出すものすごくいいチャンスだと思っていまして、行政に登録することによって、三遠南信全体がこの大事な伝統芸能というものの継承を一緒になって取り組んでいくということです。

今日、神山町のお話しがありましたが、こ

れを今度1つ材料として、例えば伝統芸能というのは今非常に注目されていますので、農家民泊をあわせて、観光客にどんどん来てもらいたいと思います。

農家民泊ということでいえば、南信州観光公社という全国にとどろいたプロ中のプロがいるわけです。そういう皆さんのお力を借りて、この伝統芸能と、例えば農家民泊をあわせて観光客誘致、そこから農家レストランができていったり、あるいは企業誘致、あるいは移住者を引っ張ってきたりする。神山町は最初芸術家の招請から始まってプラスにどんどん進化させていったわけです。我々このすばらしい民俗芸能という財産がありますから、これを使い、いろいろな観光振興、あるいは産業振興、あるいは定住人口、交流人口の拡大にいろいろ進化させていけるのではないかと思うか。神山町の話を聞きながらぜひSENAでやっていきたいと思っています。

#### **コーディネーター／野外教育研究財団 羽場理事長**

ありがとうございました。まだまだ時間があります。

会場の中に、後継者育成を他地区とも連携しておやりになっているところ、あるいは知っているよというような方がお出でになりましたら、手を挙げてご紹介いただけたらと思うのですが、いかがでしょう。

#### **傍聴者**

三社団子ですか。非常に歴史が残っています。毎年東京に呼ばれて、ひょっこり踊りとか、それをそのまま向こうに伝えに去年も行きました。

#### **コーディネーター／野外教育研究財団 羽場理事長**

ありがとうございました。すばらしい活動ですね。

#### **傍聴者**

あとは長野県の木島平の木島太鼓ですが、あれは浜松市のヤマハの社員さんが向こうへ帰って普及しました。また、木島村の副村長さんがうちのまちの手筒花火のグループのところへ来て、伝授してくれということで持って帰りたいということもありました。

#### **コーディネーター／野外教育研究財団 羽場理事長**

ありがとうございました。

この域内はもちろんですが、域を飛び越えて、よその地区も引きつけていくということが後継者育成からさらに消費を地域にもたらしてくれる、あるいは後継者育成のシステムを中でもつくっていくきっかけになっていくのではないかと感じるところでございます。

会場にお聞きしたいと思います。どうぞ。

#### **川名のひよんどり保存会 前島会長**

私、国指定の重要無形民俗文化財「川名のひよんどりの保存会」の会長の前島と申します。

先ほどから話が出ています浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会の会長もいたしております。

3年前に私どもも人材が不足しまして、その時に浜松山里いきいき応援隊という浜松市から派遣されて来た東京の女の子がお見えになりました、お祭りの前に「会長さん、私も参加させてくれ」というお話をいただきました。

実は、600年の歴史がございまして、その間女人禁制でやってまいりましたので、返事をしたはいいもののどうしようかなと考えました。練習が終わって、それでなあと思って眠れなかったものですから、薬師如来様、それは600年前に奉納されたのですが、そこまで夜の12時に行きまして、薬師様、女人禁制だということですが、私の顔を立ててどうで

しょうかとお祈りを申し上げました。2分、3分析っている間に、「その件については、いいんじゃないのか」というような薬師様のお言葉を聞いたような声がいたしまして、初めて600年の歴史を破って女性の方に奉納の舞をしました。そしたら、それが大変好評で、川名、私は川名というところですが、新聞にも取り上げていただきまして、それから女性なども見学に来ていただくということがございます。

来年からは若者も、小学生もほとんどいなくなりますので、これからそれを糧にして、地域の方、浜松市全体の方でもいいですが、どうかご協力をいただきたいと考えている次第でございます。ありがとうございます。

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

ありがとうございました。

600年の時空を超えてお許しのお告げをいただいたということで、まことにめでたいことかと思います。

ほかに何かそのような例とか、あるいはご意見等ございましたら、ぜひお声を聞かせていただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

**無形民俗保護団体連絡会事務局 上嶋次長**

継承していく中で、先ほどのなかなか難しい部分もありますけれども、今、民俗芸能のお祭りをやるときには内外から大勢の人が来ます。ところが、やっている住民は継承人不足という中でやっているというのが現状なのですけれども、外からのファンがいっぱいいます。写真を撮る人も大分おりますけれども、ただ、このお祭りが僕はすごく好きだという人が何人かやっぱりいるのです。

その中で、それだけ好きだったら、このお祭りの神事と芸能という部分があるけれども、神事は地元の人たちにやってもらって、芸能の部分はあなたがもし1週間こっちに来られ

れば教えてあげるよと言いました。その時に、農家で民泊をしてもらって、地元の人たちと夜中までしゃべり込んで舞を習い当日を迎える、というようなシステムをつくることによって、民泊ができるようなもの、それで地元の人たちと交流しながらつなげていくというやり方をしていけばいいと思っています。文化庁の継承事業などの予算があれば、民俗芸能の伝承事業ということで、日本中で、お祭りの中でこれだけは僕は大好きだという人たちを迎え入れるということも、いい手ではないかなと思っています。

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

市長さん、いかがですか。

**浜松市 鈴木市長**

遠くから来てもらう必要はないので、例えば浜松は12市町村が合併したわけです。それまでは行政という壁がありましたが、壁がなくなって、物理的な、心理的な距離感というのが同じ浜松市内ですからものすごく縮まっています。

そのエリアだけで見れば子どもたちが少なくなっているかもしれないけれども、浜松という枠で見れば、子どもたちはたくさんいますので、まちの子どもたちが中山間地域との交流をすることによって、伝統芸能の継承者になってしまってもいいのではないかと思っています。今、浜松の中のまちと中山間地域の交流事業というのを一生懸命やっています。そういう中から興味関心を持った子どもたちが継承者になってくれて、大事な伝統芸能を継承してもらえばいいと思うわけです。そういうことをやっていきたいです。

もちろん非常に遠くから来てもらってもいいのですが、まず近いところにいるのですから、三遠南信という枠組みで見た時、三遠南信の中でそういう同じようなことをやって

いけばいいのです。浜松のエリアだけだと大変だけれども、隣に豊橋市があり、豊橋市には子どもたちがたくさんいるから、子どもたちに継承してもらおうとか、いろいろなことが可能になってくると思います。そんなことができたらいいなと思っています。

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

次の話の地域間連携というところに絞りながら1つお尋ねしたいのですが、大変有名な例として、地域間連携として、飯田市と県境を奪い合うという大イベントを行っておりますが、これについてご紹介とお考えをお聞かせください。

**浜松市 鈴木市長**

浜松市と飯田市ですが、当時、水窪町と南信濃村、ちょうど県境を境にした2つの町と村の商工会の青年たちが取り組みをしようではないかと始まったものです。本当に1本のロープがつなぐべきなですが、いま全国的にも有名なイベントになっています。静岡県と長野県の県境、山の頂上付近で綱引きをして陣地の取り合いをやるという、それだけのイベントですが、大変に盛り上がっています。勝ったほうは1メートル陣地を浸食していく。浜松市が今3メートルぐらい負けています。去年、サントリーの地域文化賞の表彰も受けまして、今、地域と地域をつなぐいいイベントになっていると思います。

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

ありがとうございます。

今日は発表時間を皆さまお守りくださいましたので、まだ時間があります。もう少し この問題についてお聞きしたいと思うのですが、さらに意見、あるいは報告等ございませんでしょうか。

では、平川先生お願ひいたします。

**愛知大学綜合郷土研究所 平川研究員**

先ほどの祭りの他地域からの連携という話がありましたが、私の知っている範囲でご紹介させていただきますと、東栄町にある花祭りがそうです。この会場に東栄町の方が来ていらっしゃれば、その方から本当は説明していただいたほうがいいのですけれども、東栄町の御園花祭保存会の指導を受けて1993年から「東京花祭り」という名称で開催しています。場所は東京・東久留米市で毎年12月の第2土曜日に昼間から夜までの間で行われています。

東久留米市の小学生たち有志を中心に年に数回御園地区を訪れて講習を受け花祭りの伝承を目的に交流活動を20年以上やられており、地元では有名な話です。そういったことが1つの事例としてあるのではないかと思っております。

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

ありがとうございました。

パネリストの先生方地域連携について、どうでしょうか。この次は少しずつ経済的な問題まで含んでいきたいと思いますので、では豊田様。

**袋井商工会議所 豊田会頭**

静岡県の袋井からまいりました。三遠南信の二等辺三角形の右下の部分ですね。

私どもは連携ということを提案しにまいったわけでございます。

先ほど内容のご紹介ございましたけれども、歴史風土を掘り起こして交流に結びつけていくということで、三遠南信のもう1つの財産として花火文化の発祥地ということは間違いないことでございます。ご当地、ここですね。1588年、手筒花火、それが発祥だと言わ

れていたり、昨年、浜松市の家康くんがグランプリを取ったわけですが、徳川家康が駿府城で手筒花火をご高覧になったというのが始まりという2説あるのですが、どちらにしてもこの遠州は、歴史文化の中の文化として花火文化の発祥地であるということは確かなことで、家康がその鉄砲隊をずっと温存するために花火の取扱いは直轄で持たせていたという歴史です。

お手元にございます、この資料の3枚目に地図が載っておりますが、豊橋からずっと伊那谷を上がって、飯田のほうに向かっていきます。また私どもは東のほうでございますが、浜松を過ぎて、磐田を過ぎて、袋井ということです。

私ども、約100年の歴史がございまして、ご当地、豊橋も、これは何と市制25周年のときの花火大会のグランプリを私どものまちの花火屋さんが取ったという歴史があるのですけれども、最近では音楽も入れまして、約40万人の人人が集まって、毎年8月にやっております。

先ほどのセミナーで資料が、経済研究所が出まして、見てびっくりしましたけれども、管内の観光入込客数ナンバー1は何といつても浜松市1,750万人、第2位が豊川で750万人、豊川稲荷、第3番目が蒲郡、670万人で、第4位が我が袋井市で445万人ございます。これも威張っていいのか嘆いていいのかわからないのですが、445万人も来ているのに泊まる施設が足りなくて非常に困っております。

そういうことで、実は2003年、2巡目の国体を我がエコパでやったときに、全選手と役員全部を民泊で泊めました。これは歴史に残ることだと思いますけど、それが今ごろになって生きてきておりまして、今後の花火大会においても泊まるところを言ったような民泊を含めて検討しているところでございます。

連携ということに絡んで言いますと、ご提案でございますが、花火文化がずっと飯田の

ほうにもございますし、アルプス工業とか、それから三遠煙火さんとかございます。その花火師さんたちも優秀な方々が残っておられますので、簡単に言いますと仮称花火サミットみたいなものをご提案させていただきたいと思っております。

#### コーディネーター／野外教育研究財団 羽場理事長

待ってましたと申し上げたいところでございます。阿智村も合併いたした次第で、浜松市のような大きな合併ではなかったのですけれども、花火の技術を東海地方から江戸時代にちょうどいいたしまして、時をかけた長い連携をさせていただき、長野オリンピックのエンディングでかのパフォーマンスを世界に向けて発信させていただきました。

飯田、下伊那の交流人口はまことに残念ながら桁が1つ小さいわけでございますが、柴田会頭様、飯田、下伊那の観光、連携はいかがでしょうか。

#### 飯田商工会議所 柴田会頭

10日ぐらい前、袋井さんから私ども商工会議所に別件ですけれども、お尋ねいただきまして、お話をいたしました。

今、袋井の会頭さんのほうから花火を核につながりを持つような何か企画をというご提案がありました。これは、すばらしいことで、いただきました資料にもたまたまアルプス煙火工業と書いてありますけれども、これは飯田に2つ大きな花火屋さんがありますが、そのうちの1つであります、日本中に花火をつくるお仕事をされているのですけれども、そのメッカみたいな形で、この三遠南信、地域は一緒になって何かをする必然があったのだなという気がいたして聞いておりました。ぜひ進めていただきたいと思います。

## コーディネーター／野外教育研究財団

### 羽場理事長

ありがとうございました。

それでは、次の話題に移ってまいりたいと思います。

地域資源、これをお話しいただき、次に連携をどうしていこうかということでございました。だんだん話が煮詰まってきて、では具体的にどのようなことを地域と充実、あるいは経済に向けて、あるいは教育文化の活性に向けてやっていくべきかということが焦点化されてまいります。

まず、松川町の深津町長様、よろしくお願いします。

### 松川町 深津町長

私どもの松川町でございますけれども、ちょうど長野県の南信の飯田市と駒ヶ根市さんの中間にあたる位置にございます。

地域資源ということでは、私どものまちは、くだものの里として情報発信に取り組んでおります。昨年は、ちょうど果物栽培が始まってからちょうど百周年ということでございまして、1年を投じまして、さまざまな事業の取り組みをしてまいりました。

私どものまちは、サクランボから始まりまして、ブルーベリー、ブルーン、食用ホウズキ、モモ、ナシ、リンゴと年間を通じて、果物の里としてブランドイメージを発信しているところでございます。

また、直営の温泉施設がございまして、清流苑という温泉でございますけれども、一帯の森林地帯を非常に活用してスポーツ施設、温水プール、それから周辺の森林を活用して森林セラピー基地の認定も受けております。また、アウトドアスポーツということでフォレスタードベンチャーということで共有林を高い、地上から10メートル余りを渡り歩くような施設をつくりまして、着地型の観光を目指していきたいという大きな目標を持ってお

ります。

そのためにボランティアの地域案内人の皆さんのが今10名程度、3年目になりますけれども、地域案内人講座を設けて、その方たちが活動をしていていただきます。

また、支援隊員に協力隊の1名が旅行業者の免許をつい先日取りました。そうしますと地域発、地域型の着地型の観光を目指していくと考えております。

また、地域の皆さんのがワイン特区をぜひということで、リンゴのワイン、シードルをつくりまして、5件の農家の皆さんのがまとまりまして、南信州ワイン松川振興会というのを立ち上げ、ワイン特区を今申請いたしました。間もなく特区が取れる予定になっております。また、まちの新たな魅力として発信していくと思っております。

当然、リンゴ狩り、果物狩りは中京圏が多いわけでございまして、名古屋、それから静岡方面からも大勢の皆さんのがおいでになるという意味では、三遠南信自動車道等に大きく期待をするところでございます。

しかしながら、大きな観光ということでいきますと、やっぱり先ほどから出ます地域間連携をしていかなければ、所詮パイが小さいです。それで、いかにして連携をしていくかということが大事ではないかなと思っております。

それから、最後にもう1点だけ、皆さんの文化芸能、祭りということをお聞きしていて、そうしたものでお客さんを呼んで来るには、どうしても祭りというのは単発ではないかという気がしていました。1年間通してやっているわけではないので、どういうふうに連携をして、そして、その単発である文化芸能というのをどういうふうに普段の中でアピールしていくかという考え方をしていかないと、どうしても単発になってしまふのかな、連携という意味ではそんなことを感じました。

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

ありがとうございました。大変大事な視点をご指摘いただきました。

いくらすばらしいものが山のようになつても、いつ、どこに、どうあるのかと、どこへ行つたらいいのでしょうか、だれがコーディネートするのでしょうか。こういうことでございますね。その辺に向けて恐らく皆さんもお考えになっているかと思います。

袋井市の豊田会頭様、よろしくお願ひいたします。

**袋井市商工会議所 豊田会頭**

花火、先ほど触れさせていただきましたけれども、祭り全体としては、我が袋井市は東海道53次の真ん中、27番目なのですが、人口当たりの屋台の数が日本一なのです。人口8万7,000人のまちですけれども、屋台の数が日本一多いというのは、いかに、わいわいすることが好きだという民度ですね。

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

京都や博多よりも多いですか。

**袋井市商工会議所 豊田富士雄会頭**

多いです。それはある人が調べました。

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

おみそれいたしました。

**袋井市商工会議所 豊田会頭**

少し近接しているまちがあるみたいでしけれども、大体間違いないと思います。

それでですね、先ほどのセミナーも拝見していてふと思ったのですが、6,000億円かけて131億円ということでしたね。ハードで6,000億円で131億円のアウトプット。それに考えて

みますと、花火というのは実は今回、昨年の花火を浜松信用金庫のシンクタンクで経済効果を調査したところ、6億円ぐらいです。ただ、これは桁違いに数字が悪い。諏訪湖の花火とかは大体30億円ぐらいです。

花火というのは非常にお金が落ちるイベントだということを申し上げたくて言っているわけで、三遠南信自動車道が開通して、いろいろな観光客を呼んでくる、お金を落としてもらうというのですけど、花火というのは非常に経済効果が上がります。どっかとかいうとのんびりしている袋井のほうでして、諏訪の花火でも、長岡の花火が日本一ですかね、大曲もそうです。袋井と豊橋と飯田の花火の1シーズンの通し券をつくって、子どもさんたちもこっちの花火見たら信州へ行って木陰で涼んでですね、いろいろな文化の勉強をしながら花火を見て帰ってくるというようなことも、私どもにも旅行業の資格を取った社員がおりまして、せっかく市が着地型のことをやっているのでそれが連携すれば、お互いにやれるのではないかなと思っております。

ちょっとメリットのことを言い過ぎましたですけれども、花火というのはGDPを生むと考えておりますが、たまたまですが、今2年目に入りましたけど、日本商工会議所の無限大事業というものをして、全国27のうちの1つに指定されておりまして、今総予算3,000万円で経済効果を高めるような活動を袋井商工会議所はやっており、その一環としてこの三遠南信の花火を通した連携事業というようなものを加えてございます。よろしくお願ひいたします。

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

ありがとうございました。

今、日本は観光立国を掲げて、まさに2,000万人になろうとしています。爆買いという言葉も飛び交っていますが、中国の景気と株価

がちょっと下がっていて、心配な面もございますが、観光というのは、庶民の日常社会に直接お金が分配されてきますから、大変ありがたく思うところでございます。

立派な、すばらしい、世界に誇れる文化資産は持っています。ですが、その継承は苦しんでいる、それもいかに地域の文化を守りながら、型を崩さないで、誇りを持ちながらいかに地域の活性化に与えていくか、これは本当に考えどころではないかと思います。

さまざまな皆様のご意見を踏まえてですね、浜松市長には、さまざまな実例報告をしていただきましたが、そういうものを鳥瞰いたしまして、どういう方向に歩んでいったらいいのか、1つご意見を賜りたいと思います。

#### 浜松市 鈴木市長

今日の最後、産業としての観光のお話なども出ましたが、観光などが1番広域連携に適していると思うのです。やはり単体でやると限界がありますが、広域で連携していくにはもってこいの題材でありますし、そういう点でいけば、この地域はたくさんの地域資源があります。

伝統芸能のお祭りも1日じゃないかというのですが、三遠南信全体をとってみると、恐らく季節ごとにありますから、1年通してそうした発信ができるわけです。これはやっぱり連携の生きるところだと思うので、それぞれの資源をお互いに磨き上げるということも大事だと思います。

大河ドラマが来年女城主井伊直虎としてとり上げます。これは引佐の地域です。国侍で、井伊家というのは、もともと滋賀のほうが有名ですが、あれは家康公に取り立てられた井伊直政が活躍して、彦根35万石を授かつて行ったのであり、実は井伊家1,000年の歴史のうちの600年は引佐の地侍です。

井伊直虎という女城主は、崩壊しかけた井伊家を支えて、井伊直政を育て上げて、その

後の井伊家の隆盛を築いたという、まさに中興の祖であります。実はその時代背景というのが、なぜ井伊家が翻弄されたかというと、戦国時代まさに武田、徳川、今川が覇権争いをした地域でありまして、三遠南信全体が舞台になっていると言ってもいいと思います。

これは浜松が舞台ではなくて、実は三遠南信のいろいろなところがかかるわってくるということですので、ぜひこの機にこのドラマを皆さんご活用いただきたいなと思います。

以前にある寺の住職が来て、引佐、細江、三ヶ日あたりにはいいお寺がたくさんあるけれども、単体ではなかなか人を呼べないということで、何がありますかと聞いたら、方広寺、龍潭寺、摩訶耶寺、大福寺、宝林寺と五つあるということです。これは五山でもしろいということで、京都五山とか鎌倉五山というくくりがあるので、浜松五山では色気がないものですから、湖の北なので湖北五山という名前をつけまして、湖北五山を巡る旅ということで、最近は観光資源にしているのですけれども、実はこの湖北五山の1つの龍潭寺が直虎公の菩提寺なのです。今大変注目を浴びていて、龍潭寺だけではなくて、この機に湖北五山全体をPRしていき、大きく花開かせたいと思っています。おそらく皆さんの中にも直虎のドラマにあやかっているいろいろな地域資源というのがあると思いますので、この機会に大いにPRしていただきたいと思います。もしできれば、三遠南信全体でPRしていけば、さらなる効果があるのではないかと思っており、少し紹介させていただきました。

#### コーディネーター／野外教育研究財団 羽場理事長

ありがとうございました。

今日は皆様のお熱い議論をちょうだいしまして、まとめるのも大変なくらい充実した議論になってまいりました。

冒頭の基調講演が今日は3つございましたけれども、須田先生からはまさに火付け役を最初にやってくださったのかなと思います。私ども現場に立つ者がそれぞれの立場で意見交換をしてきたのですけれども、研究者としてコメントいただけたら大変嬉しく存じます。

先生、お願ひいたします。

#### コメンテーター／静岡県立大学 須田名誉教授

皆様のご発言を聞いて非常に私も参考になりました。いろいろ私も言いたいことはあるのですが、1つ、後継者の問題は私があちこち行って聞いています。どうしてもこれは食いとめることができないのではないかと私は非常に悲観的になっています。絶対これはなくなっちゃうなあというのは幾つかございます。中部地方も多いのですね。

その場合どうするかというと、何とか他地域の人々を呼び込むのも、もちろんいいのですが、私があちこちで言っているのは、アーカイブをつくっていただくということです。

それはもう、先ほど芸能をやるのは1日だけじゃないかという意見もございましたが、決してそんなことはございません。準備から何から入れれば1年間かかるのです。お酒をつくったり、お供え物をつくったり、祭りの装束をつくったりということがあって、1年間大変な準備をするのです。地域にある江戸時代からうけつぎ文書がありますから、それを洗いざらい出していただいて、それをデジタル文書として残しておく、DVDとして残しておくのです。あまり有名でないようなお祭りもたくさんございますが、そういう地域の村々の、まちもみんな含めてですね、市町村の教育委員会が中心になって音頭をとられてアーカイブズとして、例えば浜松でなくてもいいですが、この辺だったら豊橋ですね、豊橋の市立図書館へ行けばいいとか、愛知大学の郷土研究所へ行けば必ずほとんどの地域のお祭り、芸能がそこでDVDで見られるというよう

な状況をつくってもらいたいです。

今一部は花祭りのことが名古屋大学の方が中心になってつくっています。それによる天文年間、1500年代中頃からあったのだということの文書が出てくるのですね。それまでわからなかつたのです。そういうものを文書化して公開して、できれば活字化もしてということで残しておきたいのです。

そうすると何がいいかというと、一旦途切れたものでも、じゃあ再開しようか、再興しようかということができます。つまり、今の若者たちも、昔の人、おじいちゃんがやっていた舞を見ながら舞っているのですね。8ミリビデオを見ながら練習していました。それができるという可能性もございます。すべて洗いざらい全部残して、一部ハイライトは別バージョンで観光客に売り出して、ぜひそれを見てもらいたい。できれば、それ見て、おもしろそうと思っている人は、ぜひやりませんかと。1か月といわず、1年間一緒にいようと、山村留学ではありませんが、芸能留学してもらえば、よりいいのではないかと思うのです。

そういうすべての音楽芸能のアーカイブズ化ということは、非常に大事なことだと思います。それをお願いしておきたいと思います。

『世界遺産時代の村の踊り』という星野紘さんの本がございますが(雄山刊行、2007.9)、何の変哲もない村の踊りだったけれども、これが世界遺産になるのだということで目覚めてほしいという趣旨で書かれた本なのですが、今や日本の地方にこそ日本の真の姿があるといって、外国人観光客が見に来る文化のインバウンド化が今進んでいます。

地方へ行きますと、私も三河地方の田楽などをよく見ました。黒沢田楽ですか、5軒の家でやっているところです。その村の中学校の先生方もみんなやっています。そこへ例えば南山大学のドイツ人の留学生がやって来て一

緒に舞を舞うと、こういうのはおもしろいと言つては来て、来年はもっとほかの友達も連れて来るぞということを言つていました。地方の中に日本の真の姿を見ていこうということで、それでまたインターネット発信して、たくさん見に来て、ちょうど野沢温泉村のサルの温泉見物ではありませんが、たくさん来過ぎても困るかもしれませんけれども、できるだけ多くの人に見てもらって、興味持つてもらって、さらに発信してもらえば、そんなものはおもしろいのか、芸能がそんなにいいのかというように、村の人自身も再発見という効果を生むのではないかと私は常々思っています。

今日は皆さん、ありがとうございました。

**コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長**

ありがとうございました。

皆様のご協力をいただきまして、すばらしい熱い意見が交わされました。内容も豊かでしたし、また連携の力を必要だということを改めて言葉の端々から感じる皆さんのセッションでございました。

このあと全体会がございまして、ここでの意見をまとめていくことになりますので、若干私のつたないまとめ方で振り返ってみたいと思います。

まず最初に、浜松の今のすばらしい取り組み、特に合併したことによって、とても豊かな地域をつくることができたということ。それから、それを実現していくための幾つかの施策をご紹介いただきました。

それを出発点としまして、パネリストの皆様の現状をご報告いただいたり、ご意見を伺いました。名だたる無形民俗文化財は後継者で悩んでいるということを幾つかのご発表で再確認させていただいたわけです。

それで1つ明るい材料は、人口減少を逆手に取れと、あるいは後継者難を逆手に取れと、

こういうお考えが示されたのかなと思うわけでございます。

後継が厳しければ、地域間連携、そして合併したことのメリットによるさらにやや広めの連携、さらに三遠南信、SENAの範囲でそういったことに後継者の育成のための連絡を取り合って芸能留学などもどうだというようなご意見もございました。

そしてまた、そういったものがよいと識者やマニアックな方が知っているだけではもったいないのではないかということで、それを一同に鳥瞰できるようなものが必要なのではないかということでした。例えばカレンダーをつくるとかですね、ホームページで連絡を取り合うとかですね、何らかのことが必要なのかなというような内容を予感するご意見がございました。

須田先生からアーカイブスで記録保存をきちんとやっていきましょうということ、各自治体は博物館や映像や、あるいは研究報告書という形でしっかり撮っていてくださいますが、それをさらに観光につなげるような形でやっていくことがよろしいのではないかということでございました。

それからインバウンド、今の海外からのお客様も大事にしていったり、それから今、信濃はご存じのとおり真田丸で視聴率も何とか20%台近いところを維持いたしておりまして、おかげさまで好調に維持しておりますが、来年はこれが女城主直虎ということで引き続いてこの中部、東海地方に光が当たります。これを生かしていくということが絶対に必要であろうと、地域全体でこのことを大事にしていくことでございます。

フィルムコミッショングとかですね、そういったテレビ、ドラマ、小説、こういったものを誘致していくという運動を各地でやられておられるかと思いますが、これはインパクトがかなり強いわけでございまして、これを一生懸命取り組んでいくこと。特にまた SENA

のほうも指導力を發揮していただくということも大事なのではないかと思うところでございます。

いずれにしても、それは SENA を中心とした連携力、ここに培った皆様の歴史、そしてみんなで一緒にやろうという熱い気持ち、これが形になっていくと期待されるわけでございます。

当面の1つの課題として、日本遺産というご提案がございました。大変わかりやすい目標であろうかと思います。南アルプスの日本ジオパークや富士山のユネスコの世界文化遺産のほうは登録になりましたけれども、さらに数ある民族文化財を日本遺産、そしてやがては世界文化遺産を目指していくであろうと思うわけでございますが、まずは日本遺産を確実にものにしていくという目標が見えてきたのではないかと思うところでございます。

短い時間の中で皆様の貴重なご意見をまとめて切れないところはございますが、そんなことで報告をさせていただきたいと思います。浜松市長さん、パネリストの方々いかがでしょうか。

#### 愛知大学総合郷土研究所 平川研究員

申し訳ございません、1つ言い忘れておりました。今のまとめの中のジオパークの話が出たと思いますが、東三河でもジオパーク構想の動きがあります。現在準会員になりまして、「東三河ジオパーク」認定にむけた申請の準備が進められています。

#### コーディネーター／野外教育研究財団

#### 羽場理事長

すばらしい。

#### 愛知大学総合郷土研究所 平川研究員

これで順調にいけば、南アルプス（中央構造線エリア）ジオパークとつながります。あと残すは、遠州だけなのです。中央構造線が

通っていますので、遠州をなくしてはこのジオパーク構想も語れない地域であるわけです。

そういう意味で三遠南信全域を視野に入れたジオパーク構想を進めていくことも、日本遺産と同様に考えていただければと思います。ジオパーク構想は、自然環境の保全、歴史・文化の教育、観光、産業などと結びつけて活用することが可能でこれから三遠南信の地域づくり活動などに寄与すると思いますので、ぜひ取り組んでいただければと思います。

#### コーディネーター／野外教育研究財団

#### 羽場理事長

ありがとうございました。

報告会の発表の時間はごく限られておりますので、すべてを言い尽くせるかどうか、分かりませんがなるべく網羅できるようにしたいと思います。

はい。それでは本当にたない司会でご迷惑をおかけしましたけれども、パネリストの皆様のすばらしい発表、そして、それを会場の皆様に支えていただきまして、つつがなく会を進行させていただきました。皆様に感謝を申し上げまして、この風土分科会を閉じさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

## 8 「山・住」合同分科会 要旨

*San·En·Nanshin Summit 2016 in Higashimikawa*

テーマ「安心して住まうことの出来る持続可能な地域づくり」

コーディネーター	豊橋技術科学大学	副学長	大貝 彰
報告者	NPO 法人 てほへ	副理事長	大脇 聰
コメンテーター	NPO 法人 グリーンバレー	理事長	大南 信也
行政	飯田市	市長	牧野 光朗
行政	設楽町	町長	横山 光明
行政	東栄町	町長	村上 孝治
行政	豊根村	村長	伊藤 実
行政	阿智村	村長	熊谷 秀樹
行政	根羽村	村長	大久保 憲一
行政	泰阜村	村長	松島 貞治
行政	喬木村	村長	市瀬 直史
経済	掛川商工会議所	会頭	鈴木 俊光
住民	NPO 法人 てほへ	理事長	伊藤 静男
住民	和合むら	世話人	吉田 弓

(敬称略)

### ■はじめに

コーディネーター／豊橋技術科学大学  
大貝副学長



きます豊橋技術科学大学の大貝と申します。

私、この三遠南信サミット「山・住」合同分科会については、もう何人かの首長とは顔なじみになったかと思いますけれども、4、5年続けて、分科会のコーディネーターを務めさせていただいております。本日もまたよろしくお願ひしたいと思います。年1回、市町村長、そして、経済界のトップの方、民間、住民の団体の方が集まる、本当に貴重な会であります。この分科会では特に、「山・住」ということで、中山間地域での移住であるとか、定住であるとか、あるいは持続可能な地域づくりをどうしていくかということについて情報交換をしながら、また、その次のサミットまでの間、それぞれがいろいろな取り組みを

皆様、こんにちは。ご紹介いただきました、本日、コーディネーターを務めさせていただ

やっていくというようなサイクルであります。

本日は飯田市の牧野市長始め、参加者の皆様には、どうかよろしくご協力のほどをお願いいたします。

それでは、本日の進行について、まず、お話をしたいと思います。

最初に、前年度サミット議論のまとめ、それから、今回のテーマについて、事務局から説明をいたします。

次いで、NPO 法人てほへの大脇 聰副理事長様から、「奥三河・東栄町で育まれた26年の軌跡～地域を愛し、土地に根差す覚悟が未来を創造する～」についてご報告をいただきます。

その後、参加者の皆様と意見交換を行っていく予定にしておりますので、よろしくお願ひいたします。

それでは、早速ですけれども、事務局からまず、前年度の議論についての説明をお願いしたいと思います。よろしくお願ひします。

## 事務局

それでは、前年度の議論について、確認させていただきます。

前年度の「山・住」合同分科会でのまとめを3点としてまとめさせていただいております。

まず、1点目といたしまして、三遠南信自動車道あるいは新東名高速道路等の広域の道路基盤整備の効果を生かしながら、雇用創出、そして、定住促進を目的とした産業分野あるいは観光分野の政策を、これから、より一層連携しながら推進していくこと。

2点目といたしまして、自然景観、森林資源や祭り街道等の伝統芸能などが中山間地域の持つ魅力であり、こういった資源を地域内外に発信しながら域外から交流人口をふやしていく、そのための施策を検討していくこと。

3点目といたしまして、1点目、2点目を踏

まえまして、こういった施策を推進していくために、この圏域内の行政あるいは経済界など、さまざまな分野での市町村の枠を越えて、広域連携の強化をより一層推進していくこと。

以上3点となります。

今回のテーマでございますが、将来に向か、大きな人口減少が予測される中、この地域においても少子化対策が急務となっております。地方だからこそできる暮らし、働き方、子育てといった地域の環境や地域の連携を生かし、将来にわたって安心して暮らせるまちづくりを議論するため、「安心して住まうことのできる持続可能な地域づくり」を今回のテーマとして設定したところでございます。

それでは、大貝先生、よろしくお願ひいたします。

## コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

それでは、続いて、「奥三河・東栄町で育まれた26年の軌跡～地域を愛し、土地に根差す覚悟が未来を創造する～」という題で、NPO 法人てほへの副理事長であります大脇聰様よりご報告をいただきます。

では、よろしくお願ひします。

## ■ 報告

### NPO 法人てほへ 大脇副理事長

皆さん、こんにちは。

私、NPO 法人てほへの大脇聰と申します。今日は15分ほどの時間をいただいて、報告をさせていただきたいと思います。

私は、皆さん、よく御存じの方も多いと思いますが、和太鼓集団「志多ら」というところが本職であります。そのプロデューサーということで、4年前に東三河で行われたサミットから、ずっとサミットのほうにも参加させていただいております。ちょうどそのころから、現場の舞台をおりて、プロデューサー

業ということで、いろいろなところに顔を出させていただきました。

その中で、いろいろ「志多ら」の舞台のことを話すことはあるのですけれども、現場でどのような形で地域の中に溶け込んでやってきたのかとか、どのようなことが東栄町で起きているのかというところをお話しする機会は今までなくて、今回、こういう時間をいただきましたので、少し報告をさせていただきたいと思います。

まず、タイトルが「奥三河・東栄町で育まれた26年の軌跡」ということで、「志多ら」は、もう間もなく結成27年目に突入します。そういう4半世紀の団体となっていました。実際に「志多ら」が東栄町と出会ったころのお話を少しさせていただきます。

実は、北設楽郡の設楽からグループの名前をとったのではないです。もともとは愛知県の小牧市というところでプロの和太鼓集団「志多ら」ということで結成しました。これは、志多良神という芸能の神様がいて、そのご神体が太鼓であるというようなところから、「志多ら」という言葉を使って、志を持った者が多く集まるということで結成をしました。

最初、結成したときはこのような感じでやっていました。でも、このように人がいっぱい写っていますが、座員は3人で、あとは全部助っ人という、中身と見た目は全然違うという感じでスタートしました。

そのようなところで、東栄町の中央小学校で太鼓のクラブの先生を探しているという時に、うちの代表がフィギュアスケートの伊藤みどりさんの振りつけをするNHKの番組を町の方が見て、「志多ら」という名前にびんときたのか何かの縁で声がかかり、東栄町に拠点を移すことになりました。

まだバブルが弾けていない、ぎりぎりのころです。食べていかなければいけないので、熱海の大きなホテルで、1年間、住み込みで興業をしていました。稽古場として、今、住ん

でいるこの学校ですが、借りたはいいけれども、もぬけの殻でした。ホテルで、外国人の歌手が歌って、「志多ら」がたたいて、もう鉢巻きの間に札束を入れられるような、そのような時代の話です。

そのようなことをやっていたので、その興業の公演が終わったときに会社が倒産しました。これは、「志多ら」の前身の、最初に立ち上げた会社です。それが倒産したときに、メンバーの中で、もっとエンターテインメントの世界を極めていって、ラスベガスを目指したいというメンバーと、東栄町でしっかり根づいて活動していきたいというメンバーと大分裂をしました。

今の「志多ら」の原点になっているのが、このときに残ったメンバーと、私を含め、今の上の先輩人になっているメンバーです。半分分かれたチームも、今や九州のほうで、テレビに何回も出ている有名な太鼓チームになっています。

ですので、和太鼓業界の中で、目指した道は違いましたけれども、それぞれ活躍しているということになります。ここに少し写真がありますが、ど派手な公演をしていました。

今の「志多ら」の現状ですが、我々は「志多ら」を、有限会社にしました。これまででは、会社ではない組織でやっていたのですけれども、周りの方のお話の中で、将来ずっと残していく団体にしたいなら会社にしたほうがいいということで、有限会社にしました。舞台のメンバー、現役の演奏者は7名、研修生が1名、それから、舞台をおりた制作のスタッフ、プラス制作として「志多ら」に入ってきたメンバーが7名おります。地元の方にパートで2名入ってもらっています。NPO法人ではへというのは、「志多ら」のファンクラブがずっとあったのですけれども、それをNPO法人化しました。現在、そちらのNPOのほうでスタッフが3名、東栄町の協力隊員として一緒に活動しているメンバーが1名、今年から始めたカフ

エの営業でパート3名ということで、この24名でやっています。

全員がIターン・Uターン者ということでやっているのですけれども、私もIターンですが、東栄町民として22年目になるので、人生の半分以上は東栄町にいるということです。子供も2人おりまして、子供は東栄町生まれ、東栄町育ちということです。この1番上2名というのが私ですけれども、夫婦とも「志多ら」のメンバーで、子供も2人で、空き家を買って住んでいます。「志多ら」の代表とナンバー2の2人は女性ですけれども、地元の方と結婚して、子供が3人、1人となっています。このような家族構成の中でやっています。

「志多ら」は、最初は食べていけないので、一緒に1つ屋根の下で暮らしていましたが、それをすることが目的ではないので、若くて長いメンバーは、今、東栄町内の町営住宅などに住んでいます。最新情報で、メンバー同士でまた新たに、今年に入って結婚したメンバーもいます。そういうことで、どんどん、どんどん広がりを見せているということです。

東薗目という村に住んでいるのですけれども、花祭というお祭りが「志多ら」を東栄町に根づかせてくれました。我々が東栄町で、ここで本当に町のために自分たちの音楽を生かしていこうと思えたのは、やはり花祭というところが1番大きいキーワードです。1994年、花祭の舞の中で「志多ら舞」を奉納という形で演目をやらせていただきました。これも、最初は大反感を食いました。外からの応援の方とか、お祭りを研究されている方からは、「『志多ら』がこのように入していくことで祭りが変わってしまうぞ」と言われたりもしましたが、現在は、我々も祭りを変えるつもりでやっているのではなくて、村人としてお祭りに参加させてもらってやってきたということで、21年目の花祭を迎えてます。

舞台に上げる作品がどうしてもピックアップされますが、実は、裏方の準備から、太

鼓から、笛から、片づけから全部、私、1年目から舞もやりましたが、地元の舞も全て、村人としてやっていることがあるので、だんだん、それを知ってもらって理解をしてきてもらったかなと思います。

住民としての「志多ら」のメンバーの意識の変化と、「志多ら」メンバーに対する周りからの変化というのがあって、ここまで続いているなと思います。

我々の仕事は、芸能、アーチストとして舞台に立つののが仕事ですので、そういう文化の力で何とか町を元気にできないか、花祭を大切に、ずっと受け継いでいきたい、何人も2世がおりますので、子供たちのためにも、この町を残して、魅力あふれる町にしていきたい、そのようないろいろな思いの中で、ファンクラブをNPO法人にして、行政ともうまくタッグを組んでやっていける1歩を踏み出そうということで、6年前にNPO法人をつくりました。

そのような中で取り組んでいるものとして、ここに青字で書いてある3つの大きなものがあります。

まず1つ目は、情報をしっかりと発信しようということで、奥三河のき山放送局の大野というカメラマンを「志多ら」のメンバーが初めて、ばちを持ったことがないスタッフとして勧誘してきました。

たまたま会って、彼を口説いて、「志多ら」の寮で、寮生と一緒に暮らして映像を撮ってくれ、それを発信することを仕事してくれということで、「志多ら」のスタッフになってもらって、今、ユーチューブで番組をつくったり、ティーズで流させてもらったりしています。これは、「奥三河」とついていますので、奥三河の全ての市町村の番組を満遍なくつくっています。「最近は新城が多いぞ」と言われていますが、いろいろな町の情報を流させてもらっています。

それから、「のき山学校プロジェクト」と

いう廃校を利用した活動を始めました。いろいろな県の事業などを使わせてもらって、今年から、東栄町の指定管理ということで、「東栄町体験交流館のき山学校」という名前で運営しております。その中に図書室を持ってきており、「Café のつきい」という名前でカフェの営業も始めました。「木造校舎を利活用した体験交流の夢創造空間」ということで、太鼓のイベントはもちろんあるのですけれども、そこに付随して、森の中で音楽を奏でるとか、教室の中に、こういうようにわらを敷いて自然を感じるとか、あとは正月に正月遊び、日本人の四季のいろいろな文化を体験できる場所をつくろうということでやっています。

館内は、こういうチェンソーアートの作品も展示したり、祭り部屋、フリースペース、読み聞かせの会をやってもらったり、町内外の方に利用していただいています。

それから、自然体験・環境整備事業ということで、「蒼の森～ふるさと暮らし塾～」というのをやっています。これは、自分たちが音楽をつくって、日本中、世界中、公演に行くわけですけれども、自分たちの音楽は、暮らしの中や周りの人とのつき合いの中から、いろいろインスピレーションをもらって、それで曲をつくるものですから、そこが元気でないといい想像力が出てきません。地域が元気でないと、地域の自然がいい環境でないと、自分たちの音楽は絶対いいものにならないぞという思いがあるので、そういう中で、こういう環境整備事業などにも取り組んでいます。

そのような中で、「太鼓のよそ者が変化を生む」というような記事を書いていただいたりしました。それから彼女は、東栄町出身で外へ出ていたのですけれども、地元のものを使ったカフェをつくりたいということをお父さん、お母さんにお話しさせてもらって、帰ってこないかということで、今、Uターンで学校のカフェの中で、パティシエとしてケーキをつくっています。

今、東栄町の地域おこし協力隊との連携も進めています。1人は、この学校の運営と一緒にやることでやっているのですけれども、ほかの協力隊員とも一緒にになって、カフェで料理を提供するというようなことに取り組んでみたらとか、そのようなことでいろいろなことを進めています。

そのような取り組みは、またゆっくりホームページとかいろいろなもので見てもらえばわかるのですけれども、どう変化してきたかというのを、少しだけデータにしてみました。

「志多ら」が来る前の昭和62年、東栄町全体は世帯数が1,794、人口は5,915名で、東薗目は、世帯が43でした。人口が137名です。このときには、まだ「志多ら」は来ていません。平成7年から住民票を持ってきたメンバーが9名いますが、平成27年まで世帯数としては若干減なのですけれども、人口はどんどん減っています。これは、超過疎・高齢化の村ですので、寿命でお亡くなりになられる方も多数みえまして、その減少率に比べて、東薗目は、逆に、若者世代、我々が20代、30代のときに入ってきて、地域で結婚して子供が生まれてというようなので、特殊な状況になっているということになります。

今は、東薗目地区だけでも12名の「志多ら」、てほへのスタッフの住民票があります。そこにプラス子供が6名、村の中の23%が「志多ら」の関係者であります。これは、結婚した先のご主人とか、そのご両親とかは数に入れていないので、そこを入れると、もう少し増えると思います。

それから、ここは、村の中だけで増殖していった人口が、外へ住み出して、だんだん、だんだん出でていっているのと、町内に移住で来た方に一緒に働いてもらったりしているので、東薗目地区からスタートしたものが町内に膨れ上がって、人口の増加にも少しづつ、広がってくるのかなと思っています。そのようなところが東薗目で、細かく見ていく

と、まだもっといろいろなことがあるのかもしれません。

東薙目という花祭のお祭りは、私ども「志多ら」が来るまでは、東栄町の11か所の中で、1番最初に、もうやれなくなる村だと言われていたそうです。それが、今は、村の中に子供が1番住んでいる村になりました。全メンバーは、19歳から50代で構成されて、I ターン23名、U ターン1名ということで、2世も増えています。新年度から、また研修生が、これをつくったときはまだ決まっていませんでしたが、5名増えます。そのような形で、どんどん、今、増えています。

花祭というお祭りが、私たちが本当にここ の東栄町に住みついて、ここで生きていこうと決めた1番の大きなところです。祭が好きだということもありますし、祭をしている人が好きだということもあります。その環境が好きだこともあります。そのような村に、今、変わってきました。

「志多ら」の特質ということで少し書きました。今日、大南先生のお話の中でもありました、私たち、仕事を持つて、この東栄町に移り住みました。最初のスタートが、地域おこしをしようということではなくて、26年前の話なので、自分たちがプロとして太鼓で生きていこうという思いだけで、親の反対を押し切って、給料もないような生活からスタートしたのが「志多ら」です。そこから来て、移り住んで、覚悟を持って住みつきました。そして、いろいろな方と出会って、ここの大三河・東栄町で暮らしていくという想いになつたということです。

田舎に定住していく中で、我々もすごく思っているのは、やはり地域愛とか、あとは、そこで生きていく覚悟とか、自分の仕事をやり抜いていく覚悟みたいなもの、それから、地域に対するプライドやいろいろなもの、そういうものがないといけません。ただ、その地域へ行けば仕事になって、お金がもうか

るからだと、お金がもうからなくなったら、では、もう少し違うところに行って暮らすとなってしまうのかなと思うので、本当に大事なのは、やはり、その地域愛みたいなものの、それが自然に対しても、人に対しても、仕事に対してもいろいろなものがあると思いますが、そのようなものかなと思っています。

ですので、何もない田舎、不便だとかいろいろ言われますけれども、そこには本当にいろいろな人がいて、そういう人それぞれがいろいろな求心力になって、人の魅力と地域の魅力がくついたときに、本当に人を引きつけられるような、磁石になるような力が出てくるのかなと思っています。

我々も今まで、外から入ってきた者が中心にやっていましたが、今度、実は、私の長男がU ターンで戻ってきて、「志多ら」の跡継ぎになるということです。帰ってくるということが今度の研修生から生まれるときになりました。そういう形で、東栄町で生まれた子たちは、花祭をやって暮らしていきたいと思っている子がいっぱいいると聞いています。そういう地元生まれの子たちに本当の地域の魅力や、地域で何が困っていて、何が仕事になって、何のチャンスがあるのだぞということをしっかりと、小学校、中学校の間に根づかせていかないといけません。高校がない町になってしまっているので、1回外には絶対出しまいますが、いずれは戻ってきてもらいたいです。戻ってきた人のほうが、愛着心や地域愛はやはり強いかなと思います。

我々のような変わり者のように、I ターンでやってきて、自分の生まれたところでもないところに、いろいろな思いで根づく人ももちろんいますので、そういう両方から、これから我々にできるバックアップをしていきたいと思います。東栄町の東薙目では、このようなことが起き始めています。我々もNPOを立ち上げたときに、東栄町だけが元気になるだけではない、「志多ら」だけが元気になるだ

けではないという思いでスタートさせました。ですので、最初は、奥三河という名前を使っていましたが、この三遠南信地域の会にいろいろ出させてもらったり、皆さんにご縁をいたたく中で、やはりこの地域、県を越えたこの地域が元気になっていくことがすごく大事なことで、そういう連携というものを作今後も視野に入れながら活動していきたいと思っています。

26年の活動の中で、そのようなところまで来ています。そのようなところで、今日の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。



#### ■意見交換

コーディネーター／豊橋技術科学大学  
大貝副学長

ありがとうございました。

今の大脇様の話の内容について、もしご質問があれば、受けたいと思いますが、いかがでしょうか。

これは勝手な私の感想ですが、今日の一連の基調講演からの流れを踏まえると、どうも今回のサミットのキーワードは、文化とか芸術、芸能がキーワードになっているかなと思っております。

それでは、ここからは、意見交換に移ってまいりたいと思います。

まず、最初に、それぞれの地域だからこそできる働き方、あるいは子育てなど、そのラ

イフスタイルについて、あるいは、安心して暮らせるまちづくりを実現したり、移住・定住を促進したり、それにつなげるための地域課題にはどういう課題があるのか、さらに、今後の取り組みについて、どのような考え方をお持ちなのかという点についてお聞かせください。順番に指名させていただきますのでよろしくお願ひいたします。

それでは、トップバッターとして、飯田市の牧野市長からお願ひしたいと思います。よろしくお願ひします。

#### 飯田市 牧野市長

皆さん、こんにちは。飯田市長の牧野でございます。

本日は、この三遠南信サミット2016in東三河の「山・住」の合同分科会に参加をさせていただきまして、てほへの大脇プロデューサーからもお話を聞かせていただきまして、ありがとうございます。

中山間地域に、こうした形でIターンの皆さん方が定住していくというのは、本当に大変なことだったと思うのですが、これだけの長い時間をかけて東栄町に定住され、そしてまた、若い子供たちがこれだけ育ってきているというのは、本当にすばらしいことだと、改めて敬意を表させていただくところでございます。

飯田市におきましても、85%くらいが中山間地という地域ですが、特に、天竜川の左岸に当たります、竜東、あるいは遠山郷といった中山間地域におきましては、今、お話をありましたように、持続可能な地域づくりをどのように進めていくかは大きな課題と思っています。

飯田市は合併して大きくなってきた市でありますけれども、旧町村の範囲というものは、自治会単位で残してきた地域であります。今ですと、まちづくり委員会という言い方をしておりますが、そうした町や村のころのコ

ミニティをそのまま残す形で地域をつくっておりまます。従いまして、今、飯田市は20地区から構成されておりますが、それぞれの地区というのは、昔の町や村の形態そのものということになります。

そうした中で、この中山間地域におきましては、20地区共通の政策ではなかなか難しいものがあるため、中山間地には中山間地用の政策をしっかりと入れていこうという考え方をとらせていただきまして、中山間地域の地区を指定して、その地区に対しては、他の地区とは違う政策を採り入れていくというやり方をしております。

つまり、中山間地域振興計画を飯田市としてつくりまして、その計画に基づいた形で政策を行っているところです。特に、この政策の目玉になっておりますのが、地域振興住宅として、これは、それまでの市営住宅の考え方とは一線を画しております。中山間地域における若い子育て世代の定住を狙い、その地域に住んでいただける、こうした子育て世代の皆様方のための振興住宅をつくっていこうと考えたものです。

これは、若い子育て世代の皆さん方といろいろと話し合いをしていく中で、実は、市営住宅に入る条件は満たさないけれど、何とかこの地域に住めないだろうかという若い皆さん方の声に応えて、つくらせていただいたものであります。既に、こうした実績は大分出てきており、まだ順番待ちをしているという方もいらっしゃいます。各地区において、まちづくり委員会が中心になり、どういった住宅にして、どういった人に住んでもらうかということを考えてもらうという、言ってみれば、かなり各地区の自主性を踏まえた形で行っている取り組みです。

そういう取り組みを進めることで、この人口減少、少子化・高齢化の波を何とか乗り切っていけないかと考えるわけですが、各地区の人口の動態を見ますと、やはり、ま

だまだ厳しい状況にあると言えます。

そこで地域外のお力もお借りしようと、大学連携も一緒に進めております。こうした中山間地域に大学の皆様方に入っていただき、その地区と大学との連携を進める中で、課題解決に向けた方策を考えているものもございます。

遠山郷であれば東京農工大学、あるいは千代地区であれば和歌山大学といった、それぞれの地域にとりましてパートナーになるような、そのような大学との連携も踏まえた形で取り組みを進めております。

こうした取り組みを進めているうちに、私も話し合いにも参加させていただいていますが、若い皆様方が、この地域にとってはどのように課題解決に取り組むことが望ましいか、ということに非常に关心を持って取り組んでもらえるようになってきました。

「志多ら」の皆様方も非常に若い方が、この地域の課題について考えてもらえるようになったというのと同じように、今、中山間地においては、若い方々が地域活性化の取り組みを強めてきているというのは、私にとっては大変心強く思うところであります。

今日のこの「山・住」の合同分科会におきましては、こうした中山間地域におけるこれから定住促進に向けて、いろいろな意見交換ができれば良いと思っております。

### コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

幾つか、地域振興住宅の話であるとか、大学の学生が中山間地域の中に入っています、いろいろな取り組みをやられているというお話をしました。

それでは、続いて、豊根村の伊藤村長から、お話をお願ひいたします。

## 豊根村 伊藤村長

こんにちは。豊根村長の伊藤でございます。

今日は、「山・住」の合同分科会に参加させていただいたのですけれども、去年まで、私、主に「道」分科会のほうに出ていたような気がしております。

若干、私のほうで現在の状況を報告させていただきたいと思っております。

ご案内のように、私どもは、愛知県でいうと1番東北端に当たるわけなのですけれども、この三遠南信地域に来られると、どうしても言っておきたいというのは、北が長野県に接しておりまして、東が天竜川を境にして静岡県と接しているのは豊根村だけと思っておりますけれども、そのような地域にございます。

そして、地理的には愛知県から言うと1番奥なのですけれども、新しく三遠南信自動車道が開通したことによって、浜松市内まで1時間半くらいですので、東京に出るときには、ほとんど浜松駅から新幹線に乗って出させていただきます。また、それで、飯田市までも1時間圏域ですので、これで2027年のリニア新幹線ができると、またまた次がよくなる、そのような地域でございまして、今からそのことを意識した地域づくりに、今、取り組んでいるところでございます。

そして、私どもは、今、本当に高齢化が進んでいるのですけれども、その高齢化を支えるのは誰かといったら、少ない若い人なのです。その人たちをしっかりと支援して高齢化を乗り切っていこうと思っております。

もう1つは、今、私ども、60万人の観光客を100万人にしようというプロジェクトが動いております。そういったことで、観光と交流で地域づくりをしっかりと支えていきます。

さらに、私ども行政区が5つあるのですけれども、それぞれの地域が頑張っていただいて、「それぞれの地域が元気にならないと、いや、豊根村は元気にならないよ」と、そのような思いで、今、3つの柱で村づくりをやって

いたところに、ちょうど地方創生という新しい流れになったわけでございます。

そのような中で、私どもが今思っていること、やっていきたいということが地方創生にそのままはまったかなと感じ、即、積極的に取り入れたということで、去年の8月に公表させていただいて、それに向けて動き出しております。

具体的には、人口構成は非常に難しいのですけれども、しっかり見たとき、人口が増える要素はどこにもないのです。ですので、どうしようかということを真剣に住民の方々と話し合う中で、私ども、1,200人しかいない村なのですけれども、何とか900人でとめていこうということで、今、900人を目標にしております。

それはどういうことかというと、今、私どもの地域、高齢化率46%なのですけれども、毎年3家族くらいずつ、長男、次男対策で帰ってきていただく、Iターン、Uターンを含めて、3家族ずつ入ってきていただく、これを繰り返していくと900人でとまるということで、900人を設定させていただいたのですけれども、それを裏返して分析しますと、高齢化率が25%まで下がるということと、生産年齢層は、現在、1,200人から1,300人のときの生産年齢層が維持できるということ、もう1つは、小規模な村ですので、どうしても子供が少なくなるのですけれども、子供の数を一定数にしていきたいということで、複式学級も解消できること、このようなことも含めながら、今、取り組んでいるところでございます。

いろいろなことをやってきたのですけれども、大事なことは、地域に人が入ってきてくれて、どれだけ地域が元気になるかということです。私どもは、今、医療連携の取組として、村の中に診療所を1つ持っているのですけれども、住民を見ておりますと、静岡県の浜松医大の辺までも医療圏域に入っていますし、長野県の飯田病院、それから、阿南病院

も医療圏域に入っています。そして、愛知県もとすると、新城市、豊川市まで医療圏域に入っていまして、私どもは県境を越えてでも住民が行き来している地域ですので、静岡県の一部、それから、長野県の一部に通うことについて、通院費の4分の3の補助金を出させていただいて、どこの病院に行っても生活できる地域づくりをさせていただいているところでございます。そして、そういうことができることによって、ここでも住める地域づくりをしっかりと確立していかなければならぬと思っております。

最後に、先ほど言ったような地域にありますので、茶臼山高原を何とか100万人にしていくという1つの方法として、去年10月に、「三遠南信地域の食の祭典」というのを計画させていただきました。これは、各三遠南信地域、静岡県、それから長野県、三河地域の各市町村に声をかけさせていただきまして、この圏域、35あるそうでございますけれども、19の市町村から、我が町、我が村の自慢を持ち寄っていただいて、32店舗の出店をいただきました。当日は1万2,000人ほど来ていただき、にぎわったのですけれども、これをどんどん続けて、地域の圏域をPRする場所にしながら、地域の交流を図り、元気を出していきたいなという思いをいたしているところでございます。

住環境の件ですけれども、私どもは、村営住宅も100戸ほど持っているのですが、どうしても腰かけになってしまふということで、3年前から、譲渡型の定住促進住宅を建てさせていただいております。これは、簡単に言いますと、「30年住むと土地も家もあなたにあげてしまうよ」という取り組みでございまして、当面、5戸建てさせていただいて、大体それがいっぱいになって、今年も新たに2つつくっています。3LDKの2階建てですけれども、木造でつくらせていただき、家賃は月3万円、中学生以下の子がいると1人3,000円引きます。1番多

くて、5人子供がいる家庭もありまして、月1万5,000円で入っていると、そのようなこともあります。住環境全て整えて、私どもは通える地域をつくっていこうと、また、それで生活しやすい地域をつくっていこうと、そのような思いで、今、人口を定着させるということで努力をしているところでございます。

よろしくお願ひいたします。

### コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

印象的だったのは、毎年3家族9人ずつ入ってきてもらって、現在1,200人の村ですから、人口減少を900人で止めるという、かなり大きなインパクトがあることでした。ありがとうございました。

それでは、続いて、今日唯一、経済界からの代表であります掛川商工会議所の会頭、鈴木様より、取り組みについてご報告をいただければと思います。よろしくお願ひします。

### 掛川商工会議所 鈴木会頭

掛川商工会議所の鈴木です。

掛川市は静岡県ですけれども、位置的なことを言いますと、大体浜松市、静岡市の中間であります。また、北は山間地、南は遠州灘ということで、中心に東海道線、新幹線の掛川駅があるというような町でございまして、農、住、商、工がバランスよく配置された町ではないかと思っております。

掛川市にとっても、この人口の減少は非常に問題であります。今現在12万人ですが、10年後に10万人を切るのではないかというような予測がされている町です。

私は、この人口減少に対応して、どうしたら人口が減らないで住むか、あるいは増えていくかということに関して、4つの要素に分けて、今、取り組んでいることと課題ということでお話をさせていただきたいと思います。

まず、1つには、やはり人口が減少するということは、働く場所があるかないかということではないかと思いますので、掛川市においては、工業団地の造成であるとか、誘致策であるとか、そういうものを推進しております。

2つ目が、やはり住んで安心か安全かということが言われますので、この辺について掛川市は、まず医療体制について、隣の袋井市と一緒にになって中東遠総合医療センターという病院をつくりました。もとあった掛川病院のところへ、地域医療ということで、全てを集めた医療、介護の団地みたいなものをつくりました。これで、例えば、介護施設であるとか、あるいは老人福祉施設であるとか、そこで相談をするところであるとか、保育園であるとか、特別支援学校であるとか、全てをそこに集めて、これは、市民にとって、医療の問題については、1つ解消されたということです。

それと、南に海がありますので、津波対策ということで、今、掛川方式で、レベル1に対応するような12メートルくらいの防潮堤を、盛り土をして、そこへ植林をするというようなやり方でつくっておりまます。これが安心・安全の対応策で今やっている主なところです。

3つ目が、やはり、先ほども大脇さんがおっしゃっていましたけれども、そこに住むということは、誇りを持って住むということではないかと思います。掛川市は、精神的には報徳思想というものが流れておりまますので、この至誠、勤労、分度、推譲、まとめて言えば、そういう報徳思想があります。その思想に基づいて、今現在の人がかなり楽しく住んでおりますので、この辺の思想的なものを続けて、新しく移住していただく方にも、同じような可能性が出てくるといいと思っております。

4つ目の要素として、やはり住んで魅力がある場所でなくてはいけないということです

ので、この辺が1番難しいところかと思うわけです。今、掛川市は協働のまちづくりというものを進めております。協働のまちづくりといつても、いろいろありますけれども、端的に言うと、自治会へ自由に使っていい予算をつけているという協働のまちづくりで、それぞれのコミュニティーで考えなさいよというやり方をやり始めています。これが、そこに住んで、昔のようなコミュニティーができる、住民がどういう魅力を持ってくれるかということですけれども、これは、若い人たちから見ると、少し違う方向にもなっているところもありますので、若い人たちの意見を取り入れながら、この協働のまちづくりが進むといいと思っております。

以上、4つに分けて、働く場所、安心・安全、住んで誇り持つ、住んで魅力を持つ、その要素で話をさせていただきました。

ありがとうございました。

## コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

先ほどの豊根村とは地域としてはかなり置かれている状況は異なる中で、それぞれ取り組みをされているということだと思います。

続いて、最初のご発言の最後になりますけれども、和合むらの世話人の吉田様より、取り組みについてご紹介いただけたらと思います。よろしくお願ひします。

## 和合むら　吉田世話人

ありがとうございます。私の暮らす阿南町の和合地区とは、広大な山間部で正に過疎・高齢化の厳しいところです。17年前に私が和合に暮らし始めたころ、350、60人いた人口が、今、300人を切って、もうたちまち250、60人という、深刻な限界集落です。

人生の中で、多くの知った人を短い間に失っていくということを初めて経験しておりま

す。

そして、いいことばかりではなく、本当にたくさんの地域の中での生きにくさも味わったこの17年間のうちに、私はたまたま和合を1回も出たいと思ったことがありません。その間に、引っ越してきて、また出ていった人たちもたくさんいます。もちろん私たち以外に住みついている人もいます。本当に来る人それぞれがそれぞれの個性をその地域で發揮して、それぞれの人間関係を築いています。

17年前と比べると今はIターン、Uターンということが本当に普通に語られるようになりました。かつては、「ちょっと変わった人だな」という印象を持たれることが普通で「オウム真理教じゃないの」と心配されるような感じだったのですけれども、もうその状況は、ずいぶん変わっているということを本当にひしむしと感じます。

日本全体が人口減少している中で、都会の過密した人口が、こういった山の中に移ってくるべきであることは確実なことと信じます。

私もそうですけれども、都会の生活に疑問を感じ、つかみどころがないような暮らし方に、生きている実感とか、都会にはない違ったものを求めているから来るのはですね。

三遠南信は、こんにちもこれだけのお祭りの宝庫だということで、今日の講演ではいいお話をいっぱい聞かせていただき、この地域の素晴らしさを改めて再認識することができました。私が山に住みついて本当に感動するのは、祭りが祭りだけあるのではなく、1年中の厳しい山の限られた資源とともにある暮らしの中で、その暮らしの営みをより安定させるために祭りが切り離せないものであるということを学んでいます。全ての伝統文化を少しでも継承し後世につなぎたい、そういう気持ちにすごく駆られました。

ですので、移住政策とか、仲介者の養成とか、そういうことも課題に上がってくるのですけれども、余り難しく考えずに、ここは本

当にいいところなのだという自信のもとに、どんどんいろいろな人に、「通過していただいても結構ですし、定住していただければなおりがたいくらい」の軽い気持ちで、さくさく受け入れて、1人ひとりに期待を余りしないほうがいいのではないかと思います。

今日も、てほへさんの素晴らしい事例を聞いたので、例えば面接をして受け入れたときに、そうではないとがっくりしてしまって、次のを受け入れる気力がなえてしまうということがあるかもしれませんけれども、きっと次はこんな人が来てくれますように思って、もう本当にいろいろな人がいて、いろいろな個性を持って、何が始まるかわからない、地域にはいろいろな魅力があって、外から見れば、「こんなこと」と思うことを種に、本当に大きなことが展開する可能性がいっぱい山々にはあります。私自身も微力ながら山と共に暮らす愛おしい日々について情報を発信し続けていきたいと思います。

### コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

今までの発言とは大分視点が違っていますけれども、最初の大脇さんの話の中にあつた、地域愛というか、多分そういうところからの発言かなと思いました。

だから、この三遠南信には、いろいろな自然、あるいは景観、文化・芸能、さまざまな資源があって魅力的であり、それを自分たちが無理をしない範囲でもっともっと外に向けてPRをしていけばいいのかなという趣旨のご発言だったと理解しました。

三遠南信地域には、今申しましたように、さまざまな自然、あるいは景観、文化・芸能の資源がありまして、それぞれの地域において、地域の特性もあり、生活の違いもあり、さまざまなわけですけれども、それぞれの地域で、それぞれ持続して暮らせる暮らし方の

工夫がなされている、あるいは、その政策として、そのための課題に取り組んでいると感じております。

それでは、今度は、安心して持続的に暮らせる地域づくりを進めるという場合に、連携して取り組むべき課題というのが何なのかということのお考えをお聞かせいただけたらと思います。

まず、3名の方ということで、設楽町の横山町長から、よろしくお願ひします。

### 設楽町 横山町長

設楽町長の横山です。どうかよろしくお願ひします。

連携ということでございます。我々、特に北設楽郡の中山間地域にあるこの3町村が一緒になって、今までも、またこれからも、こうした体制を持続して、連携作業ということでやっていくことが、地域の住民の人たち、また、外から見える人たちにとっても、こうしたことがきちんと安定して運営ができるかどうかという継続性、そういったものを重視していく必要があろうかと思っております。

その中の一環で北設楽郡公共交通活性化協議会というのを立ち上げて、各町村単位で、それぞれバスを運営しております。そのバスは、各自治体も隔たりがなく、それぞれ乗り入れができるように、また、病院ですとか、買い物ですとか、高等学校ですとか、そういったところへ他町村からも行き来ができる、そのような体制維持をつくっていこうということで、今、これを進めおりますし、まさに、こうしたことが地域で住む人たちの生活の基本になる部分であろうと思っておりませんので、これを継続していきたいです。

そして、もう1つは、情報ネットワークということで、光ファイバーも3町村一緒にあって、北設楽郡中、同じように、条件をともに利用ができるように、設置しております。約

40億円の経費をかけたわけですが、これの維持運営をずっとずっとこれからもやっていくわけです。毎年億という単位で維持経費というものがかかるまいります。しかし、お金にかえられない、また将来、我々の地域で生活をしていくために、先ほどの大南先生のお話にもあったように、若い人たちが我々のような地域へ来たいというときに何かできることはという中に、1つはITが自由に操作できる、そういう環境が整っているのだよというようなことを維持し、また、それを持っていて、こうしたものも地域の財産となっていく、そして、これから将来にわたって若い人たちも入ってきて、生活が継続できる、そのような要素にもつながるだろうと思っております。

それ以上に、今までそうですが、ごみですとかし尿といったものも一緒に管理運営に努めています。

そして、さらに、これから新東名高速道路等が開通をしていくことによって、多くの人が我々の地域にも入ってきていただける、こうしたものに期待をするところでして、来ていただいて見てもらう、こういった要素をつくり上げなければいけません。それは何かというと、やはり1つは、観光の資源の創出、それぞれ自治体の持っている施設、こういったものも全てを観光のチェーン化を図る、それぞれの特性を持った施設として紹介ができるように、そのようなシステムをつくっていく必要があろう、とも思っております。地域の魅力をつくり上げていく、こうしたものこれから大きなテーマとして取り組んでいく必要があろうと思います。

### コーディネーター／豊橋技術科学大学

#### 大貝副学長

ありがとうございました。

それでは、続きまして、根羽村の大久保村長、よろしくお願ひします。

## **根羽村 大久保村長**

根羽の大久保でございます。

私は、常日ごろ、先ほど話題に出ましたけれども、自分たちの住む地域に誇りと自信を持って生き生きと生活をして、それを次世代の子どもたちにしっかりとつないでいくというのが持続可能な地域の大原則だと思っております。

そのためには、どのような大きな地域でも、小さな地域でもそうですけれども、生きるためのさまざまな仕組みづくりというのは必要だと思いまして、1つは、働く場所だとか機会、雇用の循環というのと、あと、地域の中でお金をどのような形で回すかということ、もう1つが、やはり生きるために最低限の教育だとか、医療だとか福祉のサービスの循環を、小さな自治体の中でも動かしますけれども、ただ、それだけでは経済の循環とかいろいろなものができませんので、それを補う部分として、例えば、川の上流、中流、下流の流域の連携ですとか、三遠南信みたいな、圏域の連携があると思います。

特に、私ども森林が非常に多いです。92%が森林で、資源をたくさん持っておりますので、それを1つ、具体的に連携のお願いしたい部分で申しますと、やはり国産材を使って家を建てるとか建物を建てるのと、地域材といって、ある程度の固まった地域の材料を使って、そこでものをつくるというのでは全然趣旨が違うということで、地域材を使うということは、そこで、地元の山で働いて、山がきれいになって、そこでお金も得るし、森林も整備されるしということで、全体が整備されるという地域材の魅力があるので、ぜひ公共建築だとか、そういうものに関しては1つの大きな固まり、三遠南信地域では、この辺にある木をみんなで使いましょうとか、矢作川の流域でそういう流域材を使いましょうといった取り組みが1つの国土を保全する仕組みにもなるし、我々が働く地域づくりにも

なるので、ぜひそういったことをこれから皆さんの中で共有できればありがたいという動きをしていきたいと思います。

## **コーディネーター／豊橋技術科学大学**

### **大貝副学長**

簡潔にまとめていただきいて、ありがとうございました。

それでは、続いて今度は、てほへの理事長であります伊藤様から、連携について、取り組みを紹介していただきたいと思います。

## **NPO 法人てほへ 伊藤理事長**

てほへの伊藤と申します。よろしくお願ひいたします。

今、事例報告で大脇のほうからご案内したのですが、我々の場合は、やはり交流館を中心として、体験を幾つか打っておられます。その体験を行うに当たりましても、町の行政の方々、あるいは小学校の方々と一緒に行っています。特に I ターン、U ターンをこれから増やそうというような活動をてほへの中ではやっていきたいということで、特に、小学校、中学校、高校生、そういう皆さんのが、この町のよさを理解してもらって、帰りたくなるような環境をつくっていくという考え方を持っています。

そのような中で、地元にある花祭をやろうとか、やりたいから帰ってくるという人が、今、2、3増えつつありますので、これはかなり期待が持てるなと思っています。

体験などを打つときにも、小学校とか中学校のほうへは必ずチラシとかそういうものでご案内をさせていただきいて、先生方と一緒に参加していただくような形をとっています。今後、I ターン、U ターンを増やすためには、そういうことが必要かと思います。

もう1つは、帰ってきても何をやるのだという問題がどうしても出てまいります。それには、交通アクセスがかなり完備されました

ので、ベッドタウン化というようなものも1つの方法ではないかと思います。そういうPRもこれからやっていったらいいと思っておりますので、のき山放送局のネットワークを通じまして、東栄町の魅力、もちろん奥三河の魅力を発信すると、そのようなものも方法の1つではないかと思います。

もう1つ言えることは、仕事を持った方、あるいは自由に山村生活をしたいというような方も若い人の中には結構おりまして、NPOのスタッフの中には、そういうニーズを求めてきている方もいます。そういう方の雇用契約というか、そういうものも、今後は考えなければいけないと思います。終身雇用が非常にいいことはわかっているのですけれども、それには拘束されるものもあります。特に私たちのスタッフの場合は、自由に働いて、自由に自分の生活を楽しむというような方もおりまして、山間地で生活するのには、都会と違って、生活コストはかなり違うという魅力もたくさんあるので、そういう魅力を皆さん、若い人たちにも理解してもらっていくのも1つの方法ではないかと思っておりまして、周辺の行政をはじめ、学校あるいは住民の皆さんと地域の魅力を発信していくかと思つております。

#### コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

3名の方から、連携して取り組むべき課題ということで、ご発言をいただきました。根羽村の村長が簡潔にまとめてくださったのではないかと私は思っております。基本は、それぞれの自治体で雇用の創出であるとか、医療、福祉あるいは教育といった面でサービスを提供していくということですが、それぞれの自治体では困難な部分もあるわけとして、それは設楽町長から話があった、情報基盤であるとか、あるいは公共交通のネットワーク、

こういったものを連携していくということが取り組みとしては重要な課題ではないかということだと思います。

それでは、最後、4名の方にまだご発言をいただいておりません。

これまでのそれぞれの地域における移住・定住に具体的につながった事例を、あるいは、なぜそれがうまくいったのかといったあたりについてご紹介をいただけたらと思います。

最初は、東栄町の村上町長からご発言をお願いします。

#### 東栄町　村上町長

東栄町長の村上でございます。よろしくお願ひいたします。

それでは、私のほうから、1点目が、まず、先ほどNPOでの話もございましたので、この辺のところは省略させていただきます。今後も、東栄町、地域を知っていただくための交流事業を、てほへを含めて、行政も協力して、町の魅力、情報発信をしてまいりたいと思っております。

それから、平成24年度から空き家の改修をしてきて、そこに定住促進の空き家活用事業を進めております。平成24年度から3戸ずつを改修させていただきましたので、平成26年度までに9戸の改修をしてしまして、現在、そこに31人の方に定住いただいております。大人が17人、保育園以下が7人、小学生3人、中学3人、高校生1人というような状況でございます。引き続き、今年度も空き家の改修をしておりまして、これにつきましては、町がまず空き家の所有者から10年間借り受けるというところでございまして、予算の範囲内でリフォームをして、Uターン、Iターン者に賃貸をして、その空き家の、いわゆるリフォーム代に応じて分配するという制度でございます。10年後は空き家所有者と入居者の直接の契約に移行するというようなことでございまして、

その仕組みをつくった中で、現在、4年目に入っているというようなところでございます。引き続き、これも進めてまいりたいと思っております。

それから、地域おこし協力隊につきましても、平成25年度より3年間で延べ6名の隊員を雇用しております。既に卒業した1名は、昨年4月から、町内にあります古民家を利用しました体験型のゲストハウスを現在運用しております。卒業後、来年度以降も引き続き協力隊の募集をかけていきたいと思っております。

森林伐採作業員につきましても、Uターンの希望をとって、現在、約20名の方が作業員ということで従事をしておりますが、引き続き作業員の募集につきましては、3か月の研修期間を受けて採用ということをしておりまして、その3か月間の研修費用を町のほうで助成をさせていただいております。これにつきましても、引き続き進めてまいりたいと思っております。

高齢化率も高くなつてまいりまして、医療職員、介護職員が非常に不足してまいりました。したがいまして、来年度から、介護職員等も、その研修期間についての補助制度を何とか拡充しまして、確保に努めてまいりたいと思っております。

もう1つ、先ほど、NPO てほへの伊藤さんのほうからもお話がありましたように、新東名高速道路が開通し、なつかつ将来、これで、東栄インターチェンジに向かって三遠南信自動車道が開通を迎えます。それにつきまして、やはり東栄町に住んでいただいて、通勤圏内も約120キロメートル圏内は1時間から1時間半の圏内になつてまいりますので、静岡方面は掛川市の方面、それから、伊那・信州は飯田、愛知県側は名古屋という圏域までは当然通勤圏内に入つてまいりますので、来年度より、通勤費の補助制度を設けて、定住施策に努めてまいりたいと思っております。子育てにつきましては、都市部と違いまして、塾も

ございませんので、公営塾を来年度あたりから検討してまいりたいと考えております。

### コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございます。

東栄町については、最初の大脇様からの活動もありましたし、定住がかなり長い期間かけて進んできているということだと思います。

それでは、続いて、阿智村の熊谷村長から、お願ひいたします。よろしく。

### 阿智村 熊谷村長

昼神温泉のあります阿智村の熊谷でございます。時間もありませんので、端的に申します。

いい事例といえば、阿智村は今、日本一星空がきれいということで認定いただいたものですからやっておりますが、その中で、1人の女性が、その星のガイドとして星のもとで働きたいからということで仙台から来て住んでくれています。その方は芸能もやっている方なのですが、私どもの阿智村がいいからというわけではなくて、やはり自然だと、お祭りだと、そういうものに魅力を感じてくださっていますので、まさにそういったところにヒントがあるのではないかなど感じております。

阿智村も、今、年間120万人の観光客が来てくださっているものですから、先ほどもどなたかが言つていらっしゃったように、交流人口の増加によって住んでみたい、そして、教育ということもすごく大事なので、子どもたちがずっとそういうものを経験することで、いつかはUターンしてもらいたいということを思いながら、何とか、もがき苦ししながらやっております。

このあたりは、どの市町村も本当にがき苦しんでやっているのが人口の対策だと思います。いろいろなことを考えるのですけれど

も、やはり人が住んでくれないと、行政というのは成り立ちませんので、最後は住まなければいけないと思っております。そういうことで苦しんでおります。

ですから、私の提案ではないのですが、各市町村でいろいろ、それぞれがどうだ、どうだとやっていることも大事なのですが、せっかくこの三遠南信という組織がありますので、今日も3月1日から「三遠南信特産品ガイド」が始まるというのが出ましたので、これとあわせて、定住ガイドみたいなものをつくっていただきて、観光の連携だとか、祭りの連携とか自然の連携、そういうたくくりで、東京や名古屋の大勢の方に、ぜひこの三遠南信に来ていただけるよう、そういうた取り組みをぜひお願いしたいと思っております。

今のところは、これはウェブサイトが1番だと思います。三遠南信という言葉はなかなか全国にはまだ響いていませんので、最初は仕方がないので、東三河とか、そういうくくりで入っていけばいいと思いますけれども、そういうたところをぜひお願いしたいと思います。SENAの中にも、全国に、定住にぜひ来てくださいと周知するような営業マンを2、3人くらい置いていただくとありがたいと思いますので、お願ひして終わりにいたします。

**コーディネーター／豊橋技術科学大学  
大貝副学長**

ありがとうございます。

それは、飯田の市長にしっかりとお願ひしてください。SENAもなかなか大変だと思います。

ありがとうございました。星がきれいということで、何万人の観光客が増えたということのようです。

それでは、続きまして、泰阜村の松島村長からお願ひいたします。

**泰阜村 松島村長**

地方創生の総合戦略を作成して、過去5年の数字を見たら、4年間は社会増でした。もちろん5人とか、3人とかという人数ですが、そういう点では、泰阜村にも転入者がいるのだなと思っておりますが、余りよい事例はございません。

泰阜村は、地域おこし協力隊が根づかない村だと言われております。現在1人は定着しているのですが、3年過ぎるとみんな出て行ってしまうというようなことでございます。実は、村そのものが中途半端で、私は、和合むらのようなところが、これから人が大勢来て住むようになると思っています。それは、和合という、まさに本当に都のちりも通いこぬ地域であるというところに住むということだと思います。大脇さんとのほへのように、目的があって集まることもできます。でも、泰阜村のようなところは中途半端で、例えば、どこかに働きに行かなければならないけれども田舎に住む、という人を呼ぶにはどうしたらいののか考えさせられます。

逆に、この泰阜村のようなところで、山村の生活を本当に体験したいというか、遊休農地を借りて農業をやりたいという人が、たまに来るという話があります。また補助施策を行政は用意してあるのだけれども、基本的には、やはり何を売りにやっていくのかということをはっきりしてこなかったので、転入者はいるのだけれども、本当の意味でのよい成功事例というのは余りないのかなと思っております。

大脇さんがお話をされた、田舎に移住・定住するには、地域愛と覚悟、そして、プライドが重要だということは、移住・定住者にとって重要なことではなくて、我々のようなもともと住んでいる、いわゆる原住民に必要だと思います。地域愛と覚悟とプライドが原住民にないのです。そういうようなものが住民にあって、住民が生き生き暮らしている

という姿を見ると、移住・定住者が、「ああ、やはり行ってみようかな。」と思うようになるのかな、と思ったりしています。成功事例は、その集落に住む皆さんが、山で何もないけれども、人がいいとか、とても生き生きと暮らしている、というようなことではないのかと思います。

大南さんや大脇さん、吉田さんもそうだと思うのですが、コーディネーター役というか、キーマン、キーウーマンという人がいて、そういうことを一生懸命やってくれるということが必要で、そういった人をつくるなければいけないのかなと思っています。

成功事例というより、そういうような考え方をしていかなければいけないのかなということを思っているということで、報告にかえさせてください。

#### コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

キーパーソンという話は、昔、愛知大学と豊橋技術科学大学と、それぞれ三遠南信地域の自治体で地域づくりのプロジェクトをやっていましたけれども、その中で、愛知大学でいろいろ研究されて、やはり最終的には、キーパーソンが重要なのだということでした。ソーシャル・キャピタルのテーマということで、キーパーソンの重要性というのは指摘されていたというのを思い出しました。

最後に喬木村の市瀬村長、よろしくお願ひします。

#### 喬木村 市瀬村長

1番答えづらいところにご指名をいただいて、大変困惑しております。実は、長野県の喬木村は、飯田市に三方を囲まれております。そこずっと、人口は7,000人くらい続いておりまして、それは言っても、少子高齢化の波ということで、直近の国勢調査では、5%

も人口が減って、ついに6,400人くらいの村になつたということで、今、尻に火がついた状況になっています。

そのような中で、リニアの長野県駅が村の中心から5分のところにできる、それから、三遠南信自動車道のインターチェンジが村の中にもできるということで、これからは移住・定住というのは大きなテーマになってくるし、地域を守っていくのは、まずは人だということで、人づくりにも取り組んでいかなければいけません。今、村の中の中心課題となつてているのは、国土交通省の進めております小さな拠点整備と文部科学省のICTを活用した教育の推進に資する実証事業ということで取り組んで、人づくり、地域づくりをさせていただいております。

成功事例の具体的なお話をということでございますが、こういう取り組みをしたから、このような人たちを呼び込むことができたというのはなかなか見えてこない部分がありまして、都会から来た人が入ってきて問題になるのは、やはり、いつもその地域との軋轢です。先ほど覚悟という話もございましたけれども、都会の風習との違いがあります。田舎には消防団とかいろいろな村役があつたり、地域とのお付き合いはどうしたらいいのだというので、地域の自治会ともめてしまつて、地域のコミュニティーから外れてしまつたりというような問題もあります。

数少ない成功事例としましては、各自治体の施策であります定住住宅ということで、これは、インターネットで公募しましたところ、横浜などから応募があり、住んでいただきて、今度は、そこに訪れたお父さんやお母さんに来てもらって、実際に住んでもらって、ここはいいところではないかと自分たちで家を建ててくれたということで、2世帯、3世帯の入居につながってきたという事例もございます。地域おこし協力隊で、2年くらい、女の子が入つて暮らしているうちに、なぜかわかりませ

んが、お付き合いをしていた男性が、東京の仕事をやめてその方についてきて、この村に住んでくれたということがありました。その理由となるものは、この村の中に何があるのだというのは私たちもよくわからなくて、あるのは山と空気と水なのです。でも、ここに暮らしてみて、「ああ、ここで一生暮したい」と思わせる何かがあるというのは、これから私たちが見つけていかなければいけない、独特な都会の方の感性なのかなと思っています。

過去の経験を振り返ってみると、どうしても地域の中に都会の方も入っていただいて暮らしていただかなければいけないということなので、村の古民家などを活用して、お試し移住制度といいますか、1週間なり、2週間なり、この地域の中で暮らしてもらって、この地域に暮らすにはこういう覚悟が必要だということを理解した上で住んでいただかないと、村の中も、ただただ移住者を増やせばいいという話ではなくて、良好な地域のコミュニティーをつくるためには必要なのではないかなと思っていました。

それとあとは、先ほど述べましたように、各自治体で出ている施策というのは、大体もう皆さん、手を尽くしているということになります。そこで、泰阜村長がおっしゃったように、大南理事長のような、圧倒的なマンパワーを持つ人と行政がどうやって手を組んでこの地域をつくっていくかというところに足を踏み込んでいかなければいけない時代なのだと感じております。

#### **コーディネーター／豊橋技術科学大学 大貝副学長**

ありがとうございました。

南信州の場合は、飯田を中心に広域連合がありますので、広域連合として移住・定住をどう進めていくかという視点が僕は重要なかなと今聞いていて思いました。リニアのこともありますし、これからはそういう観点で進め

ていくべきではないかと思いますが、それそれがというとなかなか厳しいところがあるのかななど、聞いていて感じました。

それでは、これで1通り全員の方にご発言いただきましたので、最後に、今日、コメントテーターとしてご参加いただいております大南様よりコメントをいただけたらと思います。簡単で構いません。よろしくお願いします。

#### **コメンテーター／NPO法人グリーンバレー 大南理事長**

三遠南信の首長とは、これまで何度かお目にかかる機会というのがあって、今日もまたお会いできてよかったですというような気がしています。

例えば、先ほど私のほうで申し上げましたが、WEEK 神山という宿泊施設ができたわけです。そこが昨年10月にインターネットに求人を出しました。料理人と、そのサポートする人の求人を出したら、何人か応募があったわけですが、結果的にアムステルダムでシェフをしていた女性とフィレンツェでバリスタをしていた女性が選ばされました。今、2人とも彼氏をアムステルダムやイタリアに残して神山にやってきて、それで生活をしているというようなところがあります。

また昨日、同じアムステルダムから、3年前に神山アーティスト・イン・レジデンスに招待された女性が、神山にファブラボができるという話を聞いた途端に、「私、ファブラボができるなら、神山に移住してくる」と言って帰ってきました。

結局、どういうことかというと、横浜とか東京とか名古屋というように目がいきがちですが、多分人財のマーケットは、ある面、海外にも目を向けておく必要があるのではないかかなと思います。

逆に、東京とかで住んでいる人よりも、海外で体験した人たちというのは、こういうよ

うな山ばかりの場所で、何もないと思われるようなところにひかれるところがあるのだと思います。

西洋社会というのは冷たいところがあります。ところが、この三遠南信とか神山のような田舎のところに入ってきたら、やはり人間が温かいから、そういう場所を求めている人がいるということを少し考えておく必要があるのではないかと思います。

それと、地域の覚悟という問題もあるように思います。日本の地方とか田舎は、入ってくる者に変化を求めます。「私たちは、もう何百年も守り続けてきた伝統があるから、入ってくる人たちが自分たちに合わせて変わるべきだ」と、入ってくる人間に変化を求めるのだと思います。しかし今後の移住を考えた場合には、「君たちも変われ。でも、住んでいる自分たちも変わる」という覚悟が求められると思います。だから、両者の歩み寄りが必要になってきます。

つまり、「私たちには守ってきた伝統がある」と言うのですが、それなら、500年前の伝統を今現在、同じように自分たちが続けていているのかというと、そうでもないわけです。その時代に合うようになんと変えてきているわけですよ。でも、頭の中は、昔の江戸時代の前からのものを受け継いでいるみたいな錯覚に陥っていると思うのです。そこが結構、移住者との間のトラブルを引き出すもとになるので、自分たちもこれまで変化させてきたことをきちんと見る必要があると思います。

例えば、神社で楽車が出たりするときに、昔、私たちが小さいときは、楽車には男の子だけしか上れなかつたわけです。今は女の子でも全て、「いや、子どもなら構わない」みたいになっていて、あれは変えてきているわけです。ですから、そういうように柔軟に対応してきているというところは、新しい物事が起こるときには、やはり自分たちも柔軟に対処する必要があるのではないかなと思います。

それと、吉田さんが先ほど言われたように、さくさく受け入れるということ、これは非常に重要だと思います。例えば、日本の地方では、よそから、「こんなことがやりたい」と若い人たちがアイデアを持ち込んできた場合、そのアイデアを聞いた途端に「いや、そんなことをやられたら困る」と止めてしまします。なぜでしょうか？自分が持っている枠に合わないということだと思います。こうした枠は例えば、「昔、10年くらい前に同様な話を聞いて、えらい目に遭った」ということが1つの枠をつくるわけです。一度枠ができると、その枠の中でしか物事が考えられなくなります。つまり、枠の大きさのものしか生まれないということです。

神山が意識的にやっていることは、入ってくる人たちに対して、謙虚に向き合うということです。「あなたが言うことを私たちもはつきり理解できない」から止めてほしいというのではなくて、「目の前でやってみてくれ」とやらせていることだと思います。その結果、自分たちが予期しないことが次から次へ起こっていくということなので、まず、自分たちの枠をぶっ壊すということが、非常に重要なポイントになるのかなと思います。

さらに月並みですが、最終的には、やはり最大の資源は「人」だと思います。観光でいろいろな景色があるとか何とか言っても、やはり人は人にひかれて来ます。そこで、地域の人と外から訪ねてくる人が触れ合う、集まる場が必要になります。道の駅がありますが、道の駅は地図情報を与える場所であり、道の駅に欠けているものは、人の情報だと思います。町には人の情報を伝える場所が必要です。例えば、何か南信州の歴史に関心があるという人がぽつとやってきたときに、「ああ、あなた、南信州の地域史に関心があるなら、詳しいおじさんがいるから、呼んであげるわ」と、つなげてくれる場所です。三遠南信のおもしろい人に会おうと思ったら、とりあえずあそ

こへ行ったらという場所をつくる必要があると思います。

コメントになっているような、なっていないうな話ですけれども、私のコメントとさせていただきます。

どうもありがとうございました。

**コーディネーター／豊橋技術科学大学  
大貝副学長**

どうもありがとうございます。

地域づくりというか、地域おこしの、まさに神髄の部分のお話があつたかと思います。

ここで、最後、この後にあります報告会に向けまして、この「山・住」合同分科会の意見の取りまとめをさせていただきたいと思います。

今日ご発言いただいたものを大きく3つの視点に分けて整理させていただきます。

まず1点目は、三遠南信地域、特に、既に語り尽くされているこの中山間地域の持つ魅力のある地域資源という利点、あるいは新東名高速道路の開通、行く行くはリニアが通る、三遠南信自動車道もできてくるという生活面での利点、そういう利点を圏域内外に積極的に情報発信することで交流人口の増加を図っていくこと、観光客を呼び込むというこということが、1つ重要な視点だということです。

2点目については、今日の話の中心になるかと思いますけれども、この三遠南信地域だからこそできるライフスタイル、これをそれぞれのところで見出して、それを圏域内外にPRしていくことです。雇用の確保であるとか子育て支援、あるいは住居の提供、こういった移住・定住に通じる事業を展開することで、中山間地域の持続可能な地域づくりを推進していく必要があるだろうということ、これが2点目です。

3点目としては、この三遠南信地域の自治体間の連携という視点から見ますと、地域の公共交通であるとか、あるいは情報基盤のネ

ットワーク、こういったものをきちんと整備・維持をしていくことが、これからそれぞれの市町村の連携にとって重要であるということです。

以上3点で、この「山・住」合同分科会の取りまとめとさせていただきたいと思います。皆様ご協力、本当にありがとうございました。以上をもちまして、「山・住」合同分科会を閉会とさせていただきます。どうもありがとうございました。

## 9 報告会 要旨

*San-En-Nanshin Summit 2016 in Higashimikawa*

- 各分科会の報告
- サミット宣言
- 次回開催地域代表あいさつ

### ■ 「道」分科会

コーディネーター／豊橋市 佐原市長



「道」分科会のコーディネーターを務めさせていただきました豊橋市長の佐原でございます。それまでは「山・住」分科会でありまして、3年ぶりに「道」分科会を担当させていただきました。

道の大切さについては、皆様方、誰も異存のないところだと思います。2日前、新東名高速道路の開通式がありました。岡崎は浜松市長さんにお任せして、私どもは設楽原のほうにお邪魔させていただきました。元国土交通大臣の太田先生と一緒にさせていただきましたが、そのときに、「おい、今は何が足りないのだ」と言われました。間髪入れずに、「まず、道ですね」という話をしました。

「生活をするにも、産業を育てるにも、文化交流をするにも、何においても、つながっていないことには私たちは何もできないのです」というお話をさせていただきました。

こうした意味で、今日、「道」の分科会をコーディネートさせていただいて、その中で、とても強く感じたことは、古くは天竜川、そ

して、豊川の水運を使い、この地域の産業を支え、そして、生活となりわいを支えてきた地域であります。そして、飯田線ができて、飯田線が使われて、人がさらに大きく動くようになりました。実は、豊橋市には南信地域から嫁いで来られた方たちがたくさんいらっしゃいます。私たちが普段つき合っている方の中にも、「生まれは飯田だよ」、「駒ヶ根だよ」とかということをおっしゃる方が沢山いらっしゃいますし、私たちのまちの一部地域は、東栄町や豊根村出身者の方が大半を占める地域もあるわけであります。

今、産業構造、そして、社会構造が大きく変わって、道がつながっていかなければ、私たちの地域をつなぐことは非常に困難だということを多くの方たちが意識されるようになったかと思います。こうした意味では、三遠南信自動車道を初めとして、この地域がつながることは、私たちこの地域の人間が持つDNAを最も刺激する出来事であるかなと思って、たくさんの参加の方たちからご意見をいただくことができました。

この地域をつなぐ基幹道路を使って、観光、産業、そして防災、さまざまな面で現実に起きていることのご紹介、これから活かして取り組んでいきたいことのご紹介等々の意見を賜ったところでございます。

あわせて、こういった道路のネットワークとともに、飯田線を活用しようではないか、この地域を活かしたサイクリングとか、いろいろな新しい観光のスタイルを提案できないだろうか等、こういった意見もたくさん賜ったところであります。

各地域、この三遠南信自動車道、新東名高速道路、東名高速道路、そして、国道23号バイパス、浜松三ヶ日湖西豊橋道路（浜松三ヶ日・豊橋道路）、こういった道路の重要性をみんなで再確認をさせていただいたところでございます。

こうした議論を受けまして、本日の「道」分科会の成果について、以下の3点にまとめさせていただきました。

まず、1点目といたしましては、新東名高速道路の開通や三遠南信自動車道の整備により、中央自動車道、東名高速道路、浜松三ヶ日湖西豊橋道路（浜松三ヶ日・豊橋道路）などの広域幹線道路ネットワークと、将来的にはリニア中央新幹線飯田駅と連結することにより、沿線地域の交流にとどまらない広範な交流ネットワークが期待されるということです。

2点目といたしましては、三遠南信地域の南北軸の交通基盤である飯田線を活用し、広域的な観光資源化を図るとともに、有機的に幹線道路とを結びつけ、リニア開通後の経済効果が三遠南信地域へ波及する取り組みを進めることが重要であることです。

最後の3つ目といたしまして、医療機関への搬送路や災害時における緊急輸送路の確保の観点からも、この地域のDNAをつなぐ三遠南信自動車道の整備促進が重要であり、三遠南信地域の創生の観点から、三遠南信地域の圏域内外を結ぶ広域幹線道路ネットワークを活用し、地域への新たな人の流れづくりに結びつけることが重要であること、加えて幹線道路へのアクセスを確保するための周辺道路の整備も重要であることです。

以上、3点にまとめさせていただきまして、「道」分科会の報告とさせていただきます。

ご議論いただきましたこと、また、傍聴いただきましたことに、あわせて心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

## ■ 「技」分科会

コーディネーター／株式会社サイエンス・クリエイト  
白坂常務取締役



「技」分科会のコーディネーターをさせていただきましたサイエンス・クリエイトの白坂と申します。

大変議論が盛り上がりまして、時間を超過してしまって、ほんの10分前まで議論を続けておりまして、やっと終わりました。

「技」分科会から、今回の議論のテーマでもあります「地域の産業集積を活かした新たな雇用の創出」に関する議論の内容を報告させていただきます。

まず、豊橋市の加藤産業部長から、「豊橋市における海外展開の取り組み」について、ご報告いただきました。

その後、雇用創出につながる新しい価値創造、新産業をつくり出すために、地域ブランドの育成、あるいは海外を含めた販路の開拓が重要になって参りますが、三遠南信地域で行われている地域ブランド育成、販路開拓が雇用や地域への新しい人の流れの創出につながった具体的な事例と、そのための課題について議論を開始しました。

豊川商工会議所の日比会頭には、豊川特産品のブランド化の取り組みについてご報告いただき、蒲郡市商工会議所の小池会頭には、蒲郡での「みかわdeオンパク」の取り組みについて、具体的にご報告をいただきました。

また、三遠南信地域としてのブランドづく

りについてのご提案もございました。

次に、長野県の中川村の曾我村長よりは、地域へ工芸作家あるいはアーチストが集まるまちづくりの取り組みについてご報告をいただきました。

さらに議論を進め、地域ブランドの育成や、販路開拓を進める場合、圏域内で連携して取り組むべき課題について意見交換を実施しました。

初めに、豊橋商工会議所の吉川会頭より、東三河地域でのものづくり企業の育成、また、食と農にかかわる新価値創造、新商品・サービス創出の取り組みについて、次に、新城市商工会の本多会長には、新東名高速道路を活用した地域への人の流れづくりについて、ご報告をいただきました。その後、天龍村柚餅子生産組合 関組合長からは、地域の食文化を活用したブランドづくりについて、ご報告をいただきました。最後に、労働者の定住を促進するための地域の魅力づくりにつなげるべく、地域に存在する特色ある産業や、その集積を活かして、地域のブランド育成や販路開拓をしていくに当たり、三遠南信地域全体として何をなすべきかについて議論を深めました。

具体的には、まず、湖西市の三上市長から、新たに観光という分野で産業化を図り、雇用の創出につなげていく取り組みについてご報告をいただき、次に、磐田商工会議所の高木会頭からは、光技術の農業への応用・活用等を通じた農商工連携による産業振興活動についてご報告いただきました。そして、田原市商工会の河合会長には、地域資源である農産物を原材料とした新商品開発を通じたブランド化への取り組みについてご報告いただき、長野県の豊丘村の下平村長には、リニア中央新幹線の開業や三遠南信自動車道の開通に備えた雇用創出への取り組みをご紹介いただきました。最後に、NPO法人森づくりフォーラム 原田副代表理事には、再生可能エネルギー

を活用した地産地消による雇用創出について報告をいただきました。

これら議論を通じて、各地域には地域資源を活用した特色ある産業が存在しており、そういう地域産業の特色を活かした地域ブランドの育成や販路開拓に向けた取り組みが行われていたり、予定されていることがわかりました。

また、こうした活動を三遠南信地域全体で支援するための取り組み、特に、それを支える人材の育成が求められていることもわかりました。

こういった議論をまとめますと、大きく下記の3点に集約できると思います。

1番、三遠南信地域創生を図るため、地域内に雇用を創出し、新たな人の流れをつくることが求められます。

2番、雇用を創出し、新たな人の流れをつくるためには、それぞれの地域が有する特徴ある産業や歴史、文化、風土に根ざした魅力ある地域資源を活用し、三遠南信地域内での連携、例えば、マッチング、産業の集積などにより、新たな価値を加えた産業、商品、サービスに発展させていくことが有効あります。

3番、合わせて、これら新産業、商品、サービスを創出するための人材育成及びその確保が極めて重要であり、引き続き三遠南信地域内の大学、行政、企業、市民団体が連携しながら仕組みづくりを進めていくことです。

以上で、「技」分科会の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

## ■ 「風土」分科会

コーディネーター／野外教育研究財団  
羽場理事長



「風土」の報告をさせていただきます。  
昨日は、春一番ということで、全国に風速30メートルというような風が吹き荒れましたけれども、本日、風土の会場は、先ほどもアナウンスがございましたが、とても熱気ムンムン、中身はとても濃いものでございました。  
行政関係者が5名、経済界が2名、市民団体2名、コーディネーターと、それから、今日の基調講演者の須田先生含めまして、12名で、本当に楽しく、和氣あいあいと、いい話し合い会合が行われました。

まず、浜松市の山下文化振興担当部長から私たちの風土の歴史・文化・自然資源の活用の状況などをモデルケースとして発表していただきました。これをもとに、順次、皆さんと議論を重ねていったわけでございます。

1つ目は、発表者の皆さんの文化資源がどのような状況にあるかということをお尋ねいたしました。

そして、2つ目の話題は、それらがどのように連携しているのか、いないのか、あるいは可能性はどうなのかという話をいたしました。

最後ですが、それらをこれからどうしていくのかという話、あるいは、今、こうしているというような話、発展形を目指した事例報告等をいただきました。

会場からもご意見を伺うことができました。大変いいご意見等いただき、また、パネリストも挙手いただきまして、本当に楽しい、有意義な会議になりました。

簡単に報告させていただきますと、各地区においては、後継者難で非常に困っていること、さまざまなお祭り、さまざまな文化をつないでいくのが大変であるという報告がございました。

再確認することは、須田先生の話にもございましたように、日本有数の、世界有数の歴史・文化遺産を持っているのだけれども、それを伝えていくことが非常に難しくなっているということでした。

それから、その後継者を作っていくのに、後継者がないことをまさにばねにして、例えば、観光で来てくださる方、グリーンツーリズムで来てくださる方、そういう方に入っていただいて、つないだらどうだろうかとか、あるいは、そういう方がまた来て演じてくださるとか、さまざまな方法があるというご指摘がありました。

こちら遠州地域においては、さらに19地域を結んだ、そういった後継者育成のシステムもでき始めていますよというご報告もございました。飯田地方でも、やはり、独自にそういった動きが始まっています。

それから、ジオパークとか日本遺産の申請、そういったものも各地区で進めているというご報告等がございました。

特に、花火サミット、この三河遠州に手筒花火の文化が広がり、それが信州のさまざまところに、三国だ、あるいは手づくり花火だという形でつながっております。まさに、私たちの先祖が、江戸時代から、古くは弥生土器、縄文土器、さまざまな文物を通じて交流をしていたわけですが、近いところでも数百年の時間軸で十分交流をしていて、私たちはその恩恵を受けております。それなら、花火サミットをやろうというご意見がございま

した。こういうことはまだたくさん出来るのではないかと存じます。

それから、さまざまなすばらしい歴史・文化資産を点として受け継いでいるのだけれども、一堂にそれをお知らせすることがうまくできていないのではないかと、何か良い方法があるのではないかというようなご意見もございました。

さまざまなお考えを集約しますと、次の3点にフォーカスすることができました。

1つ目は、歴史文化を大切にし、NHK大河等の追い風を逃がさないようにしようということです。後継者難など非常に困難な状況に対して果敢に挑戦しながら、私たちは、民俗文化遺産を守っていく必要があります。

幸いなことに、それらがマスコミに取り上げられております。今は信州が真田丸ということで、三河・遠州の戦場を含めまして、武田信玄や徳川が入り乱れたあの時代がクローズアップされています。来年は「おんな城主－直虎」。まさに、この地域が主場面といいましょうか、主戦場になるわけですね。こういった機会を上手に捉えていきましょうということでございます。

2つ目は、その守っていく運動は、「道」を介してということです。やはり連携、特に、SENAの枠組みが中心になりますと、それぞれのしっかりとやってくださっている活動をつなげていこう、連携していくことなどでございます。

3つ目には、日本遺産です。漠然とした話ではなくて、三遠南信地域の歴史や風土、文化をストーリーにまとめて、日本遺産として登録する活動を目指していきましょうということでございます。

以上、3つのポイントに集約されるに至った次第でございます。

以上をもちまして「風土」の報告とさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

## ■ 「山・住」合同分科会

コーディネーター／豊橋技術科学大学

大貝副学長



ご紹介いただきました豊橋技術科学大学の大貝でございます。「山・住」合同分科会のコーディネーターを務めさせていただきました。

今年の「山・住」合同分科会は、「安心して住まうことのできる持続可能な地域づくり」というテーマをいただきました。主要には、この中山間地域での移住・定住をどうやって進めていくか、これがメインのテーマになります。参加いただいた皆様は、市長村長が8名、商工会議所の会頭が1名、住民団体から2名、総勢11名で意見交換をさせていただきました。

限られた時間ではありましたけれども、活発な意見交換が行われて、大変有意義な会になったのではないかと思っております。

まず、NPO法人てほへの副理事長であります大脇 聰様より、「奥三河・東栄町で育まれた26年の軌跡～地域を愛し、土地に根ざす覚悟が未来を創造する～」という題で、みずから活動をされてこられた中での経験をもとに、移住・定住の心構え、あるいは、この三遠南信地域の中山間地域特有の魅力を発見し、それを発信していくことについて、ご報告をいただきました。

大脇様ご自身、この三遠南信地域ではなくて、名古屋方面から、この三遠南信地域に移

住されてきて、もう26年活動されているという方でございます。そういった長きにわたる経験に基づいたご報告をいただき、大変貴重な機会だったと思っております。

続いて、分科会参加者の皆様から、さまざまのご意見をいただきました。移住・定住については、もうそれぞれの自治体のさまざまな取り組みを既になされているところでありますし、そういった実績も徐々に上がってきているというところであります。

そういった取り組みの中から、当地域を知つてもらう、あるいは訪れてもらう機会を創出することで地域へのファンを獲得し、それを契機として移住者を獲得するというような報告がございました。

それから、移住・定住を進めていく、あるいはそれを支援するためには、当然、その受け皿づくりが行政としての役割となってきます。具体的には、子育て支援や住居のあっせん、雇用という意味では、働く場所をどうやってあっせんしていくか、こういった事業がそれぞれ自治体で積極的に取り組まれているということです。そういった成果が徐々に具体的にあらわれて、定住・移住に結びついてきているということです。

ただ、こういったそれぞれの自治体が取り組んでいるわけですけれども、それだけでは、それを促進していくことはできないということでありまして、やはり、道路の整備、あるいはハードだけではなくて、ソフト面での公共交通ネットワークの整備、特にバス等、そういった整備・維持をしていくことも移住・定住のために必要であるというご発言もいただいて、これについては、この三遠南信地域の中で連携をしていく必要があるとのご意見が寄せられたということです。

以上のような意見交換を踏まえまして、今回の分科会としては、次の3点を確認させていただきました。

1つ目としましては、この三遠南信地域、特に中山間地域の持つ魅力的な地域資源や生活での利点、これは徐々に進んでいる道路整備によるアクセス等だと思いますけれども、そういったものを県内外に積極的に情報発信することで、交流人口の増加を図っていくということが第1点目であります。

2つ目としましては、この三遠南信地域だからこそできるライフスタイルというものがあるだろうということです。それを見出して、その地域内外にこれをPRして、そして、雇用の確保、子育て支援、住居の提供など、移住・定住に通じる事業を展開することで、安心して暮らせる持続可能な地域づくりを推進していく必要があるということです。

最後、3つ目としましては、先ほど申しました地域交通網の整備、あるいは情報通信、こういった社会基盤を維持していくことについては、単独の自治体ではなかなか困難なところもあるということで、ここについては、やはり近隣の市町村と連携しながら進めていく、維持をしていくということが重要だろうという、以上3つの点にまとめさせていただきました。

以上が今年の「山・住」合同分科会のまとめであります。分科会にご参加いただいた皆さん、改めて感謝申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

## ■サミット宣言 豊橋市 佐原市長

三遠南信サミット2016in東三河サミット宣言。

第23回三遠南信サミットin東三河では、「県境連携の蓄積を活かした三遠南信地域の創生～ともに生きる未来を目指して～」をテーマとし、各分科会において現状を確認し、課題解決のための今後の取り組みについて議論しました。

私たち三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）は、これまで築いてきた広域的な連携を活かした、時代に合った地域創生への取り組みや連携ビジョンの実現に向け、本日のサミットでの議論を踏まえ、県境広域連携の一層の発展のため、次の事項に重点を置き、事業に取り組みます。

1、三遠南信自動車道、新東名高速道路は、圏域内外の滞留を促す広域幹線ネットワークの形成に重要な役割を果たし、不可欠なものです。また、大規模災害時は、救援活動、物資の輸送、避難路及び救急搬送時にも利用されるなど、「命をつなぐ道」として地域に欠かせない社会基盤です。今後も豊かで質の高い地域社会の実現に向け、三遠南信自動車道の早期全線開通を初め、浜松三ヶ日・豊橋道路の早期実現、さらには、リニア中央新幹線の整備推進を目指し、三遠南信地域連携ビジョン推進会議を中心とし、地域一丸となった提言活動を進めます。

さらに、本地域の南北軸の交通基盤であり、中山間地域住民の重要な移動手段である飯田線の利用促進に向けた取り組みや広域的観光資源としての価値創造を図る活動を通じてリニア効果の地域への波及を導くとともに、住民生活の質の維持・向上を図ります。

2、三遠南信地域の創生に向け、輸送用機器産業など、多様なものづくり、産業集積を維持・強化とともに、成長が見込まれる健康医療産業や航空宇宙産業など、将来を担う新産業について、産学官金の広域連携に基づく戦略的な育成により、地域での質の高い雇用を創出し、地域経済の活性化を図ります。また、本地域内の大学と行政、企業との連携により、地域産業を担う人財の育成を目指したアクションプランを進めます。

3、三遠南信地域への新たな人の流れをつくるため、民間団体とも十分に連携し、自然、歴史、文化、産物など地域資源に加え、平成29年 NHK 大河ドラマ「おんな城主 直虎」を活かした取り組みを進め、持続的な交流人口の拡大を図るとともに、Web 上で特色のある地域産品を紹介するアンテナショップなどにより情報発信力を高めます。

また、本地域で大切に受け継がれてきた貴重な無形民俗文化財を活かし、日本遺産の登録を目指します。

4、三遠南信地域の特性を活かした暮らし方や働き方、さらには子育てなど、ライフスタイルに関する情報発信体制の強化により、交流・連携事業を推進し、中山間地域などへの移住・定住の促進につなげます。

また、安心して暮らせる地域づくりに向け、広域的または局地的な災害に対応する県境を越える防災の連携体制の強化に取り組みます。

5、三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）は、事業部会の活動を通じて連携ビジョンの確実な進捗を図ります。また、地方創生への対応など、圏域の課題に対して連携して取り組むことのできる体制の整備を目指し、本地域に適した広域連合のあり方について、速やかに研究会を立ち上げ、平成28年度の実現を目指として各自治体間の協議を加速します。

あわせて、全国のほかの県境地域とも連携し、県境を越えた地域政策のさらなる展開を促進します。

これらの取り組みをここに集うすべての主体が確認し、第23回三遠南信サミット2016in東三河のサミット宣言といたします。

平成28年2月15日

三遠南信地域連携ビジョン推進会議  
三遠南信サミット2016in東三河



## ○次回開催地域挨拶

飯田市 牧野市長



ただいま紹介いただきました飯田市長の牧野でございます。次期開催地を代表いたしまして、一言ごあいさつをさせていただきます。

本日は、三遠南信連携の最大の行事でありますこのサミットが、このように圏域の大勢の皆様方ご参集のもと、熱い議論が交わされる中で開催されましたこと、本当にうれしく、また、ありがたく思うところです。参加された全ての皆様方に敬意と感謝を申し上げます。また、こうした場をしつらえていただきました佐原市長を初め、裏方の事務局の皆様方におかれましても本当にお疲れさまでした。

さて、今回も大変熱い議論が交わされ、また、それを受けた形でサミット宣言がなされました。サミットが23回の積み重ねをしているその間、時代が大きく変わってきたのは、ご案内のとおりです。日本全体が人口減少、少子化・高齢化という大きな時代の波に洗われるその一方で、私たちのこの三遠南信地域におきましては、三遠南信自動車道、そして、浜松三ヶ日湖西豊橋道路（浜松三ヶ日・豊橋道路）の将来に向けての取り組み、そして、リニア中央新幹線に向けての取り組み等々、非常に大きな交通インフラプロジェクトが、着実に進んできております。

そうした中で、歴史も文化も本当に豊かな

この三遠南信地域におきまして、更なる広域連携を図っていく、その必要性を改めて感じているところであります。少し前に浜松市の鈴木市長と豊橋市の木村副市長との3人で、まち・ひと・しごと本部に出向きまして、「広域連携の取り組みに対して、ぜひともご支援をお願いしたい」と申し上げたところ、「そういうことであれば、当然、そうした広域連携の取り組みをやっている三遠南信にも目を向けていきましょう」というお話をいただきました。

時代は、まさに加速していると言っても過言ではありません。国との関係をしっかりと確保していくためにも、私ども行政としましても、更なる連携の強化を図っていかなければいけないと痛感しているところです。先ほどのサミット宣言におきましても、これから研究会を立ち上げて、早急に、どのような形でこの広域連携を進められるかということを話し合い、そして、浜松市長あるいは豊橋市長からもお話がありましたように、国と地方との関係におきましても、まさに県境域を乗り越えた連携が可能であるということを、この三遠南信から全国に発信していくことができれば良いと思うところです。

次回は私ども南信州地域で開催させていただきますが、それまでの間に、ぜひともそうした考え方をさらに煮詰めていただき、次の開催のときには、「私たちはここまで取り組むことができるのだ」ということを発信していくことができれば良いと思います。どうか皆様方のその熱い思いをこれからも持ち続けていただき、次回の南信州における三遠南信サミットでまたお会いできればと、そのように思っております。

今日は本当にありがとうございました。またこれからもどうかよろしくお願いいいたします。

## 10 交流会

*San·En·Nanshin Summit 2016 in Higashimikawa*

### ■ 交流会の様子



### ■ 観光連携事業



### ■ 地域物産展示



### ■ 「和太鼓」



## 11 三遠南信地域住民セッション 要旨

*San-En-Nanshin Summit 2016 in Higashimikawa*

### ■開会挨拶

原田代表世話人

みなさん、こんにちは、今日は寒い中、遠いところからお集まりいただきましてありがとうございます。



今回で三遠南信サミット住民セッションは 11 回の開催となります。これまでには住民セッションをどのような方法で進めていくのがいいか、当初から課題になっていました。これまでにいろいろと模索をしていく中で、まとまった組織を作っていくという話になり、2012 年 6 月 1 日に三遠南信住民ネットワーク協議会ができました。これで住民ネットワーク協議会として主催する住民セッションは 4 回目になりました。

これまでの 3 回につきましては、3 地域の様々な団体の活動がどのように展開されているのかを互いに知ることや、それをもとに団体どうしの連携やネットワークを強化していく機会とするために、住民セッションを開催してきたように思います。その形式で東三河、南信州、遠州の順で一巡して 2015 年度に再び東三河での開催となりました。

今回はかねてから話題になってきたサミット分科会において、私たちは住民団体代表として参加していますが、発言者個々の所属団体の立場から発言していました。そのことにもどかしさがあったり、分科会の中での議論に物足りなさを感じたりすることが共通する思いとなっていました。

実は今回は、住民ネットワーク協議会世話人会で事前に検討し、今回は住民セッションでまとめた内容を分科会で発言し、そ



うすることで分科会そのものにも新しい空気を入れることができるのでないかと考えが一致しました。

今日このあと、どの程度内容を詰めていくことができるかは実際に始めてみないとわかりませんが、有意義な住民セッションとしてゆきたいと思います。

### ■第 1 部 協議会事業中間報告

平川世話人

#### 1. 世話人会の開催

協議会の円滑な運営を推進していくために、これまでに世話人会を 5 回開催しました。本年度中にあと 1 回開催予定となっています。

#### 2. 活動のマッチングの場づくり

三遠南信地域の住民団体による連携活動を通じた「連携」と「協働」を進め、地域資源の活用や継承、再発見するための研修事業を実施しました。開催地は各地域 1 ヶ所ずつとし、東三河は 2015 年 5 月 17 日(日)(受入)、南信州は 8 月 2 日(訪問)、遠州は 12 月 6 日(訪問)に実施し、計 3 回開催しました。



### 3. 連携プロジェクト推進に向けた取組

#### (1)祭り街道連携プロジェクト

伝統芸能などの「祭り」をコンセプトに、高速道路（東名、新東名など）や国道、県道などの街道をつなげて、「道の駅」「観光資源」をネットワーク化することやアンテナショップなどで PR していくための調査・研究を進めた結果、国土交通省浜松河川国道事務所から「三遠南信地域基礎資料収集業務」を受託しました。本年度の調査地域は遠州地域を対象としています。現在取りまとめ中です。

#### (2)地縁店展開プロジェクト

地域拠点構築のための「モノと地域」の情報発信事業として、公的な支援など事業費の確保に努力しながら、「地縁店」展開事業を実施しました。しかしながら、7月に入り地域拠点であった「遠江特鮮市場」（浜松市）が閉店し、地域拠点での情報発信等は終了することとなりました。

#### (3)アート街道プロジェクト

三遠南信地域の文化情報の発信と「アート街道プロジェクト」の一環として「志多ら全国ツアーアップの大地」公演の開催協力を行うとともに、公演会場で三遠南信地域のPRにも参加協力しました。（2015年5月29日に新城市にて開催・千秋楽）。

### 4. 会員相互の情報交流

三遠南信住民ネットワーク協議会総会や三遠南信サミット住民セッションなどを通じて、会員相互の情報交流の場を設けました。また、住民団体の事業に対して協議会が積極的に協力団体等となり、事業のPRや参加の呼びかけるために、公式ウェブサイト上で随時情報を発信しています。

### 5. 三遠南信サミット 2016 in 東三河住民セッションの開催

三遠南信地域連携ビジョン推進会議

(SENA) と連携し、第23回三遠南信サミット 2016 in 東三河の開催に併せて、住民セッションの企画、準備を行いました。また、サミットの分科会などに住民団体として協力しました。2015年度は、例年と異なり、2016年2月に開催されました。

### 6. 三遠南信住民ネットワーク協議会の財源確保の研究

活動資金の開発として、SENA 補助金事業に提案・申請し、活動費の助成を受けて事業を実施中です。国土交通省に対して「祭り街道」の連携事業を提案した結果、委託事業を受託することができました。

## ■第2部 全体討議

### 進行／原田代表世話人

#### 1. 趣旨説明

今回の住民セッションでは、住民団体に直接関係があるプログラムにサミット分科会（「道」「技」「風土」「山・住」の4分科会）があります。今回のサミット分科会で住民団体代表8名が発言するにあたり、各分科会テーマに沿って、事前に議論し意見をまとめておくことになりました。

そこで、住民ネットワーク協議会では、三遠南信サミット当日までに議論する場を設けて、十分な時間をとて意見交換しその成果をまとめるために、本事業を2回にわたって企画いたしました。

その1回目は、2015年12月12日に東栄町体験交流館のき山学校において「住民セッション事前ワークショップ」として開催しました。その時に発言内容に関するキーワードなどを拾い出し、8名の発言者を選出しました。そして世話人会での再検討を加えて、2回目が本日のこの場となったわけです。ここではその仕上げとなる話し合いを行う段取りとなっています。

では、進め方ですが、「道」「技」「風土」「山・住」の4分科会で発言する各2名計8名がその話題に沿った内容を考えてきましたので、ここでみなさんに報告します。報告後、会場のみなさんから気がついたアイデアなどをコメントしていただきます。それを加えたものを最終的な発言内容として取りまとめて分科会に臨むということになります。

以上のような形式で第2部を進めていこうと思いますのでみなさんのご協力をお願いいたします。

## 2. 発言内容報告

### 「道」分科会

NPO 法人地域づくりネット 山内代表理事

#### 【キーワード】

- ・サイクリングロード、サイクルツーリズム、トレイルランの都市部と中山間部の拠点づくり
- ・三遠南信基礎資料収集調査

浜名湖では日本風景街道ルートとしてサイクルツーリズムを進めており、自転車道の整備だけでなく、受入態勢などにも取り組んでいます。

2015年度には新東名高速道路の延伸に向け、国土交通省の社会実験で浜名湖サービスエリアの混雑が緩和されることが予想されることから、この点に着目しサービスエリアを多機能化させる仕組みづくりやゲートウェイ機能となることを期待して、ここから遊覧船と自転車を使って、一般道へ出て、浜名湖を船とサイクリングで楽しむ実証実験を実施しました。船、自転車、高速道路をうまく結びつけながら、浜名湖の風景・景観を楽しむための新たな動きを提



案します。

もう1つは、「三遠南信祭り街道」の地域を紹介していくことを道の駅等を利用していくことを考えています。地域のゲートウェイと見立てて、紹介していくための地域資源やコンテンツ、その方法を調査して提案します。

これら2つは、ともに1つの拠点として地域の中でどのように活かしていくのかを高速交通ネットワーク網と併せて考えるならば、より広域的な地域の連携が必要となります。

さらには、その拠点で観光客が情報を集めたり、またそこから観光客をどの方向に誘導させるかなどの仕組みづくりが重要になってくるでしょう。

道をどのように使うのか、そのための情報をどうやって発信していくのかを踏まえて2015年度については、遠州地域を調査しています。

今後は、奥三河などの東三河地域や南信州地域にも調査範囲を広げていくことを想定しています。山、川、海がつながり楽しめる地域にしていくために調査研究を進めなければと思っています。

### 鞍掛山麓千枚田保存会 小山会長

#### 【キーワード】

- ・サービスエリア、パーキングエリア、道の駅を活用した地域観光拠点づくり

私たちは道路を使って地域をどう活性化させるかをいろいろと模索しました。いまは大変な異変が起こると思います。特に奥三河地域です。今回の新東名高速道路が開通して、新城市内、豊川周辺にも異変が起こっています。



私が見ている限り、大阪や三重県からの来訪者は、現在、浜松いなさインターチェンジか三遠南信自動車道・鳳来峡インターチェンジを利用して四谷の千枚田やうめの湯、とうえい温泉、茶臼山高原などの奥三河の観光地を周遊する傾向にあるようです。四谷の千枚田を事例にしても、観光客はじわじわと増え、2014年の1年間を見ても約5,000人増の25,000人の訪問者がありました。高規格道路開通の効果が出たと考えられます。

ですからこの効果をどのように活かすかです。これまで縮こまっていた奥三河を活性化させるには我々の力が必要となります。

例えば、自転車を使った地域資源をめぐるサイクリルツーリズムはどうでしょうか。四谷の千枚田では、グループになって自転車で訪れる観光客をよく見かけるようになりました。この自転車による周遊で奥三河に好印象をもってもらえば、その情報はどんどん広がっていくことと思われます。そのためにはやはり拠点づくりが必要です。

新城市鳳来地区には「ふれあいパーク」という利用頻度の低い公共施設があります。ここを拠点にして、車を駐車してもらいそこから自転車で周遊してもらうのです。また道の駅などの各地施設ともタイアップして拠点を作っていく方法を考えるのも必要ではないでしょうか。

#### 【フロアからの主なアイデアなど】

- ・自転車用ラック（駐輪機）の設置を促進し、三遠南信地域全体に拡大。
- ・新城インターチェンジや道の駅周辺の道路混雑が予想されるので渋滞情報発信のしくみづくりが必要。
- ・新城市にある旧サイクリングターミナルなどの遊休施設の再活用。
- ・ツールド新城の広域的なコース拡大。

#### 「技」分科会

NPO 法人森づくりフォーラム

原田副代表理事

#### 【キーワード】

- ・自然エネルギーの地産地消と雇用創出の取り組み提案

三遠南信の中山間地域は、再生可能（自然）エネルギーを生産、消費することに適しているところで、その体制を整えていくことで地域の活性化につながる可能性があることを提案したいと思います。例えば2年ほど前に「里山資本主義」という書籍がベストセラーになりました。先行事例に取り上げられたそれらの地域と三遠南信の中山間地域は共通の要素を持っていることがヒントになると思います。利用できるものとしては太陽光、小水力、風力、バイオマスなどいろいろあります。これらを地域の活性化につなげるポイントはお金を外部に流出させないことが1つのポイントと言われています。その地域に住んでいる人たち自身が発電事業を起こし、それを使っていく仕組みを地域住民自身で作る必要があります。つまりエネルギーの地産地消ということになります。



徳島県佐那河内村は、人口約2,500人、税収は1億2,000万円です。村で消費している電力は約8億円だそうです。この8億円を電力会社に支払ったりして外部に流出させずに、地域内循環させることを目標にしたことがニュースになりました。

そのような考え方をもって地産地消を進めていくとよいのではないですか。

もう1つのポイントは、できるだけ小規模で作っていくことです。広くても旧町村単位程度が理想です。さらにバイオマス（特

に熱エネルギー）の場合は、集落単位程度の範囲で行っていくことがいいでしょう。

形態としては、住民自身が主役となっていくわけですが、株式会社やNPOでもいいです。それを行政はサポートし、都市住民や企業は協力するという連携体制を三遠南信のいくつかの地域で作るのがいいのではないかでしょうか。

そういうことが実行できれば結果として、地域に雇用が生まれるのではないかでしょうか。

#### 天龍村柚餅子生産者組合 関組合長

##### 【キーワード】

- ・生きるための生活の技（知恵）を身に着けるための取り組み
- ・祭り街道弁当

私たちの住んでいるところは3県の境、佐久間ダムの上流で800余年の歴史ある隠れ里です。武士の携帯食であった柚餅子づくりを43年間、三遠南信の交流も同時のお世話になって参りました。



店も自動販売機のなく中性の生活は地産地消そのものです。新しい産業、コンピュータの時代ではありますが、豊かな自然の中に先人の残してくれた暮らしの知恵は生きる力が詰まっていることも伝えてゆきたいと思います。

急峻な地域に生きているイノシシやシカだけではなく私たち人間にも病気やケガを治す力を持っていること、それを補うものが自然の中に草や木、竹などにあり、その価値が大きいことも見直してほしいと思います。

祭りで神様にお供えする物も時期に穫れる物、それが身体によいとされる物なのです。私たち南信州交流の輪ではこの本物の

食材と物語を祭り街道弁当として南信州のブランドにしたいと思って取り組んでいます。祭りと同時に食文化も郷土食として伝承していくべきだとどうか皆様も一緒に考えていただきたいのです。

祭り街道弁当のイベント時には浜松や豊橋から多くの皆様がおいで下さりありがとうございました。

#### 【フロアからの主なアイデアなど】

- ・他の地域では小水力利用が進んでいるが三遠南信地域はあまり活発ではないようなので利用促進を促すことが必要。
- ・地域の祭りの時に食べられる祭り弁当があるとよい。
- ・草木を使った器を弁当に採用し付加価値をつける。

#### 「風土」分科会

無形民俗保護団体連絡会事務局 上嶋次長

##### 【キーワード】

- ・民俗芸能保存団体のネットワークづくり

三遠南信はいわゞと知れた日本の中世の民俗芸能がそのまま残っているところです。全国に類を見ない国や県、市町村が指定した無形民俗文化財がたくさんあります。



この根底にあるのは伊那谷の文化で、東三河、遠州、南信州の3つのエリアで独自性を持ったものに変化して存続していますが、現状を見るとどの地域でも多くの問題を抱えております。つまり中山間地域の少子高齢化と限界集落化の問題が民俗芸能の継承を危機的な状態にさせている現実があるのです。この地域の民俗芸能は、日本遺産や世界遺産として十分に価値あるもので、

それを支える地域基盤が揺らいでいるところが増えています。

そこで今回、三遠南信の民俗芸能の連絡協議会が立ち上がれることを提案したいと思います。浜松市は市町村合併して市内に国指定重要無形文化財を持つ地域になりました。こうしたことによって民俗芸能の保存と継承の必要性が再認識され、19団体によって無形文化財保護団体連絡会が設立されました。年に2回会報を発行したり、情報交換などの地域間交流などを行っています。2015年には南信州にも同様の団体が設立されました。

あとは東三河でも保存団体の組織化を進め、3つの地域の組織が足並みをそろえて三遠南信の民俗芸能の保存と継承活動を行うことが必要です。そうして連携することで日本遺産や世界遺産への登録申請を目指していくことができるのではないかでしょうか。

愛知大学総合郷土研究所 平川研究員

【キーワード】

- ・ジオパーク
- ・圏域における郷土の景観づくり

三遠南信地域は、豊川・天竜川流域圏や中央構造線（大断層帯）など地理的特徴を持ち、豊富な自然資源（地形や地質）によって美しい景観が形成され、また、民俗芸能などが数多く伝承されるなど、共通の地域文化圏となっています。それらを保全し、活用する取り組みとして、1つめに地質遺産（ジオサイト）に着目した「ジオパーク」構想があり、日本各地で推進されています。現在、三遠南信地域でも南信州が認定され、東三河が準会員（申請準備中）です。

2つめに、2014年度に文化庁が創設した

「日本遺産」です。歴史的特色を文化財と結びつけた取り組みで、遠州では広域行政の一環として連携した取り組みが検討され始めたようです。

どちらも自然資源や文化財を保全、保護するだけでなく、地域資源どうしを関連させ、物語性（ストーリー）を持たせた上で、観光や教育などに活用することで地域の活性化を図ることが目的となっており、行政、経済界、住民団体が一体となった体制をつくり、取り組むことができればと思います。

【フロアからの主なアイデアなど】

- ・小学校が文化の拠点になっている設楽町田峯地区の歌舞伎を見物して、伝統芸能の情報をもっと発信する仕組みが必要。
- ・中央構造線の重要さをPRすることが必要。

「山・住」合同分科会

NPO法人てほへ 伊藤理事長

【キーワード】

- ・将来のUターン者につながる地域の教育



東栄町をはじめ三遠南信地域の中山間地域は、人口減少が続いている。人口を維持するためにはI・Uターン者を受け入れて人口を増やすことが最も重要な課題です。中山間地域に位置する東栄町での居住は、就労しての定住には限界がありますが、近年、新東名高速道路や三遠南信自動車道が開通したことでのアクセスがよくなったりことにより通勤範囲は拡大されたと思います。ベッドタウンとしての機能も期待されて、単身者用の公営住宅などが建設されるなど移住者の受け入れ体制もできつつあります。



東栄町へのIターン者として「和太鼓集

「団志多ら」の事例があります。そして、志多らを支援する住民や友の会が設立した「NPO てほへ」で現在活動しているスタッフ4名はIターン者です。また、2015年にオープンした東栄町体験交流館のき山学校内にある「Café のつきい」のスタッフは「東栄町空き家」に応募した若いIターン者2名のお母さんたちもパートとして勤めています。

このように東栄町としてもIターン者を受け入れたという実績があり、I・Uターン者との相互理解ができるような環境づくりを地元住民が作ることも大切なことです。

そして東栄町は3年ほどの間に9軒の空き家住宅の入居者を募集しました。その条件として地域の行事に参加することなどを前提に受け入れました。そういうことによつて人口減少は、微減から横ばいに変わりつつあります。

これから私たちがやっていきたいことは子どもが都会に出て行くだけでなく、地元の良さを理解してもらって学校を卒業してUターン者としてまた帰ってくる教育や地域づくりを実践していきたいと考えています。

### 和合むら 吉田世話人

#### 【キーワード】

- ・地域（地元）による移住者受け入れのしくみづくりと仲介者養成

私の和合むらという団体は地域の特産品や伝統食を企画、製造、販売しています。私はIターンで阿南町和合地区に移住して17年が経ちます。17年前というと現在とはかなり状況が変わってきています。その当時は、田舎に移り住んでくる人はどんな変わった

人なのかと思われていました。今のように



温かい目で地域に受け入れられたわけではないという印象もあります。17年間の中で、いろんな人が、私が住んでいる和合地区に移り住んできて、そしてまた出て行ってしまった人、住み続けている人もいます。

私は和合地区に移り住んで、いいことばかりがあったわけではありません。いろんなことがありました。どうしようもないときは、隣村のみなさんに精神的に助けてもらったこともあります。お世話になりました。

そのほか地域内にも外にも支えてくださる人たちがいるからこそ、一度も和合地区を離れたい、出たいと思ったことはありませんでした。

特産品を作っていく事業は、やめるきっかけがないし、ほそぼそとでも続けてきています。それが私の1番の励みになっています。

各家々では、失われつつあるこれまで伝承されてきた百姓の1年の暮らしがあって、その中で食文化があり、地域のお祭りなどが残っていて、それらすべてを切り離して考えることはできません。そういうことの尊さを次につなげていきたいという思いがあります。

自分にできることは限られていますが、伝統食に基づく特産品を販売し広めていくことを細々ながら続けていくことでその道の先輩方に巡り逢い、今後も魅力ある三遠南信の文化をつなげて情報を発信していく



たいと思っています。

#### 【フロアからの主なアイデアなど】

- ・地元の良さなどを学校行事の中で教えることの必要。
- ・地元のヒトを訪問し、暮らしを見せる観光ツアーなどを企画。

### 3.まとめ

#### NPO 三遠南信アミ 水島理事

発言者の方の報告  
内容については、フロアから出されたアイデアや気づきの部分について以下の通り、まとめたいと思います。



#### 「道」分科会

- ・各拠点で、広域情報の共有化と発信方法の検討が必要である。
- ・遊休施設の再利用方法を考える。

#### 「技」分科会

- ・自然と共に暮らしてきた生きる知恵の価値観をアピールする。
- ・自給自足生活による人間の強さを活かした技も重要である。

#### 「風土」分科会

- ・すばらしい歴史文化や民俗芸能などを持ち、すべてが結びついていることを共通認識する。

#### 「山・住」分科会

- ・移住後の世話役や仲介者の出会いの場が必要である。
- ・個人や団体の興味に合わせた観光プランづくりとコーディネータ役を養成する。
- ・場所だけでなく、人やソフトも地域資源とする。

#### ■閉会挨拶

#### 天龍村柚餅子生産者組合 関組合長

本日のこの住民セッションでは東三河の皆様が工夫され語りやすい、聞きやすいよい企画にしてくださり本当によかったです。次回は南信州ということですが私たちこれから考えるところでございます。



今日もいろいろご発言がありましたようになたくさんあると思います。この三遠南信にはどこにもない日本の原風景とも言われる歴史や文化、民俗芸能があり大切なものとして守り伝えていきたいのです。

私たちも三遠南信のこのエリアの皆様の交流のおかげで支えられてやってくることができました。本当に感謝でございます。

次回は若い協力隊の力も借りて良い住民セッションができますように企画し、皆様においていただき祭り街道弁当をお昼に用意してお待ち致すようにしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

本日はご苦労様でございました。東三河皆様、本当にありがとうございました。



---

**第23回 三遠南信サミット 2016 in 東三河**  
**平成28年 2月15日 開催**

三遠南信地域連携ビジョン推進会議(SENA)

---